い男となり、野山を駈け廻り、獸狩りをして其日〳〵を送つた。ヤコブはその反對に至つて優しく溫和しい質で、常に天幕に住んで羊の番をしたものである。父は狩の獲物を食べさしてくれるエザウが好きで、母は却つて溫和しいヤコブを可愛く思つた。或日ヤコブが赤い豆を煮立てゝ居ると、エザウはぐた〳〵に疲れて山から歸つて來た、

「おい、その赤い煮物を喰はしてくれ。全く疲れちやつたよ」

と云つたけれども、ヤコブはオイソレと承諾しない。その頃の習慣で、長子には特別の權利があつた。それは果して如何なるものであつたか判然しないが、多分家督を次男の二倍ほど與へられるのと、本家の主人となつて、神がアブラハムにお約束になつた祝福を蒙れるのと、この二つであつたらしい。ヤコブは豫てよりこの長子權を欲しがつて居たものであらう。エザウの空腹につけ込んで

「豆はあげますが、その代りに長子權を私に賣つて下さい」

と云ひ出した。所でエザウは長子權なんか格別何とも思つて居ない。

「死なんばかりだ。長子權も何もあつたものじやないよ」

と云つて易々と承諾した。

「では誓ひなさい」

ヤコブが言ふと、早速誓を立てた。そしてヤコブの差出す煮豆を食ひ、酒を飲み、大切な長子權を賣飛したことなどは氣にもかけないで、そのまゝ立ち去つた。エザウの馬鹿け方も餘りと云へば餘りだが、然し利の爲に兄弟の愛情も何も構はぬヤコブの遣り口も決して讃めたものではない。

(3)イザアクとアビメレク—或年カナアンの地は又復饑饉に見舞はれた。イザアクは嘗て父と同盟を結びしフイリスチンの王アビメレクを賴つてゲララに往つた。都合を見てエジプトへ下る考であつたらしい。然し神はそれをお差止めになつた。

「汝エジプトに下ることなかれ、我が汝に示す所に居るべし、汝この地に旅客となれ、我汝と共に在りて汝を祝せん。是等の國を悉く汝と汝の子孫に與へ、汝の父アブラハムに誓つた誓を果すであらう。汝の子孫を殖して、天の星の如くなし、是等の國を汝の子孫に與へる、汝の子孫によつて天下の民は皆祝せられるであらう。そはアブラハムがよく我聲に從ひ、我誡と掟とを行ひ、格式と律法とを守つたからである。」

是に於てイザアクはゲララに留り、種を蒔いて其年百倍を得た。ヤウエの祝福によつて、いよ〳〵富み昌えて強く大きくなり、牛も羊も僕婢も夥しく所有せる所から、フイリスチン人は之を嫉み、アブラハムの在世中、僕等が掘つた井は皆土を投込んで埋めて了つた、アビメレクもまた、

「貴下は我等よりも強大ですから、立退いて下さい」

と云ひ出した。よつてイザアクはゼララを立つてベルサベエへ歸つた。其夜ヤウエは彼に顯れて曰うた

「我は汝の父アブラハムの神である。恐れるな、我汝と共に在りて汝を祝し、我僕アブラハムの爲に汝の子孫を增すであらう」と。

イザアクは其處に祭壇を築き、主の御名を呼び奉つて天幕を張り、僕等に命じて井を掘らせた。偶々アビメレクと其友オコザト、及び將軍フイコルがやつて來た。

「憎んで追ひ出したこの私の方へ何の爲め來たのです」

とイザアクが厭味を云ふと、彼等は眞劍だ。

「ヤウエが確に貴下と共に在すことを見たので、互に誓を立て、契約を結ばうと思つたのです。貴下は私等に惡事をなさいますな。私等も貴下のものに觸れず、貴下に害する樣なことは何一つなさず、ヤウエの祝福を浴せられたまゝ貴下を安かに去らしめたのですもの」

彼等はヤウエを禮拜して居たのではないが、然しアブラハム、イザアクの神の威力を認め、イザアクと契約を結んで置いて、せめては間接にその神の御保護を蒙りたいと欲したのである。

イザアクは彼等の爲に酒宴を張りて厚く待し、翌朝夙く起きて、互に誓つた。ちやうど其日にイザアクの僕等は來て、「井に水が出ました」と報告した。よつて其井にシバ（Sibah—豐な水量を意味する）と名けた。

創世記第二十一章にはベルサベエの名の起原を說明して、アブラハムとアビメレクとが互に誓を取換したからだ、と記してあるが、此處でも（第二十六章）イザアクとアビメレクの誓、井に水が出たので、シバと名け、それよりして町の名もベルサベエと呼ばれたと書き添へてある。アブラハムの時つけた名を、再びイザアクの時に固めたものであらうか。

ベルサベエはヘブロンの西南十里許りに位し、エジプトへの通路に當り、今は北の方ルド（Lud—昔のLydda）から鐵路が通じて居る。

ベルサベエの井

二個の古い井が現存する。一つは周圍十二メートル、深さは時によつて水面まで十二乃至十五メートル、水面下も五メートルに及んで居る。この井から西南に三百步を隔てゝ直徑五尺で、深さは大抵同一の井がある、兩者とも淸い冷い上等な水を湧かして居る。隨分古い井らしい。或はアブラハム、イザアクの穿つたものかも判らぬ。石造の井桁には幾十世紀前から水を汲み上げた綱の跡が遺つて居る。周圍には水槽をも備へてある。堅い石灰岩を穿つて是ほども深い井を掘ると云ふは、昔の人の根氣强さに驚かざるを得ない。

歎訓—エザウは皿一杯の煮豆と大切な長子權とを交換し、後に至つて泣き狂ひして悔しがつたが、現世の儚い財寶や、一時の空しい快樂を得んが爲に

天國の福樂を棒に振り、地獄に墮落してから、血の涙を飲んで悔しがる罪人こそ、このエザウの如きものではあるまいか。

第十五章　(一)父の祝福

(一)**イザアク老ゆ**—イザアクは老いて盲目となり、物の黑白も辨じ難くなつた。或日長子のエザウを召して

「俺はもう年老いた、何時死ぬか分らぬ身ぢや。お前は弓矢を執つて野に出で、何か獲物があつたら、それで俺の好いたものを調理して食べさせい。死ぬ前にお前を祝するから」

と云つた。この話を洩れ聞いてレベッカは狼狽へた。兄が弟に仕へることになるのは神の思召であるから、父の祝福は是非ともヤコブに受けさせねばならぬと思つたものらしい。そつとヤコブを呼んで、父のエザウに言つたことを告げ、兄になり代つて父の祝福を受ける樣に勸めた。

「私の言に從ひ、群の所へ行つて、上等な山羊の仔を二匹取つて來なさい。私が夫れでお父さんのお好きなものを拵へるから、夫れを持つて行つてお父さんに食べさせ、死ぬ前に祝福を戴く樣にしなさい」

「でもエザウ兄さんは毛深い人で、私は滑かです。お父さんに手探られたら、お父さんを欺すと見られ、祝福どころか却つて詛を頂戴するばかりでせうよ」

「詛は私が引受けるから、お前はたゞ私の言に從ひ、行つて私の言つたものを取つて來なさい」

ヤコブ父の祝福を受く

ヤコブは行つて、山羊の仔を二匹ほど引張つて來た。レベッカはイザアクの口に合ふ樣に甘くそれを調理し、夫れから自分の藏つて居たエザウの美服を着せ、頸と手には山羊の皮を纏はせその調理した美味とパンとをヤコブに與へた。ヤコブは父の前へ出て行つた。

「お父さん」

「おい、おい、お前は誰だ」

「私は長男のエザウです。仰せの通りに致しました。どうぞ起きて坐つて、狩の獲物を召し上り、そして私を祝福して下さい」

「どうしてそんなに早く獲物が手に入つたか」

「神樣の思召によつて、望む所のものが見付かりました」

ヤコブが甘く誤魔化さうとするけれども、何しろ聲が違つて居る。イザアクは不審に堪へない。

「此方へ近寄れ、お前が果してエザウであるか否か探つて見るから」

と云ふので、ヤコブは言はれるまゝに父に近寄つた。イザアクは盲探りに之を探つて見た。

「聲はヤコブの聲だが、手はなるほどエザウの手だ」

山羊の毛をはめて兄の手の如くなつて居るので、どうしてもエザウとしか思ひ得ず、終に祝福を與へることにした。

「お前は眞に我子エザウか」

「ハイ、私です」

「お前の狩りの肉を持つて來なさい。私はそれを食べてお前を祝するから」

イザアクはヤコブの持つて來た肉を食し、葡萄酒を飲み、命じて自分に近いて接吻させた。するとエザウの服の芳香を鼻に感じ、いよ〳〵エザウに相違ないと思つて祝福を與へた。

「是は我子の芳香！ヤウエの祝し給へる野の芳香の如し。願はくはヤウエ汝に天の露と地の腹とを惠んで、穀物も葡萄酒も饒ならしめ給へ。諸〳〵の民は汝に仕へ、諸〳〵の國は汝の前に平伏すであらう。汝兄弟等の主となり、汝の母の子等は汝に身を屈め、汝を詛ふものはその身も詛はれ、汝を祝するものは、その身も祝されよう」

(3)エザウの地團駄—ヤコブが出て行つたかと思ふ間もなく、エザウは狩の肉を調理して父の前に來た。

「お父さん、起きて私の狩りの肉を召し上り、そして私を祝福して下さい」

「誰だな、お前は？」

「私はお父さんの長子エザウです」

イザアクはびつくりして、我と我耳を信じ得なかつた。

「然らば誰だよ、先刻狩の肉を持つて來たのは？俺はもうその肉を食べて祝福を與へて了つたのだから其者が祝せられたのよ」

エザウは聞くなり大聲あげて男泣きに泣きながら

「お父さん、私をも祝して下さい」

と强請んだ。然し事の斯うなつたのは全く神の思召だと悟つたイザアクは、ヤコブの仕打を憎々しいとも思つて居ないらしい。

「弟が僞つて來て、お前の祝福を受けたのだもの」

と言つて、一旦彼に與へた祝福を取消さうとはしない。エザウはいよ〳〵腹を立て

「よくまあヤコブ（踵を取るもの）と名づけたものだ。俺を二度まで取り倒した。先きには長子權を奪ひ、今は又祝福までも窃みあがつたんだ」

と地團駄踏んで口惜しがりながら、猶父にせがんで止まない、

「私にも一の祝福なりお遺し下さらなかつたのですか」

「彼をお前の主と定め、兄弟を皆彼の支配の下に屬せしめた。穀物と葡萄酒とを彼に授けた。この上は

お前の爲に何が遺るか」

「でも一つの祝福なりお持ちじやありませんか。どうぞ私をも祝して下さい」

とエザウは大聲に泣いて仕方がない、イザアクも不憫に思ひ、

「お前の住所は地の腹に離れ、天よりの露にも離るべし。お前は劍を取つて世を渡り、弟に仕へるであらう。然し何時かはその軛を振落す時が來る」

と云つたが、果してその預言通りになつた。エザウとその子孫なるエドム人（イドメア人とも云ふ）は死海からアカバ灣に亘れるセイル（Seir）山中に居を定めた。爲にその山はエドム山と呼ばれ、後日この地方一帶はイドメア國の名を得た。北部は頗る豐饒な地で「健康地なるパレスチナ—Palæstina salutaris」と呼ばれるほどであるが、西部は岩石が突兀として寄りつかれもしない。聖地の沃土とは餘りに甚しき對照（コントラスト）を爲して居る。隨つて住民は自づと戰鬪や追剝や强盜を事とする樣になり、イザアクの預言を正しく裏書きしたものである。マラキア豫言書にも、神は「我れヤコブを愛しエザウを憎んだ。彼の山を荒し、嗣業を山犬に與へた」（一ノ三）と宣うて居る。その他アブディアス（三ノ四）、エレミヤ（四九ノ一六）等も同じ意味のことを言つて居る。

以前この國には穴居種族なるホレ人（Holéens）が住んで居たものであるが、エドム人の爲に一部は撲滅され、一部は併呑され終つた。エドムの勢力は北にも西にも山岳地以外に伸びた時がないではなかつたが、何れにせよイザアクの預言通りにイスラエル民族とは俱に天を戴かざる仇となり、絕えず干戈を交へたものである。後サウル（Saul）は之を破り、ダウィド（David）はその勢力を挫いて朝貢せしめた。然しエドム人は飽まで獨立を謀つて止まなかつた。預言者等は彼等を以てイスラエル及び神政々治の大敵と見做し、その殘滅を警告して居る。その預言はマカベー朝時代に至つて實現された、ユダス・マカベ（Judas Macabæus）は彼等を討つて大勝を博し、ヨハネ、ヒルカンはその國を併呑し、男子には强ひて割禮を受けしめた。然しユデア最後の王たりしヘロデ（Herode）はエドム人だつたので、是もイザアクの預言の實現と見るべきであらうか。アラビア人が興るに及んで、エドム人は彼等と混同して全くその衰跡を留めざるに至つた。

教訓—ヤコブが神に選まれてそのお約束を承繼ぎ、救世主の祖先ともなるべきことは、レベッカも疾く承知して居たことだし、長子權もヤコブが既に買取つて居たのだが、然しそれを實現させるには神の思召に一任して、時の至るのを靜に俟たなければならぬのであつた。然るに母子が事こゝに出でず、餘りに人間的な、むしろ不正な詐欺手段を以てその目的を遂げようとしたのは、決して讃めたことではない。爲に二人は長い間苦しい目を見た、レベッカはその愛子と生別したのが終に死別となり、ヤコブも伯父の爲に幾度も幾度も欺かれて、その罪を償はねばならなかつた。然し其等の不幸はヤコブの爲に修養を積むの基となり、神もまた彼が人に棄てられるだけいよ〳〵厚き御保護を加へ給ふの

であつた。

第十五章　(二)ヤコブ、ハランへ走る

(一)**エザウの怒**—エザウは弟の爲に父の祝福を横奪されたかと思ふと、悔しくて、口惜くて堪らない。

「今に見て居れ、お父さんが最後の目を瞑られたら、活かして置かぬから」

と切齒して居る。そのことを傳へ聞いたレベッカは大に恐れ、早速ヤコブを呼んで逃走を勸めた、

「兄はお前を殺して腹癒せをしようと考へて居る。だから私の言に從ひ、ハランへ往き、ラバン伯父さんの許に遁れ、兄の怒の鎭まるまで厄介になつて居なさい。もし兄の怒が釋け、お前の爲たことを忘れる樣になつたら、人を遣してお前を迎へ取るよ。一日の中に二人とも喪ふ樣なことがあつては大變だからね」

そしてヤコブのハラン行きをイザアクに承諾させるが爲、レベッカは嫁搜しに遣すと云ふ口實を持出した。エザウの妻へテの女には懲々して居る、もしヤコブまでがこの國の女を娶ることになつたら、もう生きて居られない、と云つてイザアクを說き付けた。イザアクも快く承諾して、ヤコブを傍近く招き

「お前はカナアンの女を娶つてはならぬ。メソポタミアのバツエルお祖父さん方へ行き、ラバン伯父の娘を貰ひ受けるがよい。全能の神樣はお前を祝し、お前に子女を多く得させ、お前の子孫を增して澤山の民となし、お前とお前の子孫にアブラハムの祝福を賜ひ、祖父に約束し給うたこの寄寓の地をお前のものとなし給へかし」

と今度は心からヤコブを祝し、前の祝福を確認した。

エザウは父が重ねてヤコブを祝し、嫁搜しにとて彼をメソポタミアへ遣し、カナアンの女を娶るなと言付けたことを聞き知り、自分の妻にせるカナアンの女を父が喜ばないのだなと悟り、既に二人の妻を持つて居ながら、更にイスマエルの宅を訪れ、彼の娘のマヘレト(Maheleth)を請うて妻とした。

(2)**天に達く梯子**—そこでヤコブは父母に暇乞をしてベツサベエを立ち、ハランへ向つて發足した。四日も歩いて日の暮れ方にエルザレムから二〇キロメートル(五里)許りも北に位せるルズ(Luz)と云ふ所に辿りつき、今日でもアラビア人がよくする樣に、手頃の石を枕にして、青天井の下に野宿をした。すると不思議な夢を見た、地に立てる梯子があつて、その頂は天に達し、そして神の使が夫れを昇つたり降つたりして居る。梯子の上には神樣が立つて居られて、ヤコブに斯う曰うた、

「我は汝の祖父アブラハムの神、イザアクの神なるヤウエである。汝が臥して居る地は之を汝の子孫に與へる。汝の子孫は地の埃の如くなりて、東へ西へ南へ北へと蔓り、汝と汝の子孫によりて地上のもろ〳〵の民は祝せられよう。汝が何處へ行つても、我は汝を保護し、汝を再びこの地へ連れ戻す

ヤコブの夢

であらう。汝に言つたすべてのことを成就しない間は、決して汝を離れまい」

ヤコブは不圖、目を醒して、

「此處にヤウエが在したのに、私は些とも知らなかつた。あゝ此處は何と云ふ畏れかしこむべき處でせう、此處こそは正しく神様の家、天の門であつたのだな」

かう云つて朝起きるや、枕の石を取つて碑に建て、神に献げると言ふ意味から夫れに油を注ぎ、其處を崇めて「ベテル—Bethel—神の家」と名づけ、神に誓を立てゝ曰つた。

「もし神様が私と共に在し、私の行く途中に私を護り、食べるパンと着る衣とを與へ、そして我父の家へ無事歸還さして下さいましたら、ヤウエを私の神となし、碑に建てたこの石を神の家と呼びませう、私に賜ふ物はその十分の一を献げますでありませう」と。

ヨズエ書(一六ノ二)にはベテルとルズを別々に並べて記してある。して見るとこの時ヤコブはルズの町外に野宿したものと思はねばならぬ。ベテルは今日ベイチン(Beitin)と呼ばれて居る。

(3)**原の井端**—ヤコブは猶旅行を續けてメソポタミアの唯ある原に辿りついた。原の中には大きな石を蓋した一個の井があつて、三群の羊が傍に休んで居る。羊の群が皆集つた上で石蓋を取つて水を飲ませ、飲み終るや再び蓋をすると云ふことになつて居たものである。ヤコブは牧者等に問うた、

「皆さんは何處の御方ですか」

「ハランのものです」

「ナコルの孫ラバンを御存知ではありませんか」

「知つてますとも」

「御無事でせうか」

「あア無事です。そら娘のラケルが群を連れて參りましたよ」

「日はまだ高い、家畜を小屋に連れ歸る時ぢやないでせう。早く羊に飲ませ、復牧場へ連れ行つては如何です」

「それは出來ない、羊が皆集つた上で、石を取り、羊に飲ませるのです」

斯う話して居る所にラケルが父の羊を連れて來た。ヤコブは自分の從妹だ、ラバン伯父の羊だと知るや、早速石蓋を取つて水を飲ませ、餘りの嬉しさにラケルに接吻し、聲を擧げて泣きながら、自分はレベッカの子だと名告つた。ラケルは急ぎ歸つて父にその事を告げたので、ラバンは走り出て之を迎へ、

抱いて接吻し、我家へ案内した。夫からヤコブに旅行の理由を聞いて、「お前は我骨、我肉よ」と云つて快く留め置いた。全一ヶ月働かして見ると、勤勉で、眞面目で、それこそ無類の良牧者だ、利己一天張のラバンは良いものが手に入つたと窃に北叟笑みながら、さあらぬ體にて、

「いくら兄弟だからとて、お前も無料では働きたくあるまい。何んな報酬が欲しいか」

と親切らしく言つた。彼には二人の娘があつた。姉をリアと言ひ、妹をラケルと呼び、リアは眼が弱く、ラケルは容姿の勝れて美しい娘であつた。ヤコブは始からラケルを愛して居たので、ラバンに答へた。

「七年間働きますからラケルを下さい」

「ウム、他人に遣るよりか、お前に遣つた方が可いよ、宅へ止れ」

とラバンは答へ、ヤコブを引留めて働かした。ヤコブはラケルの爲に七年間熱心に働いたが、ラケルを愛することの甚しい爲に七ヶ年の長い月日も數日の如くしか思はれなかつた。「一日千秋の思」がするはずなのに、どうしてヤコブだけが反對にその長い日子を短く感じたのであらうか。「それは勞苦に就いて言つたもので、愛の爲に勤勞七年も僅か數日としか思はれなかつたのだ」と聖オグスチヌスは解釋して居る。

いよ〳〵約束の七ヶ年が過ぎると、ヤコブは伯父に結婚を要求した。ラバンは多くの友人を招待してヤコブの爲に酒宴を催した。彼の地方の習慣で結婚式は夜擧げることになつて居て、新婦は頭からスボリと長い被布を被つて居るので顔は全く見ゑない。ラバンはそれを利用してラケルの代りに姉のリアを與へた。翌朝になつてそれが判つた。ラバンに苦情を申立てると、ラバンは平氣だ。

「この國の習慣として姉を措いて妹を嫁がせると云ふことはないものだ。兎に角七日間を過せ、ラケルもお前に與へるよ、たゞその爲には猶七年間働いて貰ひたい」。

ラバンの目的は、なるだけ長くヤコブをロハで働かしたいと思ひ、ラケルを餌にしたのである。父を欺いたヤコブは、伯父にして遣られたのだ。ヤコブは七日を過してラケルをも妻とした。ラバンはリアにゼルファ（Zelpha）と言ふ腰元を添へ、ラケルにはバラ(Bala)と云ふのを與へた。

リアとラケルは姉妹ながらも隨分と性格の違つた女であつた。何方かと云へばリアは敬虔で、超自然的で、温和で、忍耐強かつたのに反して、ラケルは餘り信仰も厚からず、我儘で、氣六かしい質であつたらしい。でもヤコブは初からラケルを愛して居たので、自らリアを疏外する傾があつた。夫れだけ神はリアを憐み、ルベン(Ruben)、シメオン(Simeon)、レウイ(Levi)、ユダ(Juda)の四子を與へ給うたが、ラケルには一向子が出來ない。ラケルは姉を妬み、「私にも子を與へなさい」と夫に向つて無理を言ひ、終には自分の婢のバラを夫に進め、之に子を産ませて我子にしようと言ひ出した。ヤコブはその言に從ひバラの腹にダン(Dan)とネフタリ(Nephtali)の二子を生ませた。するとリアはまたラケ

ルに倣ひ、ゼルファを夫に進めて、ガド（Gad）とアゼル（Aser）の二子を擧げさせ、自分も夫に續いてイサカル（Issachar）とザブロン（Zabulon）と別に一女デイナ（Dina）を生んだ。最後にラケルは一子を與へられ、之をヨゼフ（Joseph）と名けた。後でカナアンへ移つてからベンヤミン（Benjamin）を生んだ。斯くて男子ばかりでも十二人あつて、それが後日十二族の祖になつたのである。その中でも特に有名なのは專ら神に奉仕する司祭族の祖先になつたレウイ、長い感心な歴史を遺せしヨゼフ、ダウイド王及びメッシアの祖となつたユダである。

- リア
  - ルベン
  - シメオン
  - レウイ
  - ユダ
  - ザブロン
  - イサカル
  - ゼルファ
    - ガド
    - アゼル
- ラケル
  - ヨゼフ
    - マナッセ
    - エフライム
  - ベンヤミン
- バラ
  - ダン
  - ネフタリ

ヨゼフが生れた時は、ラケルの爲に働くべき契約期の終つた年であつた。ヤコブはラバンに歸國談を持ちかけた。然しラバンの爲には、こんなに得難い働き手を失つては大きな大損なので、なるべく之を引留たいと思ひヤコブに報酬を與ようと言ひ出した。

「お前のお蔭で神樣が私を祝して下さつたことを經驗した。でお前の方で報酬を極めてくれ、きつと支拂ふから」

「私が貴方の爲にどんな働をしたかは御存じで

せう。私が此方へ來るまで貴方の所有は僅少でした。今は大富豪になられて居る。私が參りましたので、神樣が貴方を祝して下さつたのです。私も今は我家の爲に計るが當然でございませう」

「然らば何をお前に與へようか」

「外には何にも望みません、たゞ私の言ふ事をお聽き下さいますならば、なほ留つて貴方の群を飼ひませう。即ち私は今日あなたの群の中を巡つて、凡て羊の中の斑なもの、黑いもの、山羊の中の斑なもの、白いものを選り分けませう、それを私のものにして下さい」

彼の地方の羊は常に白で、斑や黑いのは滅多に見付からぬ。却つて山羊は黑で白や斑の山羊と云ふのは餘り見ないのだから、ヤコブの要求は僅なものとしか思はれなかつたので、ラバンも喜んで承諾した。そして白毛の羊と黑毛の山羊とをヤコブの手に托け、斑なのは自分が引連れ、ヤコブの群と自分の群とは三日程も隔てゝ互に相交らぬ樣にし、以てヤコブの分け前がなるべく少くなる樣にと工夫した。

然しヤコブはなか〳〵賢い、抜目がない。楊柳や楓やプラタナスの杖を取り、所々の皮を剝いで眞白になし、一部は皮を着けたまゝにして之を水槽の前に立て、羊が水を飲みに來る時、之を眺めさせたので、群は斑や黑の仔を多く產んだ。ヤコブは早速その仔を引分け、そしてラバンの群の面

をその斑や、黑の羊に向はせ、自分の群は別に置いてラバンの群には入れなかつた。ヤコブはたゞ自分の群を多くなす工夫をした許りでなく、また春仔の方が強く健だから、秋の頃に枝を水槽の前に立てゝ自分の爲に健な仔を多く產ませ、春頃には さうしないで、ラバンの爲には弱い仔ばかりを產ませた。斯くてヤコブは四年の間に夥しい牛、羊、山羊、駱駝、驢馬、僕婢の持主となつた。

教訓—主は御自分に賴む人をお見棄にならない。困難の中にも、旅の空でも、何時にせよ、何處にせよ、保護して下さる。その爲にわざ〳〵守護の天使を一人づゝに附添はして下さるのだが、その守護の天使は、ヤコブが夢に見た天使の如く、我等の困難や、願望を携へて天に昇り、天からは必要な聖寵、身に餘る慰安なぎを持つて來て下さるのである。

第十六章　ヤコブの歸國

(一)—ラバンとその子供等はヤコブが大なる富を作つたのを見て嫉妬を起し、餘り良い顏を見せぬ樣になつた。

もう長居は無益だ、歸るにしくなしと思ひ、ヤコブはリアとラケルの心を探つて見た。二人とも大贊成だ。主もまた彼に歸國を促し、途中の無難を保證して下さつた。よつてラバンが羊の毛を剪るべく牧場に出掛けた隙を見計ひ、妻子は駱駝に乘せ、牛、羊、山羊等一切の財產を引纏めて窃にハランを忍び出た。ラバンは三日の後、その事を聞き知つて大に怒り、家人を提げてヤコブの跡を追ひ、七日目にやつとヨルダン河の左岸に位せる高い臺地で追ひついた。ラバンはブン〳〵怒つて居る。殊にラケルが父に隱して、窃にラバンの偶像を持逃けして來た爲め、いよ〳〵立腹して、何んなことを遣り出さぬにも限らなく思はれた。然し神はヤコブを保護して下さつた。ヤコブに追付く前夜、ラバンに現れて

「汝愼んで善きも惡しきもヤコブに言つてはならぬ」

とお戒めになつた。ラバンも流石に神の御戒には背き得ない。

「何故私に隱して潛に逃出たのです。もし知らして出立したら、歌と鼓と琴とを以て送るはずだつたのに」

とヤコブに溢したのみであつた。なほ偶像を窃んだと云つて、隈なく天幕內を搜索したけれども、ラケルが尻の下に隱して置いたので、終に見付け出し得なかつた。

ヤコブも今は默つて居られない。二十年間に亘れる自分の精勵、勤勉を數へ立て、ラバンがその間に十度も約束を易へたので、もしアブラハム、イザアクの神が自分と共に在さなかつたら、必ず裸一貫で叩出したであらう、と不平を鳴した。ラバンは終に折れた。是から後、互に爭議がない樣にと石を疊んで塚となし、その上で二人ならんで食事をなし、何方もこの塚を越ねて寇することあるまじと誓ひ、是を

ガラアド（Galaad—證據の塚）と名け、ラバンは二人の娘や孫に訣別の接吻をしてハランへ歸り、ヤコブはカナアン指して途を續けた。

(2)角力—ラバンの方はそれで濟んだ。是からいよ〳〵父母の里に近づくのだ、懷さは言はん方なしだが、然し兄エザウの怒を思へば、氣遣はしくて堪らない。二十年來、平和の便を俟つて見たが夫れらしいものは一度も來なかつた。心は不安に閉されつゝ足を運んで居ると、偶天使の群に出遭した。天の助がある、氣遣するには及ばぬとヤコブは大に勇氣づけられ、其處をマハナイム（Mahanaim—二重の陣）と名づけた。それでも猶人事の限を盡すに若くなしと思ひ、セイル地方を征伐に出掛けて居たエザウの許へ使者を遣して、自分の歸國を告げ、深く謙遜して宥恕を願はした。使者は馳せ歸つて、兄が兵四百を率る此方を指して進んで來る由を報告した。ヤコブは膽を潰し、妻子や家畜類を二群に分ち一群はエザウに害されても、せめて一群なりとも助かる樣にし、夫れから一心に神の御助を祈つた。

「あゝアブラハムの神樣、イザアクの神樣よ、主は私に、汝の地へ歸れ、われ汝と共に在るべしと仰せられました。私は固より御憐を蒙り、お約束通りにして戴くに堪へないものであります。私は杖一本でヨルダン河を渡つて行きましたが、今はこの二群の家畜を引連れて歸つて參りました。ごうぞ私を兄エザウの手よりお救ひ下さい。私は彼が來て、母と子供とを擊果しはしまいかと大層恐れて居ます、主は嘗て、お前を惠み、お前の子供を濱の砂の多くて數ふべからざるが如くなすと私に宣うたでせう」

斯う祈つた上で其夜はそこに寢み、それから兄エザウへの贈物として牝山羊二百、牡山羊二十、牝羊二百、牡羊二十、駱駝と其仔三十、牝牛四十、牡牛十、牝驢馬二十、仔驢馬十を僕に率かせ、群と群との間に相當の距離を保つて先へ進せ、もし途中で兄に遭つたら、この贈物を献呈し、ヤコブも後から同じ道を來て居る由を告げよ、と命じた。

斯くて翌朝未明に起きて家族と畜類だけはヤボク（Jaboc）の渡を向ふにわたし、自分ひとり殘つて居たが、誰とも知らぬ男が出て來て夜明まで彼と角力をした。その男はヤコブに勝ち難いと見て、彼が腿の關節に觸れると、忽ちその關節が外れた。やがてその男が「もう離せ、夜明になつたから」と云つた。ヤコブは早やその時、是はたゞの人間ではないと悟つたものらしい。

「私を祝して下さらでは離しません」

「其方の名は何と云ふか？」

「ヤコブと申します」

「否、是からはヤコブと言はないで、イスラエルと呼ばれようぞ。神と力競べをして勝つたのだから」

神にたいしてさへこんなに強いのだもの、況して人にたいしては如何に強いか知れぬ、エザウなんか恐れるに足りないと、この名を以て諭されたのである。固よりそれは天使であつた。そしてヤコブ

がその名を問うたけれども、それには答へないで、たゞヤコブを祝して立去つた。ヤコブは其地をフアヌエル（Phanuel—神のお顔）と名づけた、面と向つて神を見たからである。後ヤコブの子孫がイスラエル民族と稱するに至つたのは、ヤコブのこの名から出たのである。彼等はまたヘブライ人とも呼ばれて居る。それはアブラハムの祖先ヘベルから來た名であると云ふ人があり、ヘベルとは「踰ねた者」と云ふ意味で、エウフラト河を踰ねて來た所から出たのだと云ふ人もある。是はカナアン人の附けた名らしく、外人は常に彼等をさう呼んで居る。然し彼等は外人にたいする時の外は決して自らヘブライ人と稱して居ない。

(3)エザウと和睦す—太陽が東の杜の上にさし昇る頃、ヤコブは目を擧けると、果して兄のエザウが兵四百を率ゐて堂々と向ふからやつて來て居る。ヤコブは何とかして彼の毒手を遁れたいと思ひ、ゼルファとバラ及びその子供等を第一列に、リアとその子供等を第二列に、ラケルとその子供を最後にならせ、自分は眞先きに進んで七度エザウの前に平伏した。然しエザウが來たのは昔の怨を報いる爲ではなく、弟を喜び迎へる爲であつたのだ。早速ヤコブの首筋に抱きつき、之に接吻して嬉し涙に咽んだ。やがてゼルファ等の列が來て平伏し、次にリアの列、ラケルの列と次第に平伏した。エザウはヤコブの贈物を見て謝絶しようとした、

「何うすると云ふのか、俺は澤山持つて居る。そんな必要はない。お前が取つて置くがよい」

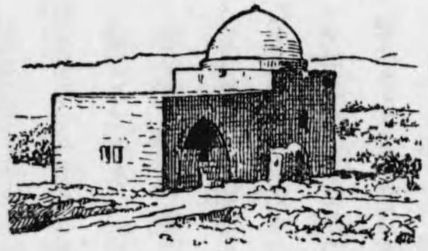
と云つて受けまいとした。然しヤコブは強ひて之を納めさせ、そしてエザウが一緒に歸らうと云つたけれども、婦人、子供、家畜を多く引連れて居て、迚も急ぎの旅は出來ないからと謝絶したので、エザウはそのまゝエドムの地へ引返した。

(4)ラケルの死—ヤコブはヨルダンの左岸、ヤボクの南、ソコト(Soccoth)と云ふ所に天幕を張り、夫れからヨルダンを渡つて、シケムに移り、金百枚を出して幾何かの土地を買ひ求め、其所に祭壇を築いて神を祀つた。

夫からラケル等が持つて居た偶像を殘らず取出させ、シケムの町外にあつた樫樹の下に埋め、其所を發足して、ベテルへ天幕を移した。神は再びヤコブに顯れて、

「殖ねよ、數々なれよ、多くの民と王とが汝より出ることになる。我はアブラハムとイザアクに與へた地を汝と汝の子孫に與へるであらう」

と宣うた。その頃レベッカはもう世を去つて居たものらしく、乳母のデボラはヤコブの歸國を知つて尋ねて來たものと見ゐ、一同がベテルに居る時永い眠に就いた。ヤコブは之に哀悼の涙を灑ぎ、ベテルの樫の樹の下に葬つた。なほ進んでエフラタ(Ephrata後のベトレヘム)に來た時、ラケルは末子のベンヤミン(Benjamin)を產んだが非常な難產で、その爲に自分は到頭生命を取られた。ヤコブは泣く泣く之をエフラタへ行く路の邊に葬り、墓標を立てた、「ラケルの墓の柱」と云つて今にその墓は殘つて居る。



ラケルの墓

(5)イザアクの永眠—廻り廻つてヤコブは漸くヘブロンなる父の許に歸りついた。ちやうどメソポタミアへ行つてから三十年目、ラバンの家を出てから十年目である。その十年間にヤコブは、ソコトなり、シケムなりから幾度も父を訪問したではあるまいか。シケムからヘブロンまでは僅か二日路に過ぎないし、デボラがベテルに來て居たしする所から以て見ても、さうらしく思はれてならぬ。

それからイザアクは十二三年を經て、齡百八十歳で亡き人の數に入つた。彼が六十歳の年にヤコブは生れたのだから、この時ヤコブは百二十歳で、エジプトに引越す十年程前、ヨゼフがエジプトの副王となる一年前のことである、死體はエザウと二人してマクペラの墓に葬つた。

教訓—イザアクの一生はイエズスの御生涯に頗る類似して居る。その誕生はイエズスの夫れの如く長く俟たれ、幾度もくりかへし〳〵約束され、その名は、世界の喜びとなつたイエズスの御名の毎く、兩親の喜び笑ひの種子となり、長じてはやはりイエズスの如く、父の意に從ひ、快く犧牲となるがため、その燒かるべき薪を脊負つて山上に登つた。なほアブラハムにせよ、ヤコブにせよ、幾人もの妻を娶つたのに反して、彼はたゞレベッカ一人を愛して他の女を識らなかつた所なぞは、イエズスと聖會との一致を立派に象つたものではあるまいか。

第十七章　ヨゼフの生立

(1)ヨゼフと夢—カナアンへ歸つた後のヤコブは舞臺面からその影を沒し、主としてその子ヨゼフを活躍さして居る。ヨゼフは愛妻ラケルの胎に生れた上に、氣質の順良な、心根の清い、しかも非常に利巧な兒だつたので、父が之を何物にも代へ難く思つたのも無理はない。十六歳の頃、ヨゼフはバラ及びゼルファの子供等と羊を飼ひながら、彼等の犯した醜い罪を父に告げたので、自分等の惡さは棚に上げて彼等はヨゼフの告口を憎々しく思つた。然しヤコブは一入この兒が可愛くなり、長い美しい上衣を之に着せ、何かにつけて、他の兄弟よりも心をつけてやるものだから、兄弟等は妬ましくて堪らない。もう優しい聲すら掛けなくなつて來た、さうして居る中に、ヨゼフは己が將來の運命を告げるのではあるまいかと思はれる樣な二の夢を見、正直にそれを父兄に物語つた。

「昨夜、私の見た夢を聽いて下さい、野に出て麥を束ねて居た樣でしたが、私の麥束がつと立ち上りまして、兄さん等のが周圍に寄つて來て、私の麥束にお辭儀をしました」

兄弟等は夫れを聽いて忌々しく思ひ、

「お前は我々の王樣になり、我々はお前の支配の下に服することになるのか」

と口汚く罵り、前にも倍かけてヨゼフを憎む樣になつた。間もなくヨゼフは又候夢を見た。

「太陽と太陰と十一の星が私にお辭儀するのを見ました」

と父兄に物語るや、父はそれを聽き咎めた。

「お前の見た夢は何を意味するのか、私もお母さんも兄さん等もこの世でお前の前に平伏すと云ふのか」

兄等の憎はいよ〳〵甚しくなつた。然しヤコブだけは、何だか意味ありげな夢だなと、默つて考へ合せて居た。

(2)ヨゼフ賣らる—時にヤコブは父イザアクとヘブロンに住んで居たが、十人の子供等は遙かに北の方シケムの原に羊を牧し、父の許にはたゞヨゼフとベンヤミンが留つて居るのみであつた。ヤコブは或日ヨゼフを呼んで、

「兄さん等はシケムに羊を牧して居る。お前は往つて、兄さん等は無事か、家畜にも別條ないか、見て來るが可い」

と命じた。十七歳位の少年で、たゞ一人、五十哩からある遠路を往復すると云ふは、可なりの大役である。然し根が利潑なヨゼフのことであれば、早速父の命に從つてヘブロンを發足した。シケムに辿りついて見たが、兄等は影も形も見ない。原の中を彷徨つて居ると、一人の男に出遭した。

「何を搜す？」

「兄さん等を搜して居る所です。何處に羊を牧して居るか、敎へて下さいませんか」

「さう、彼等は此處を立去つたよ、ドタインへ往かう、と云つて居るのを私は耳にしたから、多分、彼處に居るだらうね」

ドタイン(Dothain)はシケムから十五哩許りも北に當り、今日もテル・ドタン(Tell-Dotan)と呼び、清水が湧き、牧草の茂れる平野の端に高さ二十五乃至三十メートルの丘をなして居る。ヨゼフは辿り辿つてそのドタインに近いた。兄等はヨゼフが來るを遙に望み見て、

「おや〳〵夢見の先生がいらつしやつたよ。彼奴を殺してこの舊井に投込まうじやないか。父には猛獸が嚙殺したと言ふさ。すると彼奴の見た夢も何もならぬことが判るよ」

と話し合つた。然しルベンは流石に長兄だけあつて、それに贊成しない。

「殺して血を流すのは宜しくない、むしろこの空井に投げ入れ、そしてお前等の手を汚さない樣にするが可い」

と勸めた。空井と云ふのは口幅の狹い、底の深い穴であつたから、それに投込まれたら到底遁るべき道はない、餓死するばかりだが、それでも手づから血を流すより罪が輕いと云つたのである。兄弟にはさう云つたが、實は窃にヨゼフを引上げて父の許へ歸してやる考であつたのである。

斯る相談があつたとは夢知らず、ヨゼフは漸つと兄等を見當つて、やれ嬉しやと駈けつけるや、兄等

ヨゼフ賣らる

は「伏つて居たぞ」と云はん許りに直ぐ引捕へて上衣を剝ぎ取り、空井の中へ投げ入れ、善い氣味になつて晝食を始めようと草の上に据つた不圖目を擧げると、ガラアドからエジプトへ商ひに下る一隊のイスマエル人が―マヂアン人とも云つてある―駱駝に乳香等を負はせてその近傍を通りかゝつた。四男のユダが夫れを見て

「弟を殺してその血を隱したつて何の役に立つかね。このイスマエル人に賣つたら、我々の手も汚れないし、その方が上策だよ。我々の兄弟、同じ肉だもの」

と言ひ出した。皆が贊成したので、ヨゼフを井から引上げ、銀二十枚で賣り飛して了つた。モイゼの頃には若い奴隷の相場が正しくこの銀二十枚であつたのである。（レウイ記二七ノ七）

ルベンが居たらば、さうは爲せないはずだつたのに、生憎くと何處かへ往つて居たものだから仕方がない。兄弟等が立ち去つた後へ來て、ヨゼフを助けようと近づいて井の中を覗いて見ると、ヨゼフは居ない。悲みのしるしに自分の衣を裂き、兄弟等の所へ行き、

「坊主は見ゐぬ、俺は何處へ行かれよう」

と嘆いた。然し彼等は何とも思つて居ない。山羊を殺してヨゼフの上衣をその血に染め、人に托して父の許へ送り、

「御覽なさい、是を見付けましたが、ヨゼフのじやありませんか」

と言はせた。ヤコブは一目見るや、

「おや、是はヨゼフの上衣じや、さては猛獸が喰つたのだ、獸がヨゼフを喰つたのだ」

と忽ち衣を裂いて喪服を着け、長い間を泣きの涙で過した。子供等が皆集つて來て、色々と慰めようとしたけれども、

「俺は泣き死してヨゼフに遭ひに行く」

と云ひ、夜も晝も泣き明し泣き暮して、彼等の慰めを受けなかつた。

(3)プチファルの奴隷―商人等はヨゼフをエジプトに連れ行き、國王の侍衛長たりしプチファルと云ふものに賣つた。然しこの無罪な、心の清いヨゼフを神は何處までもお見棄にならない。ヨゼフ故にプチフ

アルの一家には慶いごとが次から次へと重つて、見る〳〵家は富み昌ゑて來た。主人もヨゼフを二つなきものと可愛がり、家事萬端を之に打委せ、自分はたゞ三度の食事の外は何一つ關係しない位にして居た。

ヨゼフは容姿の秀でた、愛嬌もあれば、才智も鋭い、夫れこそ人並勝れた美男子であつたので、ブチファルの妻はそれに迷つて、猥らなことを言ひ寄つた。然し容姿よりも一層心の清いヨゼフのことであれば、そんな汚らはしい勸めに應ずるはずがない。

「御前樣は私に一切を打托かせ、家に何があるか、夫れすら御存知ない位、たゞ私の手に御渡しにならないのは奥樣だけでございます。それに何うしてそんな惡いことをして、神樣にまで罪が作られますか」

と斷然拒絶した。それでも夫人は間がな隙がなヨゼフを挑んで止まない。或日ヨゼフがたゞ一人室内で事務を執つて居ると、又候はいつて來てヨゼフの上衣を捉へ、しつこく誘つたので、ヨゼフは夫人の手に上衣を遺して室を逃げ出した。

夫人も今は可愛さ餘つて憎さ百倍で、早速僕等を呼び集めて、ヨゼフが自分に道ならぬことを勸めた、自分が聲を出したら、この上衣を遺して逃げ失せた、と倒に言ひ立て、良人にも同樣に訴へた。ブチファルは妻の讒言を眞に受けて大に怒り、ヨゼフを捕へて牢舍に打込んで了つた。

(4)牢内のヨゼフ—ヨゼフは身に覺もない罪を誣ひられ、惡徒と共に眞暗い牢舍住ひをせねばならぬことになつた、然し「正直の頭に神宿る」で、牢舍の中でも神はヨゼフをお離れ下さらぬ、爲に牢の長官は大層ヨゼフを信用し、囚徒を殘らず彼の手に托け、自分は何にもしないで、萬事をヨゼフ托せにする樣になつた。

さうして居る中に國王の臣で、酒人の司と大膳の頭とが何かの罪によつて入牢して來た。或朝ヨゼフが牢内を廻つて見ると、二人とも常ならぬ顏色をして居る。

「何かしたんですか、お顏の色がごうもお惡い樣ですが」

「ハイ、實は昨夜二人とも不思議な夢を見たのですが、誰もその夢を解いてくれる人がないのです」

エジプト人は夢を以て神の訓示と信じ、よく卜者にその意味を判じて貰ふのであつた。然し今の樣に牢舍住ひをして居ては、自由に卜者に尋ねることも出來ず、困り拔いて居るらしい、

「夢を解くのは神樣の御助力によるの外はない。その夢を私に話して御覽なさい」

とヨゼフに促されて、先づ酒人の司が自分の夢を物語つた。

「私は夢に葡萄樹を見ました。それには三の枝がありまして、段々芽を吹き、花が咲き、實を結びました、私は王樣の杯を手に持つて居ましたから、その實を取つて杯に絞り出し、王樣に獻げました」

「その夢の意味は斯うです。三枝は三日のことで、三日の後に王様は貴下を思ひ出して、故の役にお取り上げ下さいますから、貴下は前々通り、王様にお杯を献げることが出來る樣になります。さうなりました時は、ごうぞ私のことを思ひ出し、王様に申上げて救ひ出して下さい。私はヘブライの地から漾はれて來たもので、罪なくしてこの牢舍に入れられたのですから」

ヨゼフが甘く酒人の司の夢を判じたのを見て、大膳の頭も自分の夢を話した、

「私は頭の上に三籠の白いパン粉を戴せて居ました。一番上の籠には、王様の爲に拵へた色々のお料理を入れてあつたのですが、空の鳥が來て、それを啄みました」

「その夢の意味は斯うです。三籠は三日のことで、三日の後に王様は貴下の首を斬つて棹の上に梟し、空の鳥が貴下の肉を啄むでございませう」

三日目は國王の誕生日であつた。王は盛宴を張つて之を祝ひ、宴酣にして二人の臣を思ひ出し、酒人の司を故の役に就かせ、大膳の頭は殺して棹の上に梟した。然し酒人の司は自分の幸運を喜んで、ヨゼフの依頼はすつかり忘れて了つた。

(5)國王の夢—夫れから二年を經て、今度は國王が一夜の中に二の夢を見た。二つとも何だか意味ありげなので、王は夜の明けるのを俟ち兼ねて、エジプトの博識、占ト者等を呼び集めて、その夢を判じさせたが、唯小首を傾けるばかりで、誰一人判じ得るものがない。その時酒人の司がやつとヨゼフのことを思ひ出して、王の前へ進み、

「全く失念して居ました。二年程前、臣と大膳の頭とが陛下のお叱を蒙り、侍衛長の牢舍に繋がれて居ました頃、二人とも變な夢を見ました。偶々牢舍にヘブライの青年が居まして巧にその夢を判じてくれました。夫れは全くその判じた通りになりました。私は故の役に就けて戴き、大膳の頭は棹の上に梟されました。彼の青年をお召しになつたら如何でございませう」

「それを呼べ」

と王の聲が掛つたので、ヨゼフは早速髭を剃り、新しい上衣を與へられて、エジプト王の宮殿に召出された。王はヨゼフを見るや、

「自分は夢を見たのだが、誰も判じ得るものがないのだ。聞くと其方は夢判斷をするのが極めて巧みだとか」

「王様に吉いお告をして下さるのは神様で、私ではございません」

「自分が河の岸に立つて居ると、肥ゐ太つた美しい七頭の牝牛が河から上つて來て、草を食んで居たと思へ。その後から非常に疲せこけた、未だエジプトに見た事もない程の醜い七頭の牝牛が出て來て、前の肥ゐ太つた七頭を食つて了つた。それでも腹は少しも變らぬ、やはり瘠せこけて醜いよ、と見た時夢は破れた。

「それから、うと〳〵と睡んだが、復夢を見た。一本の麥によく實つた穂が七つも出て居たのに、その後から、ひよろ〳〵に萎びた七の穂が同じ莖から出て來て、前の立派な瑞穂を呑み込んで了つた。夢は斯れで、占ト者にこれを話して見たけれども、誰も判じ得るものが居ないのだ」

ヨゼフは恭しく答へた。

「王様のお夢は二つとも一つで神様が是から爲さうと思召される事を王様にお告げになつたものと考へます。七頭の肥つた牛と七のよく實つた穂は七豐年を示し、七頭の疲せこけた牛と七の萎びた穂はその後に來るべき七凶年を見せたものであります。その順序は斯うなります。エジプト全國に大豐作が七年間續いた後に、非常な七凶年がやつて參りまして、全地は饑饉の爲に滅びんばかり、その凶作の甚しい爲に豐作の大なりしことも忘れて了ふ位でございませう。

「同じ意味の夢を二度も御覽になつたのは、神様のお定めが確定して居て、速に實現さるべき事を見せたものであります。されば王様の爲に計るには、今の中に賢い腕利きの人を擧げて之にエジプトを司らしめ、豐作が續く間に出來高の五分の一づゝを貯へ、續き來る七凶年の備をして置かれましたら、國が饑饉の爲に滅びる樣な事もないでございませう。」

滔々と少しの淀みもなく申上げた。ヨゼフの献策はファラオを始め、朝廷の百官の意に適つた。ファラオは一同に向ひ、

ヨゼフ副王となる

「神様の靈に滿された、こんな人を他に見出し得るだらうか」

と云ひ、それからヨゼフにも言つた。

「神様は夫れだけのことを其方にお示しになつたのだもの、其方ほど賢く慧い人はあるまい、今から其方は自分の家を宰り、人民はすべて其方の言ふがまゝに從ふであらう。自分はたゞ王の位だけ其方の上にあるのみだ……兎に角其方をエジプト全國の主宰となす」

斯う云つて、直ぐ印璽の指環を外して、ヨゼフの指に嵌め、貴人の着ける白布の服を纏はせ、黄金の鎖を頭にかけさせ、自分の次の輅に乘せて「下に居ろ、エジプトの大宰相様じや」と先拂ひをさせた。

夫れからヨゼフの名を改めて「サフナト・パネ

ア—Safnat Paneah—世の救ひ手」と呼び、ヘリオポリス(Heliopolis—太陽神の宮を以て有名な都市、メンフイスの北、ニール河の東岸に位す)の司祭プチフアレの女アセネト(Aseneth)を之に妻せた。時にヨゼフは年漸く三十歳で、兄等に賣られてから彼是れ十三年目、この十三年間を彼はプチファルの家と牢舍とで過したのであつた。然し神は彼の德に報いるが爲、一つは亦その家族をエジプトに移住せしめて、强大なる民となし、約束の地を征服する準備をなさしめんが爲、彼を拔出てエジプトの副王と云ふ高い地位に引き擧げ給うたのである。

教訓—兄等はヨゼフが偉くなつてはと氣遣つて奴隷に賣飛したが、ヨゼフはその爲に却つて偉くなつた。彼等が押し下げようとするだけ、それだけ高く上つた。神のお攝理ばかりは實に感嘆に餘あると謂はなければならぬ。

第十八章(一)兄弟と再會

(1)七豐年と七凶年—ヨゼフの豫言は文字通りに實現された。先づ七年間と云ふものは豐作つゞきで、毎年毎年の小麥の出來榮と云つたら、濱の砂にも比べらるべく到底數へも測りもされないほどであつた。ヨゼフは全國を駈けまはつて、町毎、村毎に府庫を設け、餘りの小麥は丁寧に貯へて置き、やがて來るべき凶年の備をなした。その間ヨゼフ一家にも慶いごとが起り、夫人のアセネトに二人の男子が生れた。兄はマナツセ(Manasse—忘却)と名けた。神が諸の患難を忘れさして下さつたと云ふ意味で、弟はエフライム(Ephraim—繁殖)と呼んだ。神が艱難の地に於て、子供を增さしめ給うたと云つて喜んだのである。

やがて七豐年が終ると、不作が續け樣にやつて來た。四隣の國々は恐ろしい饑饉に七顚八倒の苦を見るに至つたが、エジプトだけはヨゼフの注意によつて、各少からぬ貯蓄をして居たので、最初の間は食物に不自由がなかつた。然し貯への食物も何時しか喰ひ盡したので、國王に救ひを求めると、

「ヨゼフへ行つて言はれるまゝに致せ」

と萬事をヨゼフの一存に托せて居る。是に於てヨゼフは府庫を開いて盛に小麥を賣り出した。噂を傳へ聞いて隣國からも麥買ひが續々と押しかけた。

(2)兄弟エジプトに下る—カナアン地方もやはり今度の饑饉を免れなかつた。ヤコブ一家の如く夥しい家畜を有し、金銀を唸らして居る樣な富豪でさへ、食物が無いのには流石に閉口した。幸ひエジプトでは盛に穀物を賣出して居ると云ふ噂が耳に入つたので、ヤコブは子供を促して、

「何故そんなに顏を見合せて居る、エジプトでは小麥を賣つて居ると聞いた。干からびて了はない樣、行つて必要なだけを買取つて來ることにせよ」

と命じた。然し末子のベンヤミンだけは愛しいラケルの忘形見ではあるし、ヨゼフが亡くなつてからは特にこの子を又なきものと思つて居たものだから、途中で萬一のことがあつてはと氣遣ひ、家に留め置いた。

(3)ヨゼフ兄等を試る—十人の兄弟等は諸國の麥買ひと一つに打雜つて無事エジプトに到着し、ヨゼフの前へ出て行つた。もう別れてから彼是れ二十年ばかり、ヨゼフの年も四十歳前後で、身はエジプトの副王となり、飛ぶ鳥も落すと云ふ勢であるから、とても是が弟のヨゼフだとは見識り得ようはずがない。一同恭しくその前に平伏した。ヨゼフの夢がいよ〳〵事實となつたのである。然し兄等は年こそ老たれ、やはり素のまゝの牧者で、別段さう變つて居ない。ヨゼフは直ぐ夫れと見て取つた。たゞ不思議なのは季の弟を連れて來て居ないが、之も自分同樣に豪い目を見せたのではあるまいか。兄等の心は昔のまゝだらうか、一つ十分に試めして見ようと思つたものらしい。素知らぬ顏して、わざとエジプト語を用ひ、刺々しく詰問した。

「何者じや、何處から來たのじや」

「私等はカナアンの者で、麥を買ひに上つたものでございます」

「いや間者たらう。我國の際を伺ひに來たのに相違ない」

「決してそんな事はありません。たゞ麥を買ひに上つたものでございます。私等は皆兄弟で、何等惡企みなんか抱いて居る樣なものではございません」

「否さうではあるまい。國防の手薄な所を覗ひに來たものだらう」

「私等は十二人兄弟で、カナアンに住んで居るたゞ一人の父の子供であります。季の弟は父と共に遺り、一人はもう現世に在りません」

間者となつて他國の際を伺ふと云ふは、虎穴に跳り込んで虎子を捕へようとする樣な離れ業、そんな危い仕事に十人もの兄弟が揃つて一度に出て來るはずがない、と云ふことをヨゼフに覺つてもらひたいと思つて、家庭の事情までも打開けたのである。然しヨゼフは何時かな承知しない。

「いや何うしても間者としか思はない……よしお前等の言ふ所が眞であるか否かを試して見る。自分は王樣の生命をかけて誓ふ、季の弟が來るまでは此處を出ることはあるまいぞ。お前等の中から誰かを一人遣して季の弟を連れて來るのだ。お前等の言ふことが眞であるか僞であるか、それを知るまでは皆を牢舍に繫いで置く、その通り心得よ」

と言ひ渡した。ヨゼフは決して復讐の念に驅られて兄等を獄に繫いだのではない。たゞ自分の言ふ所は至極眞面目な話だ、と云ふことを彼等に思はせると共に、從來の仕打を篤と考へて、痛悔の胸を打たせる爲であつた。

(3)人質—三日の後、ヨゼフは彼等を牢舍から引出して、

「自分の言ふ通りにしたら、生命は全うし得るよ。自分でも神様を畏れる。決して不義なことはしない積りだ。果してお前等が他意なきものとするならば、人質として一人だけ殘り、他は麥を買つて國へ歸り、そして季の弟を連れて來る樣にせい。さすれば皆生命が助かれるじやないか」

と申付けた、兄等は承引したが、互に顏を見合せ、

「弟を虐めた罰だよ、彼が泣いて願つた時、その心の苦しさを見ながら、聽容れなかつたんだもの、その爲にこんな悲しい目を見るのだ」

と互に懺悔話を初めた。ルベンも

「言はないことか、子供に無理をするなつて、それを聽かなかつたんだもの、今こそ彼の血の報が來たんだよ」

と言つて口惜がつた。ヨゼフが通譯を以て話して居たので、自分等の言葉を分らぬものと思ひ、兄等はヨゼフの前でこんな懺悔話をしたのだが、それを聞いたヨゼフは、もう〳〵堪らなくなつたので、一寸身をかはして泣いた。暫くするとヨゼフは再び出て來た。皆の前でシメオンを縛らせて牢舍に打込み、係員に命じて兄等の袋に小麥を一杯つめ込み、袋の口には代金を入れて置き、旅の糧までも添へて歸國せしめた。途中で一人が驢馬に糧をやらうと袋を開けて見ると、代金がちやんと入つて居る。又どんな難題を言ひかけられるか知れぬと、一方ならず氣を揉んだが、今更どうすることも出來ないので、そのまゝ鄕里に歸つて父に一伍一什を物語り、さて麥を出さうと、袋の口を開けて見ると、何の袋にも何の袋にもお金がちやんと入つてあるので、皆大に怖れた。然し誰よりも心配したのは父のヤコブだ。子供等の話を聞くなり、大きな溜息をつき、

「お前等は俺を子供なしにして了つたのだな。ヨゼフは亡くなり、シメオンは牢舍に繫がれる。ベンヤミンまでも取り去らうとする、是等の不幸は皆俺の上に降るのだ」

と嘆いた。ルベンが色々に宥めて、

「もし彼兒を連れ歸らなかつたら、その代りに私の二人の子供を殺しなさつても構ひません。私の手に托けて下さい、請合つてお父さんの許に連れ歸ります」

と言つたけれども、ヤコブは頭を横に掉つて動かない、

「いや許さぬ。兄は亡くなつて、彼一人殘つて居るのに、もし彼地で萬一のことでもあつたら、お前等は、この白髮頭を悲哀の餘りに墓へ入らしめるのだ」

と言つて何うしても承知しなかつた。

(4)ユダの保證—エジプトから買つて來た麥も次第に喰ひ盡して殘り少になつたが、饑饉は容易に止みさうにない、ヤコブは弱り果てゝ再び子供等にエジプト下りを命じた。するとユダが進み出た、

「彼のお方が季の弟を連れて來なくちや顏も合さぬぞよ、と誓を以て言渡しなすつたのです。でベン

ヤミンを私等に伴なはして下さいますれば、一緒に行つて必要なものを買つて參りませう。さもなくば行きません。幾度も申しました如く、彼の御方が季の弟を連れて來ないでは、自分の顏を見ることは出來ないと仰しやつたのですから」

「何故、宅に弟が殘つて居るの何のと餘計なことを喋べつて、俺をこんな不幸に遭はせるのじや」

「彼の御方が、父は存命であるか、別に兄弟は居ないのかと、家庭の事情を順々に問はれたのですから、問はれるまゝに答へたのです。季の弟を連れて來る樣に命ぜられようとは、どうして知り得ませう！」

と子供等は答へた。その時ユダは深い決心の色を顯して言つた。

「ベンヤミンを私に托けて下されば私等は出立します。私等も子供も生命を繋ぎ得て餓死を免れませう。私が彼兒を引受けます。責任は私に問うて下さい。萬一私が連れ歸りませんでしたら、何處までも私かその罰を受けます。もし躊躇しなかつたら、疾くに歸つて來たはずでしたのに」

ヤコブも背に腹は代へられず、終に我を折つてベンヤミンを伴はせることにした。

「さう必要とあらば、お前等の望みのまゝにせい。國の名產として乳香、蜂蜜、楓脂香、液漿(Storax)胡桃、巴旦杏等を少し許り器に携へ行いて、其方に奉呈せよ、袋の口にあつた代金は何かの間違ひであつたらうから、今度は二倍の金を持ち、併せて季の弟も連れて行くが可い。願はくは全能の神樣は彼人の心を宥め、繫がれて居る兄弟とこのベンヤミンとを放ち歸さしめ給へ……私は子供を持たないものゝ如く孤獨で居るであらう」

(5)心盡の饗應—ベンヤミンを加へて十人の兄弟等は再びエジプトへ下り、ヨゼフの前に出て行つた。ヨゼフはベンヤミンが來たのを見て、家令を呼び

「この人等を家に案內して、饗應の用意をせよ、晝飯を共にするから」

と命じた。兄弟等は副王の私宅へ連れ行かれたので、氣味が惡くて堪らない、何でも袋の口に在つた麥の代金のことで我々を此處へ連れて來たのだらう。覺もない罪を言ひ掛けて、我々も驢馬も無理に浸收して奴隸にする考なんだらう、斯う互に話し合つて、門の所で家令に近き、前回途中で袋の口に代金を見當つたこと、今度それを持つて來たこと、誰が袋の口に代金を入れたか、全く知らないこと等を逐一物語つた。すると家令は案外な返答をした。

「御安心なさい、氣遣するには及びません。貴方等のお父樣の神樣がその寶を袋に置いて下さつたものと思ひます。實際お渡しになつた代金は、この私が調べて受取つたのですから」

と云ひ、やがてシメオンを連出して面會させた。そればかりか、星敷內へ案內し、水を持つて來て足を洒がせるやら、驢馬にも芻を與へるやら、それは〳〵頗るお念の入つた歎待振を見せてくれた。斯くて午頃になると、ヨゼフは一同の前に顏を出した。兄弟等が贈物を献げて恭しく平伏すと、ヨゼフも

親切に禮を返した。

「其方等のこの前に話した老父は御無事か、まだ御存命かね」

「はい、父は幸ひ無事で、まだ存命でございます」

と答へて一同は再び平伏した。それからヨゼフは自分と同じ腹の弟ベンヤミンを打眺めて、

「是が私に言つた若い弟なのか……何うぞ神様が其方をお恤み下さいます樣にね」

と言つたが、もう胸は一杯になるし、涙はこみ上げて來るし、堪らなくなつたので、起つて自分の居間に歸り、心行くまで泣いた。やがて顏を洗ひ、再び兄弟等の前に出て共に食事をしたが、彼等をルベンから始め、年順に從つて席に就かせた。彼等はいよ〳〵驚いた。

ヨゼフは親兄弟をエジプトに引取つて、何不自由なく暮させる考であつたが、然し兄弟等が昔の樣に腐り果てた根性では迚もお話にならぬので、それとなく彼等の腹の中を探つて見た。殊にベンヤミンの前には御馳走の皿を五倍も多く列べて、兄等が自分にたいした樣に妬を起すか否かを試した。

(6) 銀の杯—ヨゼフは兄等の心がもう昔でないことは大抵分つた。然し今一つ十分に試して見たいものだと思ひ、家令に命じて彼等の袋に入れられるだけの麥を詰め込ませ、代金をその口に置き、ベンヤミンの袋には代金と共に自分の銀の杯を隱させて置いた。

翌朝十一人の兄等は驢馬に袋を負はせ、故郷の空を望んで歸途に就いた。やつと都を出て、まだ遠くは行くまいと思ふ頃、ヨゼフは家令を呼んで曰つた、

「起つて彼等を追ひかけ、捕へて斯う曰へ、お前等はどうして恩に報いるに仇を以てするのだ。主人が常にお用ゐになり、占ひも致しなさる杯を盗んだ、非常に惡いことをしたぞと」

家令は命ぜられたまゝに、彼等を引捕へて、その盗の罪をせめた。すると彼等は口を揃へて答へた、

「どうして斯ることを仰せになり、私等がそんな惡事を働くものと思ひなさるんですか。袋の口に見付かつた代金さへ持つて還つた位ですもの、御宅から金の銀のと盗むなんて、そんなことを致すはずがありますか。お尋ねになるその杯が誰の袋に見當りましても、其者は殺され、私等は皆奴隷となりますでございませう」

身に覺えがないものだから、彼等も隨分口幅つたいことを言つた。

「よしお前等の言ふ通りにしよう、誰の袋に杯が見付つても、其者は奴隷だ、他の者には罪はないよ」

と云つて家令は袋を卸させ、年順に檢めて見ると、ベンヤミンの袋にちやんとその杯が入つて居るではないか。兄等の驚き方と云つたらない、大に悲しんで衣を裂き、再び袋を驢馬に負はせて、悄然と都へ引返し、ユダを眞先に一同ヨゼフの前に平伏した。

「どうして斯んなことをしたのだ、占ひにかけては自分の右に出る者はないと知らないのか」

「何とお答へいたしませう。何と申し上げ、何と辯解することが出來ませう。神樣は私等の罪惡をお見

當りになりました。私等は皆閣下の奴隷でありませう、私等も杯を見付けられたものも」

「否、そんなことは出來ない。杯を盗んだものだけが自分の奴隷となるのだ。他の者は勝手に老父の許へ歸るが可い」

ユダはベンヤミンの身の安全を保證して來て居る。さう言はれると、いよ〳〵默つて居られない。ヨゼフの足下にすり寄り、泣いて嘆願した。先づベンヤミンを連れて來る樣に仰せつかつたこと、父がこの兒を深く愛して、どうしても放さうとしなかつたこと等を逐一申し述べた上で、

「父の生命はこの兒の生命に結ばれてありますので、私等が父の許へ歸りまして、もしこの兒が共に居なかつたら、父は必ず悶死します。私等は父の白髮をば悲の餘りに墓へ下らしめるのです。私は父にこの兒を請合ひ、もし伴ひ歸らなければ、何處までもその罪を負ふと言つて連れて來たのですから、伏して願はくは特別の御情を以て、私をこの兒の代りに奴隷となし、この兒だけは兄弟と共に歸國さして下さいませ。私はどうしてこの兒を伴はずして父の許へ上り行き、父の身に災害の及ぶのを見るに忍びませう」

と言を盡して嘆願した。

(7)ヨゼフ名告り出づ―兄弟の腹の中はもう十分に判つた。我身は奴隷になつても、弟を救ひたいと云ふ見上げた心になつて居るかと思へば、ヨゼフも嬉しいやら、懷しいやらで、心はどうしても抑へきれなくなつたから、傍に居たエジプト人を殘らず立退かせ、はら〳〵と涙を流しながら、大聲をあげて、

「私はヨゼフですよ、まだお父さんは御存命ですか」

と名告り出た、「ヨゼフ」と一聲聞いて、兄弟等は覺ゐず怯み上つた。たゞ恐ろしいエジプトの副王樣とばかり思つて居たその人が、嘗て自分等の散々に虐めた弟であつたかと思へば、急に聲が咽につまつて口が利けない。たゞ目をぱち〳〵させるばかりである。ヨゼフは懇に彼等を傍近く召寄せて猶も語をつゞけた。

「此方へいらつしやい、私は兄さん等の弟、兄さん等がエジプトに賣つたヨゼフです。けれども何にも恐れることはありません。私を賣つてこの國へ連れ來さしたからとて、氣拙い思をする譯はありません。兄さん等の生命を救はしめんとて、神樣が私を一足先にエジプトへお遣しになつたのです。饑饉が始まつてから、もう二年になりますが、猶五年間と云ふものは、耕すことも收穫れることも出來ないのですから、兄さん等が生命を繋いで行ける樣にと、神樣は私を先きにお遣しになりました。さすれば私が此方へ參りましたのは、決して兄さん等の企圖に由るのではなく、全く神樣の思召に出たのです。神樣は私をちやうど王樣の父の如く、その家の主人、エジプト全國の主宰として下さいました。

「急いでお父さんの許へ上つて、私の方へお下りになる樣に申しなさい、兄さん等の目も私の弟ベン

ヨゼフ身を明す

ヤミンの目も、現に私が言ふ所を見て居ますでせう。でお父さんに私のすべての出世とエジプトで見た所を告げて、早く私の方へ御案内していらつしやい」

斯う云つてから、ベンヤミンの首に抱きつき、接吻して泣くと、ベンヤミンも同じくヨゼフに縋つて泣いた。夫れから他の兄弟にも接吻して嬉し涙に咽んだ。此に於て兄等も、漸く胸の動悸が收り、ヨゼフと打解けて話をした。

(8)事ファラオの耳に達す—ヨゼフの兄弟が來たと云ふ噂が宮中に傳り、終に國王の耳に入つた。國王は大に喜び、早速ヨゼフに命を下した、

「兄等にさう云ふがよい、驢馬に麥を負はせて、カナアンに歸り、汝等の父と家族とを伴ひ來れ、我エジプトのすべての善き者を與へ、國の膏を食せしめるであらう……なほ妻子を載せる爲、エジプトより車を取つて行き、汝等の父を携へ來れ。成るべく急ぐが可い。家具等は惜むに及ばぬ、エジプト全國の善い物は汝等の所有物だと。」

ヨゼフは國王の命に從ひ、兄等に車と途中の糧と、又各〻に上衣二着づゝを與へ、ベンヤミンには

銀三百と上等の上衣五着を與へた。父にも同じだけの金子と服とを送り、別に驢馬十頭に澤山の贈物を積ませ、十頭の牝驢馬には道中の糧を負はせて、「途中で相爭つては可けないよ」と云つて彼等を歸し遣した。

教訓—怨に報ゆるに德を以てせしヨゼフの心行の美しさを見よ、復讐をしようと思へば、どうすることも出來たのに、怒つた顏すら見せないで、倒に兄弟のしたことを色々と辨解してやつた。是ほど立派な吾主の象はあるまい、吾主も兄弟たるユデア人に賣られ、無理無法に責め殺されながら、彼等の罪こそ憎み給うても、彼等の身はかへつて不憫に思召され、彼等が贖ひの價とも、心を癒す藥ともして、その貴い御血を漓め盡し給うたのである。

第十八章(二)ヤコブ、エジプトに引越す

(一)ヤコブの出發—兄弟等は大に喜んで、カナアンは父の許に歸り、

「ヨゼフは存命です。エジプト全國を宰つて居るんですよ」

と告げた。ヤコブは夢に夢見る心地して、容易に彼等の言を眞としない。でも彼等が事の次第を物語るのを聽き、ヨゼフの遣した車やら贈物やらを見るに及んで、漸く夢ではなかつたと判り、

「ヨゼフが存命なら俺の爲にはそれで澤山だ。死ぬ前に行つて見るよ」

ヤコブとヨゼフの再會

と曰つて家を疊み、妻子を取纏めて出發した。カナアンの國境なるベッサベエに着いた時、犧牲を屠つて神を祀つた。するとその夜、神は幻影の中にお顯れになつて

「我は汝の父の最强き神である。恐れるな。エジプトへ下れ、彼處で汝を大なる民となす。我も汝と共に彼方へ下り、汝が歸る時も連れ戻す、又ヨゼフが汝の最後の目を閉すであらう」

と宣うた。此に於てヤコブを始め、婦人、子供はエジプト王の遣した車に乘り、ベルサベエを立てエジプトに安着するや、ユダを先に馳らしてヨゼフに知らしめた。ヨゼフは早速車を飛ばして父を出迎へ、首に抱きついて暫し嬉涙に咽んだ。ヤコブも嬉しくて堪らない、

「もうお前の顏を見、お前を後に遺されるから喜んで死ぬよ」

と云つた。其時ヨゼフは兄弟等や一家の人々に注意した、

「私は今から往つて王樣に、私の兄弟、カナアンの地に居た家族が參りました、彼等は牧者でありまして、羊、牛、その他、有てるものを殘らず携へて來て居ますと報告します。もし王樣が兄さん等を召して、職業をお尋ねになつたら、僕等は幼少より今日に至るまで牧畜の人であります、祖先もやはり然うでした、と答へなさい。さすればゼッセン(Gessen、ヘブライ語のゴッセン—Gossen)の地に住むことが出來る樣になります。エジプト人は皆牧者を穢はしいとして厭がるのですから」

と言つて、一足先きに都へ引返し、國王に父兄の安着を報告し、兄弟の中から五名だけを王に拜謁させた。彼等は王の問に對して、ヨゼフに敎へられたまゝを答へた。王は彼等をゼッセンの地に住はせ、彼等の中に才智の勝れたものが居るならば、自分の家畜飼養の監督にも當らしめよと、ヨゼフに命じた。ヨゼフは父のヤコブをも拜謁せしめた。ヤコブは王に年齡を問はれて

「私の旅行の年は百三十年でございます。實に僅少で、不幸ばかり、なか〳〵以て父祖の年には及びもつきません」

と答へ、王を祝して御前を退いた。ヨゼフはエジプトで一番劣の豊な、しかもエジプト人の部落と懸け離れたゼッセンの野に父兄を住はせ、饑饉の續く間、食物を送つて彼等を養つた。

(2)ヨゼフの二子—ヤコブはエジプトに引越してから十七年目に百四十七歳で死んだ。死ぬ前にヨゼフを病床に召して、自分が死んだら遺體をエジプトの地に留めないで、カナアンへ持ち歸り、祖先の墓に葬る樣に賴んだ。ヨゼフが

「必ずお望み通りに致します」

と誓ふや、ヤコブは床の頭の方に向つて神を禮拜した。病が危篤に及ぶや、ヨゼフはマナッセとエフライムの二子を伴つて父の病床を訪れた。ヤコブはヨゼフが來たのに力を得、床の上に起き上つて曰つた、

「全能の神樣はカナアンなるルズーベテルーに於て俺に顯れ、俺を祝して曰うた、〝我れ汝を殖し、汝を數々になし、多くの民となし、この地を汝と汝の子孫に與へて永久の所有となすであらう〟と。よつて俺がエジプトに下る前に生れた汝の二子エフライムとマナッセは俺の子となし、ルベンやシナオン等と同樣に見做す」

と云ひ、二子を抱いて之に接吻した。そしてヨゼフが父の祝福を受けさせる爲、兄のマナッセを父の右に弟のエフライムを左に置くと、ヤコブはその手を交叉さして右をエフライムの頭に、左をマナッセの頭に置き、祝福を與へて曰つた、

「我父アブラハム、イザアクが御前に歩みし神樣、私を若き時より今日まで養ひ給ひし神樣、私を諸々の災害より救ひ給ひし御使（主を指して曰ふ）よ、願はくはこの童子等を祝し給へ。地上にて大に增殖するに至らしめ給へ」

時にヤコブは老齡の爲め眼が霞んで居たので、兄を弟と見誤つたのだらうと思ひ、ヨゼフは其手を置き換へさうとした。父は承知しない、

「判つてる、判つてる、兄は固より大なる民となるのだが、然し弟はより大きく、その子孫はより多くの民となるであらう」

と云つた。後果してその通りになつた。猶ヤコブは前方シケムに買取つて置いた土地をヨゼフに讓つた。

(3)ヤコブの預言—夫からヤコブは十二人の子供を殘らず枕頭に招いて、一々彼等の將來を預言した。是は救世の歷史中にも極て重要なもので、謂はゞ前後の兩界をかつきりと區劃する分水嶺の如きものである。老父の周圍にその十二子が、イスラエル十二族を代表して居列んで居る。ヤコブの眼は天來の光に照されて、その子その子の人となりを見ないで、その遠い將來に眼を注ぎ、彼等の出遭すべき運命を洞見した。そして謂はゞ一人づゝに遺言書を付し、遺產でも分配するかの樣に、彼等の將來を預言した。

して其遺產とはヤコブが父祖より讓られた神の祝福に外ならぬ。是までその祝福は先づアブラハムその次にイザアク、その次にヤコブと云ふ樣に、たゞ一人だけに與へられたのであるが、今回ヤコブは之を十二子に分配した。アブラハム、イザアク、ヤコブに賜はつた神の御約束、子孫を數多くなし、

カナアンの地を所有するに至ると云ふその御約束は彼等に於て實現されたのである。

兎に角ヤコブは神の御名によつて、十二族に遺産を分配し、各人の性格に應じて、その將來を告げた。然しその祝福の中で最も重要なのは、「地上のすべての民は汝の子孫に於て祝せられよう」と云ふその子孫、即ちメッシアに關する祝福である。先づこの契約の相續人として神がアブラハムに指定し給うたのは、イスマエルでなくてイザアクであつた。同じくイザアクの子供の中でもエザウは排斥されて、ヤコブが指定された。ヤコブも神の御光に照されて、誰かをその子供の中から指定して置くべきはずだ、とは何人も當然期待する所であらう。

さてこの約束を寄托されたのは長男ではなかつた。ルベンは嘗て父の側室バラに良からぬことをしたことがあつたので、長子の權利を剝がれた。長子の特權の一つは二倍の遺産を受けることであつたが、それはヨゼフに與へられ、彼の二子はヤコブに養はれて、伯父等と對等に扱はれた。シメオンとレウイはシケムで亂暴を働き、シケム人を欺いて虐殺した爲に詛を受け、殆ど土地の分配に與らなかつた。シメオン族は何等の勢力もなきまでに衰へ、イスラエルの歴史中に最も影の薄いものとなり終つた。レウイ族は成るほど神の奉仕に選まれて、その詛は何時しか祝福に變つた譯であるが、それにしても土地の分配に與らず、各族の間に散在することゝなつた。

(4)ユダの特權—長子權に附隨せる特典として宗家の主人となり、併せてメッシヤの祖先となるの名譽は第四子のユダが承繼いだ。ヤコブは先づユダの名の意味から取つて彼が將來の偉大さを仄かした、

「ユダよ（讃められる者）——汝の兄弟等は汝を讃めよう。

汝の手は汝の敵の頸を抑へ——汝の父の子等は汝の前に身を屈めるであらう」

ユダが兄弟の上に優越的地位を占め、彼等に號令する權利を有し、兄弟等も快く彼の最高主權を認めるに至るべきことを預言したのである。次節は比喩を以て同じ意味を顯して居る。

「ユダは獅子の兒だ。——我子よ、汝は獲物より歸り登つた、

彼は伏して蹲つた、——牡獅子の如く、牝獅子の如く、

誰か之を起し得よう」

獅子は百獸の王であるが、「ユダ族は兄弟の中に最も強大であつた」（歴代誌五二二）、獅子が獲物を捉へた時、山の奥なるその穴へ歸るが如く、ユダも戰へば即ち勝ち、攻むれば即ち取り、獲物を背負つて歸郷する。彼が泰然として伏し、悠然として休息する時、誰か之を搖り起し、之に戰を挑み得るだらうか。

ユダ族は最初から強大勇壯であつた。荒野を前進し、野營する時、第一線に在るのはユダ族であつた。聖幕屋奉獻後の祭に際して、第一に供物を奉つたのもユダ族であつた。ヨズエの死後、イスラエルの民が「我等の中、誰が先きに攻め登りて、カナアン人と戰ふべきか」と主に問うた時、「ユダが上るべし、看よ、我この國をその手に付す」（判士記一一ノ二）と主はお答へになつた。然しヤコブの預言がより完全に

實現されたのはダウイドに於てゞあつた。彼は實にユダ族に出て、イスラエルに王たるべく神の召出を蒙り、して王位は彼の一家に永久に約束された。彼は始めてイスラエル國の敵を決定的に服從せしめ、國家を泰山の安きに置いた。

終にユダ族の優越權によりて準備され、ダウイドの身に於てその一部分の實現を見たこの預言は、キリストによりて完全に成就された。「ユダ族の獅子、ダウイドの萠蘖」(默示錄五ノ五)たるキリストは、罪と死と地獄とに打勝ち、如何なる光榮も及ばぬ光榮を擅にし給ふのである。然り「神は之を最上に擧けて、賜ふに一切の名に優れる名を以てし給へり。卽ちイエズスの御名に對しては、天上のもの、地上のもの地獄のもの悉く膝を屈むるなり」(フイリツポ二ノ八―一〇)

(5)この勢力の期間―ヤコブは續いてこの勢力の期間を預言し、いよ〳〵メッシア的觀念を明にした。曰はく

「笏ユダを取り去られず、――主宰の杖その足の間を離れず、

以てシロの來りて――諸〳〵の民、彼に從ふ時までに及ぶであらう」

ユデア人もキリスト敎徒も、この一節をメッシアに當てゝ解說するこゝに一致して居る。たゞシロ(Schilo)の一語が不明瞭な爲め解說が區々である。

聖エロニムスはシロの代りにシャルア(Schâluah)と讀み、「遣はさるべきもの」と譯した。然し近代の註釋家レンケ(Reinke)、パトリジ(Patrizi)等は、この語をメッシアの肩書の一と見做して居る。シロは固有名詞で、「平和」、又は「平和ならしめる者」を意味するサロモンの類語だ、と彼等は言ふのである。なるほゞメッシアは「平和の君」(イザヤ九ノ六)だの「平和」(ミケア五ノ五)だのと呼ばれて居るが、然し其意味にしては前後の文脈とも合はなければ、ヘブライ文特有の對句法も成り立たない。

古代の註釋家はむしろ之を「(Schello)―當然持つべきもの」とか、「笏を持てるもの」とか譯して居る。この方が前後の文脈とも合ひ、「權威を持つべき者の來るまで」(エゼキエル二一ノ二七)と、エゼキエルにある一句ともしつくり嵌つて居る。

何れの說に從つても、メッシアに當ることを預言したのだと云ふ點は爭はれない。笏とか指令の杖とか云ふ形容の下に、ユダ族の優越權を預言し、この權がメッシヤの來るまで失はれまい、その以後はこのメッシアこそユダの王となり、その大權をば異邦人の上にまで伸張すべきだ。さすればユダの王國はメッシアの來り給ふまで斷絕することがない。否、メッシアの來り給うても決して斷絕しない、却つて其時から、いよ〳〵遠く廣く發展伸張するのみである。

世にはこの預言を正解し得ずして、ユダが王笏を失つたその時こそ救主の來り給ふべき時だ、實際ローマ人がユダの獨立を奪つた時にイエズス・キリストは御降誕になつたのだと解說する人が少くはない。

然しこの解說は言語學上の基礎を有しない。歷史上の事實とも合はない、殊にメッシア王國の永久なるべしと云ふ預言に矛盾して居る。

言語學上から云ふと、ヘブライ文に「まで」とあるのは、事がその時終つたことを意味しないで、唯その時まで繼續したことを顯す。例へば「最後の日まで、ミコルに子が生れなかつた」(サムエル後六―二三)とあるからとて、死後に至つて子が生れたと解する樣な愚者はあるまい。

ユダ族が王位を失つたのは、ローマ人の爲ではなく、それよりも六百年前、バビロンに移された時からである。後マカベ朝に至つて獨立を回復したが、然しマカベ家はレウイ族であつた。なほ「メッシアの王國は永久にして、滅びることあるまい」(サムエル後七―五)と神はナタン豫言者を以て告げ給うたではないか。

終にヤコブはユダ族に與へらるべき現世の祝福をも告げた。

「彼その驢馬を葡萄樹に繫ぎ――その牝驢馬の子を葡萄の蔓に繫ぐであらう。

その衣を酒に洗ひ――その下衣を葡萄の汁に洗ふであらう。

その目は葡萄によりて輝き――その齒は乳によりて白し」

ユダの地は葡萄の栽培に適し、牧草も多く、葡萄酒の如きは捨賣にすると云ふ位に多く產したものである

(6)ヨゼフに就ての預言――ヤコブはその他の子供の將來をも告げたが、殊にヨゼフの繁榮、富强を預言した

「ヨゼフは實を結ぶ樹の芽の如し、――泉の傍にある實を結ぶ樹の芽の如く、

その枝つひに垣を踰ゆ――射る者彼を挑み、

彼に矢を放ち、彼を擊つた、――然し彼の弓はなほ勁く、

彼の手彼の膂は敏活だ――是ヤコブの全能なる神の手によりーイスラエルの磐たる牧者によつてである

汝の父の神、汝を助け――全能者、汝を祝するであらう。

上なる天の祝福――胎の祝福、下なる淵の祝福、

哺乳の祝福――胎の祝福、汝に來るであらう。

汝の父の祝福は舊き山の祝福にも――永遠の丘の美さにも勝つて居る。

是等の祝福はヨゼフの頭に歸し――その兄弟ど別になりしものゝ頂に歸するであらう」

(7)ヤコブの死――夫れからヤコブは自分の遺骸をカナアンに持歸り、アブラハム、サラ、イザアク、レベッカ、リア等を葬つてあるマクペラの洞穴に葬る樣に命じ、靜に眠るが如く息絕えた。

斯くと見るやヨゼフは父に取縋りて、その顏に泣き伏した。やがて醫師に命じ、四十日もかゝつて遺骸に藥を塗らせ、木乃伊として保存した。エジプト人も七十日間の喪に服した。

その後ヨゼフは父の遺骸を奉じてカナアンに上つた。エジプトの百官、王室、及び全エジプトの長老ヨゼフ全家とその兄弟等が之に從ひ、ヨルダンの東アタド(Atad)の禾場(エリコの對岸)に到り、此處で七日間大に泣き哀んだ。エジプト人はアタドから歸り、たゞヤコブ一家のものが遺骸をヘブロンに携へ行いて

マクペラの洞窟に葬つた。

(8)ヨゼフの大度—ヨゼフの兄弟等は父が亡くなつた後で、ヨゼフが先年の怨を報いようとはしまいかと氣遣ひ、人をしてヨゼフに赦を願はせ、やがて一同連れ立つて、ヨゼフの前に行き、地に平伏した。然しヨゼフの胸は海の如く廣い、復讐なんて夢にも考へて居ない。

木乃伊の圖

「氣遣ひしなさるな。私等は神様の思召に逆ふことが出來ますか。成るほど兄さん等は私に對して良からぬ考を起された。然し神様はそれを轉じて福となし、御覽の通り私をこんなに高く取擧げ、多くの民を救はして下さいました。恐れなさるな。私は兄さん等も、兄さん等の子供も養つて上げますよ」

と親切に云つて彼等を慰めた。ヨゼフは百十歳まで生き、四代の孫を見て永い眠に就いた。死ぬ前に兄弟等に遺言して、

「私の死後、神様はあなた等を顧み、嘗てアブラハム、イザアク、ヤコブに約束し給うた地へ連れ戻して下さいませう。その時は私の遺骸をも携へ歸つて下さい」

と賴んで置いた。よつて一族の人々はその遺言に從ひ、屍には藥を塗つて棺に收め、丁寧に保存した。固より木乃伊となしたのだけれども、その當時までは藥品に不足があつたか、技術に手拔かりがあつたかして、永久に腐敗を免れしめるに云ふ迄には發達して居なかつたとか。

教訓—ヤコブにせよ、ヨゼフにせよ、榮華のありたけを極めながらも、我身は異國の空にさすらひの旅をつゞけて居るのだと云ふことを忘れないで、是非とも神のお約束になつた、乳と蜜の流れる地に葬られたいと思つた。是こそ彼等の信仰の凡ならざるを語る所以で、聖パウロも斷言して居る、「信仰によりてヤコブは死に臨みてヨゼフの子等を各祝福し、杖の首に倚りて禮拜せり。信仰によりてヨゼフは死に臨みて、イスラエルの子等の出立を思はしめ、己が骸骨に就きて命を下せり」(ヘブライ一一—二二)と。思ふに我等はより以上の美しい樂土、極りなき福樂の流れる天國を約束されて居る。この世で幾ら榮華を擅にすることが出來るにせよ、片時たりともその天國を忘れてはならぬのである。

參考　太祖の歴史の總括

(イ)太祖の歴史はイスラエル史の序幕である—アブラハム、イザアク、ヤコブを太祖、卽ち信仰上の祖と稱す。彼等の家庭こそイスラエル民族がその特殊の國民性を持つて生れ出た搖籃の如きもので、この時代は特に律法の準備期とも言ふべきであつた。律法の下に生活するが爲には、先づ周圍の異邦人と分離して、全く孤立しなければならぬ、この分離はアブラハムの召出しと、そのカナアン移住とに始まり、三太祖の生存中繼續した。彼等は出來るだけカナアン人とかけ離れて生活し、互に婚を通じない樣にしたのみならず、同じ一家より岐れた傍系ロト、及びその二子モアブ、アンモンを始め、イスマ

エル、マヂアン、エドムとも遠かつた。エジプトに移住してからも、エジプト人とは全く懸け離れた別天地に住んで居たので、國民の偶像崇拜にも感染せず、ヤウエの信仰を保持するにむしろ助となつた位である。

律法を格守し、周圍の惡影響を脱するにも、その國民性を保全し、神に寄托せられた使命を失はない爲にも、土地を所有する必要がある。隨つて太祖の時代から土地の所有は既にその端緒を發して居る。神は幾度もカナアンの地を與へると約束し、土着のカナアン人を放逐する權利をも彼等に授け給うた。この國は太祖の足跡を印せられし上に、また彼等の遺骸の葬られた土地なので、イスラエル人の憧憬の的となつたものである。エジプトに安住しては居ても、約束の地にたいする仰望の熱は少しも冷めなかつた。否一時他國に居住したのは、カナアンの地を征服する爲の準備ともなつたのである。

(a)—先づエジプトに在つて政治的教育を受けた。

(b)—無理無體な壓迫を蒙つた爲に、カナアンの所有に關する約束の眞價をしみ〴〵と覺ることが出來た。

(c)—ヤコブはカナアンの地を去るに當つて、後日一度は必ずこの地に歸るべしと云ふ神の保證を得た。彼はその保證をヨゼフに傳へ、ヨゼフは之を諸兄弟及びその子孫に傳へた。ヤコブでもヨゼフでも、エジプトの土になるのを欲しなかつたのは之が爲である。

なほイスラエル人は太祖によつて歩一歩律法へ導かれた。實に太祖等はその律法の中でも極めて重要な祭祀、割禮、十分一稅などを遵奉した。神との契約、その契約の當然の結果として、神の律法を遵奉するの義務等は神とアブラハムとの契約に始まつて居る。太祖等は決して律法の精神を閑却したものではない。私人としては幾多の缺點もあつたにせよ、彼等はやはり百世の儀表であつた。殊に舊約時代に於ける宗教生活の特有、且つ本質とも云ふべき美德、卽ち「將來の惠の影」に對する信仰の典型であつた。然り舊約は「將來の惠の影」(ヘブライ一〇ノ一)で、その惠を知らしめ、之を蒙る爲の準備をなさしめたものである。だから太祖等の眼は遠き將來に向ひ、その遙か向ふの地平線上を眺めた。彼等は種々の祝福を約束され、その實現を見たいものと熱望したが、然し身親しく之を見るを得ずして世を去らねばならなかつた。

「彼等は皆信仰に從ひ、約束のものを受けずして死したれども、遙かに望みて之を祝し、地上に於て己は旅人たり、寄留人たることを宣言せり。斯く語る人々は是れ本國を求むることを示す者なり」(ヘブライ一一ノ一三—一四)

終にイスラエルの歴史は全く太祖等の歴史に縮寫され、準備されてあつた。彼等がその子孫に與へらるべき國の到る處に天幕を張つたのは決して偶然に出たものとは思はれぬ。この點について、アブラハムの歴史は後世子孫の歴史を胚胎して居ると云つても過言ではないのである。

(ロ)新批評主義者—然るに新批評主義者が太祖の歴史に下す判斷は、我等の夫れとは大に異つて居る。ウエルハウセン(Welhausen)、グラフ(Graf)、リス(Reuss)、クエネン(Quenen)等に言はせると、この歴史はお伽噺や神話をつき交ぜて出來たもので、その中に事實の核心が隱れてあるのだから、其附加物を排除して中心核を掴むのが批評家の本分である。

この神話は主として民族的特色を帶び、イスラエル民族が如何にして形造られたかと云ふ漠然たる記憶を存して居る。アブラハムとかロトとか云ふのは、個人を指すのではなく、種族の名に外なら

ぬのだ。幾多の種族が同一地方に集合して一個の民を爲すに至つたものとし、その種族を個人化して之を一人の祖、開國の英雄となし、却つて之から分離した種族は、その子孫の如く見做してある。創世記の系圖と云ふのは實にかうして出來たものである。例へばイスラエルとエドムは兩種族で、分離前にはイザアクと呼び、イザアクはイスマエルが分離し去るまでは、アブラハムと稱したものである。

創世記中に重要な意義を有せる結婚は、新民族の移住、アラム地方から來て、イスラエルに加はつたその記憶を一個のお伽噺として語り傳へたものに過ぎない。即ち夫といふはその名稱を遺せる重要な種族で、遠國から迎へた妻は先住民に併呑され了つた移住種族だ。第二流の妻とは、さして重要ならざる移民を指すのである。なほこの神話はその發生した當時の出來事をば、遠い過去に置くと云ふ特異點を持つて居る。例へばエドム人は絶えずイスラエル人と干戈を交へて居たので、兩種族の祖先なるものがあつて、母胎に於て相爭つたかの如く、エドムの敗北を以て兄弟の踵を取れるヤコブに瞞られたかの如く拵へ、アラム地方から始終移民が入り込んで來て、爲にイスラエルの獨立を危くされる事を示すが爲に、ラバンがヤコブに對して不義を働いたかの如く描いてあるのだ。

太祖等の宗教に關する物語も、やはり一種の宗教神話である。彼等が神に祭を献げたとか、神と親密に物語つたとか、神の示現を蒙つたとか云ふのは、後世の宗教觀念を反映さして居るに過ぎない。この物語の目的は太祖を以てシケム、ベルサベエ、ヘブロン等に民衆崇敬の標となつて居る神社の創立者とするに在るのである。實際是等の都市はカナアン人の爲にも神聖な地點であつた。イスラエルの原始的宗教は他のすべての民族のそれの如く多神教で、後に至つて國民的宗教となり、漸く豫言者の運動によつて純然たる一神教となつたものである。

新批評家連が斯く太祖に關する出來事の歴史的性質を否定せんとするその理由を突き留めるのは、肝要中の肝要である。彼等の説は主理論にその出發點を置き、つまる所、超自然なるものは全く不可能だといふ自分免許の主張、その無宗教的哲學より借り來れる主張を根據として居るのである。

太祖等の歴史に多く散見する超自然的事實、神と人との談話、預言、奇蹟等を以て不可能事と斷定し、是等の事實を傳へて居るその物語の歴史的價値を否定し、然る後自家一流の見解に基いて、新にイスラエル史を構成せんと試みた。彼等は純然たる進化論の法則を歴史に應用して、先づ太祖時代の宗教は どうしても多神教と一神教の混淆であらねばならぬと獨極めをしたのである。然し彼等は自説を根據づけるこの哲學的原理のみに踏み止らない。彼等が特に重きを置いて居るのは、むしろその文學的批評である。彼等は聖書の記事に極めて詳細な批評的解剖を加へ、此が決してモイゼの手になつたものではない。時代を異にし、著者を同うせざる幾種かの文献を寄せ集めたもので、しかもその文献たるや何れもモイゼよりずつと後世に出たものだと放言するのである。

要するに彼等が主張の唯一の根底は超自然的出來事はあり得べからずと言ふに在つて、カトリック註釋家の到底承認し能はざる所である。正しい哲學は超自然的示現の不可能ならざるを證明し、神學はその存在を確定して居る。其上主理論者その人でも、超自然的出來事の不可能なることは確實な眞理だとは流石に斷言し得ないで、たゞ一個の假定説として之を提出して居るに過ぎない。假定説を以て一國の古い傳統を動搖させることは出來るものではない。之を動搖させるには、十分根據ある證明、確乎として動かすべからざる證明を以てしなければならぬ。

隨つて 新批評家連が、「超自然的出來事は不可能なり」と言ふ獨極めの前提より 導き出したすべ

ての結論は、妄斷取るに足らずとして投げ返さるべき運命を免れない。彼等が太祖の歴史に下せる神話的解説は、隨分得て勝手なものである。イスラエル國民は堅く一致して、あるがまゝに太祖の歴史を信ずるのであつたが、果して論者の言ふが如く、その物語が何等の根據もなき昔噺たるに過ぎなかつたものとするならば、そんなに固い一貫した信念が起るはずがあらうか。

論者が神話だ、昔噺だと一概に排斥して居るその物語の確實性は、近年アッシリア、バビロンに發掘されつゝある文献によつて、いよ〳〵はつきりと證明されて來た。彼等が象徴でござるの、神話に過ぎないのと主張して居る太祖の姓名でも、ハムラビの祖父の時からアッサラドン(Assaradon)に至るまでの契約書中に、アビラム(Abi-ramou)、或はアブラハアム(Aba-ra-ha-am)、ヤクビルー(Jaqubilou)やヤスピル(Jasupilu)等の名となつて散見して居る。

アッシリア學者フリヅ・ホンメル氏(Fritz-Hommel)はその「アバラハアム研究」の結論として、左の如く斷定した。

「アブラハムがハムラビと同時代の人たりしことは確實に證明された。ハムラビに關するすべての史實は、アブラハムの歴史の額縁を作り、彼がバビロンの多神教を避けてカナアンへ移住したと言ふ聖書の記事を驚くほど正確に證明して居る」と。

聖書の文章の批評的解剖に至つては、カトリック註釋家とても、モイゼの五書が各種の史料を集めて大成したものだと言ふことを認めるに吝ならぬ。然し詳細にして穿ち過ぎた解剖、別けても之がモイゼよりも遙か後世に成つたものだと言ふ主張は、全くの臆説、隨分と手前勝手な妄斷たることを一言して置く。

第十九章　ヨブの大なる試練

(一)ヨブの富とその信仰—神はアブラハムの一族を選びの民となし給うたが、さらばとて他の民族を迷信の中に棄て置き給うた譯ではない。

カナアン族、その罪惡の甚しきが爲に慘滅せらるべき筈であつたカナアン族の間にすら、「最高きものゝ司祭」と呼ばれしメルキセデクの如き人を起し給うた程である。然し異邦人の間に出し最も勝れた高徳の聖者と言へば、誰しもヨブに指を屈せざるを得まい。ヨブはヤコブよりも後、モイゼよりも前の人らしく思はれるが(參考)、年代は確と斷言されない。處もウズ(Us)とあるのみで、多分ヨルダン河の東ハウラン(Hauran)地方の西、ダマスコの南に位せる邊であらうと言ふことだが、それとても一向判然しない。

さてそのウズにヨブと言ふ一人の大福長者が居た。七人の息子に三人の息女を神に授けられ、財産はと言へば、羊七千に駱駝三千、牛が五百耦、驢馬も同じく五百頭を有し、多くの僕婢を使ひ廻し、何不自由なく樂しい月日を送つて居たものである。そして世の常の富豪とは事かはり、平生深く神を畏れ、人を恤み、假にも道ならぬことをした覺がないので、その地方に高くその名を謳はれ、厚く慕ひ愛されて居るのであつた。斯の父にして斯の子ありで、子女等も皆互に仲睦まじく、七人の息子は既に分家し

て居たらしいが、よく順々に何の家にか集り、姉妹等を招いて飲食を共にした。ヨブは子女等が主のことを忘れ、罪を犯す樣なこともなかつたかと氣遣ひ、宴會が終ると、彼等を呼び集めて燔祭を献げ、主の御憐を祈るのであつた。

(2)ヨブの勢力—こんな鹽梅であつたから、ヨブの德望は彼の地方一帶に輝き渡り、部族は擧つて彼を尊び敬ひ、神の代表者、その寵兒と崇め慕ふのであつた。ヨブは自ら言つて居る。

「私が若かりし時、神樣の親愛は私の天幕にあり、全能者が私と共に在し、子供等は私の周圍に團欒して居ました。私が町の門に上つて行きますと、人々は私の爲に席を設けて居るのでした。若き者は私を見て隱れ、老人は立ち上つて直立し、牧者等は物を言はないで指を其口に當て、貴き者も聲を收めてその舌を上顎につけました。私の言ふことを聞いた者は私を幸福なりと呼び、目に見た者は私の爲に證明をしたものです。是は私が助を求める貧者を救ひ、孤兒や寄邊なき人を救助したからです。私は盲者の目となり、跛者の足となり、貧しき人の父となり、知らない人の爲にも訴訟の理由を究めました。惡しき者の牙を折り、その齒の間より獲物を取り出すのでした。人々は私に聽き、默つて私の教を俟ち、私が何かを言ひますと、彼等は言を發せず、私の說く所は彼等に露の如く、彼等は私を待ち望むこと雨の如く、口を開いて仰ぐこと春雨の如くでした」(ヨブ一九)

ウズ地方に於けるヨブの勢望の如何に大なりしかは推して知るべしであらう。

(3)第一の試練—或日神の子等が御前に集り、サタンもその中に立ち混つて居る。神は之に宣うた。

「汝は何處から來たのだ?」

「地上を廻り、此處彼處を歷めぐつて參りました」

「では我僕ヨブを注意深く見て參つたか。彼の如く質朴で、正直で、神を畏れ、惡に遠ざかつた人間は世界に今一人もあるまい」

「ヨブも求める所なくして神樣を畏れるのでせうか。あなたは彼と、その家と、その一切の所有物との周圍に保護の藩屏を設け給ふじやありませんか。彼が手に爲す所を悉く祝し給ふので、彼の所有物は地上に殖ゑも殖ゑたのです。だが御手を伸べて彼が一切の所有物に打擊を加へ給はゞ、必ず面と向つて、あなたを詛ふに極つて居ます」

「よし彼が一切の所有物を汝の手に任す。たゞ彼の身に手を觸れてはならぬぞ」

サタンは神の御前を退き、早速ヨブの試みに取掛つた。或日、ヨブの子女等が長兄の家に集つて物を食ひ、酒を飲んで居た時、一人の使者がヨブの許に駈け込んで來た。

「牛は畑を耕し、牝驢馬はその傍に草を喰んで居ましたのに、サバ(Saba)人が不意に攻め込んで來て、一切を掠め、若者は刀を以て斬り殺しました。たゞ私一人がやつと遁れてお知らせに參つたのであります」

まだ言ひ終らぬ中に、また一人が駈けつけた。

「神様の火（激しい電火）が天から降つて、羊と若者とを燒き殺して了ひました。たゞ私一人がやつと遁れてお知らせに參つたのであります」

まだ話をして居る中に、又一人が飛んで來た。

「カルデア人が三隊に分れて駱駝を襲ひ、之を殘らず强奪し、若者は刀で斬殺して了ひました。たゞ私一人がやつと遁れてお知らせに參つたのであります」

と云つて居る所に又もや一人の僕が宙を飛んで來た。

「御子樣方が第一の兄さん方で一緒に御食事をし、お酒を飲んでいらつしやいますと、突然荒野の方から旋風が起つて家の四隅を搖り動かし、家は倒れて、お子樣方を壓潰して了ひました。たゞ私一人がやつと遁れてお知らせに上つたのであります」

大きな災難が四つまでも重ねぐにやつて來て、山なす財産は悉く奪はれて無一文となり、可愛い子女さへも殘らず失つたのだから、大抵の人ならば泣き狂ひしなければ、悶死するはずだけれども、流石はヨブだ。一應は起ち上つて上衣を裂き、頭髪を剃つて悲しみもしたが、直ぐ又心を取り直し、地に平伏して神を禮拜し、謹んでその思召に身を托せた。

「裸體で母の胎を出たのだから、裸體で彼處へ歸りませう。主與へ給ひ、主取り給うた。思召のまゝに成つたのです。主の御名は祝せられさせ給へ。」

斯う云つて露ばかりも主を怨む樣子がない。サタンの目算はがらりと外れた。

(4)第二の試練—或日又神の子等（天使を指す）が御前に集つて來た。サタンもその中に立ち混つて居る、神はサタンに曰うた。

「汝は何處から來たのだ？」

「地上を廻り、それを歷めぐつて參りました」

「では我僕ヨブをよく見て參つたか、彼の如く質朴で、正直で、神を畏れ、惡に遠ざかり、何處までもその無罪の清さを保つて行く者は世界に今一人とあるまい。それに汝は我を勸めて、何の譯もないのに彼を惱さしめたのだ」

「皮を以て皮に換へる程しならば、人はその有する一切の所有物を以ても己が生命に換へますでせう。もし御手を伸べて、彼の骨と肉とに觸れて御覽なさい。必ず面と向つて詛を吐くに極つて居ます」

「ではヨブの身體を汝の手に托す。たゞ生命を害することだけは許さぬぞ」

サタンは御前を退き、直にヨブの身體を打つて頭の天頂から跖まで一面に恐ろしい腫物を生ぜしめた。ヨブは痛くて痒くて堪らないが、指先までが腫れ上つて全く使ふことが出來ない。土器の破片で身を搔き、糞土の上に坐して居る。

ヘブライの原文には、「糞土」の代りに「灰」と書いてあるが、何れにしても意義に於て大差はない
ハウラン地方では各邑の入口に馬や驢馬の糞を積んで置く一定の場所がある。燒くが如き熱國で、しかも濕氣がないから、馬にも驢馬にも敷藁を與へる必要がない。隨つて馬糞は藁屑などを混ぜず、十分乾いて居る。毎月それを火に燒いて灰となし、そのまゝ高く積み重ねてある。夏の夕方など邑人はその灰の上に出て、涼しい風に吹かれ、子供等もよく此處に集つて遊戯に耽る。だからヨブの如く獣らしい病に侵されたものは、邑中に居られないので、この灰の上に退いたものと思はれる。

ヨブの不幸を一層堪へ難くならしめたのは妻の面白からぬ態度であつた。彼は夫を慰め勞り、その沈みかけた心を引立てようとはしないで、聖アウグスチヌスも言つた如く、倒に「惡魔の助手」となつて、ヨブを誘ひ、

「あなたは夫でも正直の中に立籠つて動かないのですか。神様を詛つて死んで了ひなさいよ」

こまで言つた。然しヨブはそんなに淺間しい、氣の弱い人間ではない。

「お前は愚な婦の言ひさうなことを言つたのだな。私等は神様の御手より幸福を戴いたのだから、また災難をも蒙るはずではないか」

と諭し、一言も主を怨む樣なことは申さない。唇を以て罪を犯すが如きことは全くしなかつた。

第二十章　三人の友

(1)友の訪問—ヨブが常ならぬ不幸に陷つたと聞いて、三人の友が相携へて見舞ひに來た。その三人とはエドムのテマン(Theman—住民の明智を以てその名を謳はれしテマン)(エレミヤ四九ノ七)の人エリファズ(Eliphaz)スア(Suah)の人バルダド(Baldad-Hebr.Bildad)、ナアマ(Naamah)の人ソファル(Sophar)で、彼等は互に申合せてヨブを勞り慰めんが爲に來つたのであつた。然し目を擧げて遙に之を望んでも全身腫れ上つて以前のヨブとは見識りもつかぬ程の變り樣なので、三人はひとしく聲を擧げて泣き叫び、上衣を裂き、天に塵を撒いて各の頭上にちらし、七日七夜、彼と共に地上に坐しながら、一言も發し得る者すらなかつた。彼の苦惱が餘りに甚しいので、何と言つて慰めようもなく、たゞ默つて見守るのみであつた。

(2)論爭—友の慰めを俟つて居たヨブは、終に自分から口を切つて身の不幸を訴へた。身體の疼痛は固より堪へ難いのであつたが、然し己が不幸の原因を分らないのは、彼の爲に一層堪へ難い苦痛であつた。彼はそれに就て三人と激しく論爭した。

三人の友ヨブを訪問す

一、世の不幸は神より來ること、

二、しかもその不幸は犯した罪の罰であること、

この兩點だけはヨブもその友も一致して居るのであつた。然し三人はヨブが實際不幸に惱まされて居る所から推して、正しく罪の罰を受けて居るのだと斷じ、ヨブは己が良心の證明を楯にして無罪を主張した。でも一方からは不幸は罪の罰だと信じて居るので、全く不可解の謎に打突つた譯で、その爲に苦痛は彌が上に加はるのみであつた。論爭は三回に及び、三人が交る〳〵ヨブを訴へ、ヨブが一々それに答辯すると言ふ形になつて居る。

(3)**ヨブの詛ひ**—ヨブは先づ口を開いて己が存在を詛つた。

「私の生れた日は亡び失せよ、男子胎に宿れりと言はれた夜も然あれかし。

「その日は暗となれ、神は上から之を顧み給はざれ。光も之を照すこと勿れ。暗黑と死の蔭が之を晦まし、霧之が上を覆ひ、惱しさに包まれよかし……

何して私は胎より死んで出なかつた。何して胎より出た時、氣息が絶ゑなかつた？

何して膝に受けられた？何して乳房に養はれた？

さもなかつたら、私も今は偃して眠り、休らつて居たであらうに！

私の歎息は食物に代り、私の呻吟は水の溢れ流れるに似て居る。

私は安からず、穩ならず、安息を得ず、たゞ苦惱のみが來るのである。」(第三章)

ヨブの苦痛の堪へ難きは實に死以上であつた。然し彼は決して失望したり、神を怨んだりはしなかつた。成るほど彼の洩せし痛嘆は、餘り矯激に失し、物足りない點もないではなかつた。然し夫れは人間性の淺間しさに原因し、その苦痛の激甚さを高調したまでに過ぎない。斷じて失望の結果に出たのではない。舊約時代の人に向つて、基督の敎へられた樣な忍從(Resignatio)を求めるのは、求める方が無理である。

(4)**三人の主張**—ヨブの詛に對して三人の友は、不幸が罪の罰であること、ヨブがこんな目に遭ふのも全く罪の結果だ、と云ふ自分等の見解を飽まで主張した。最先に口を利いたのはエリファスであつた。罪のない人は決して不幸に陷らない、災禍に泣くのは惡人のみだ。自分の經驗に訴へても、自分に顯れた前夜の異象から以て見ても、古聖賢の敎に徵しても、罪人が神の御罰を蒙るのは當然だ。ヨブもなま

じい反抗なごしないで、おとなしく神の鞭を受け、その御手を接吻するが可い。さすれば神も宥まり給ひ、前々通り、否それ以上の幸福を恵み給うであらう、と初めは暗々裡に忠告を試みた。

するとヨブは憤慨して異議を唱へた。自分の苦痛は堪へ難い、幾ら嘆いても口説いても、到底その苦痛の甚しきには及びもつかぬ。多少の慰安を期待して居たのに今やその期待は裏切られた。自分の不義を咎めたいならば、請ふその不義を示して貰ひたい、と迫り、然る後、再び己が苦痛を訴へ、神に容赦を願つて、その話を結んだ。するとバルダドは、ヨブが神を不義なりと呼はつたものゝ如く思ひ込み或は思ひ込んだかの如く見せかけて、辛辣な非難を浴せかけた。

「何時まで君はそんなことを申すのです？神様はその正義を枉けることがお出來になるのですか。君の子女が滅んだのは罪の罰を蒙つたのです。むしろ全能者に祈り、清く正しくお歩きなさい。さすれば君の新境遇は以前よりも輝かしくなりますでせう。請ふ過ぎし代の人にも問うて御覽なさい。葦は泥なくして茂りますか。荻は水なくして育ちますか。まだ青くて刈られない時にも、他のすべての草よりも早く枯れるものでせう。神様を忘れる者の道はすべて是の通りです……神様は正直な人を棄て給はず、惡人の手をも執り給ふことがない（切け給はぬ）、君が若し悔い改めたら、笑ひを君の口に充たし、喜びを君の唇に置き給ふでありませう」（第八章）

ヨブは答へた、

「自分は決して神の全能や全智を否定したのでない。神の御前に於て絶對に義しき人と言ふは一人もないことも充分辨へて居る。たとへ我身に罪はないと信じて居るにせよ、なほこの大なる審判者の情を呼び求めるものである。たゞ自分は斷言する、神は義者も不義者も等しく滅し給ふ、地は惡人の手に渡されてある。神はまた判事の面を蔽ひ給ふ（目を塞し給ふ）、もし神ならでは果して誰でせう」（九ノ二、四以下）、

と斷言するや、彼等はいよ〳〵躍氣となつた。神は義者にこの世の禍を報い、罪人には禍を降し給ふのだと力說して下らない。いよ〳〵露骨に、はつきりとヨブの罪を咎めて、悔い改めを勸めた。そしてヨブの言尻を捉へて、神に向つて冒瀆の言を吐いたと息巻き、ヨブの罪だと言つて、色々の不義不正を數へ立てた。

然し彼等が自說を固く執つて動かないだけ、その論理の誤れることが、いよ〳〵明白となり、ヨブに浴せる非難が明確となるに隨つて、ヨブの辯解はますます容易となり、三人の敗北は避け難くなつて來た。第三回の爭論にはバルダドは殆ど言ふべき所を知らず、ソファルはたゞ沈默して味方の慘敗を承認するより外はなかつた。

（5）ヨブの辯明—ヨブの言ふ所が過激に亙れる嫌ひを免れないのは、その堪へ難い苦痛、慘め極まれる境遇に原因することを忘れてはならぬ。自分の不幸は神の降し給へるものである。然し神は自分の罪以上に、自分の堪へ得る力以上に罰し給ふと彼は嘆いて居る（第六章一ノ一三）

不幸は罪の罰であるが、自分に罪のないことも明白な事實である。して見ると自分は故なくして苦しめられ、神に敵視されて居る、と彼は思ひ込み、連りに嘆聲を洩した（九ノ一七ノ一八ノ二三、一三ノ二四、一二ノ二八、一六ノ一〇、一九ノ五以下）是等の嘆聲は冷靜に考へた胸から迸つたのではなく、石の氣力も銅の肉（六ノ一二）も持たない犧牲の口より覺ゐず洩れ出た悲鳴であつた。隨つて彼の嘆聲を以て神にたいする反噬の意味に解してはならぬ。彼は如何なる惱みの中にも神に忠誠を失はなかつた。多少言ひ過ぎた點はあるにせよ、唇を以て罪を犯さなかつたことは確實である。ヨブは飽まで身の無罪を信じた。それだけ三人の讒誣を猛烈に反駁した。バルダドが罪人のみを罰し給ふ神の正義に訴へるや、ヨブも始めて己が無罪を神の御前に立證せんと思つた。（九ノ一二）、然し「神は偉大にして、たゞ人が神と爭はんとしても、千に一つも答へることは出來まい、況んや神は私の如く人でもあらぜられぬから、私は到底彼に答ふべきでない」（九ノ三五）と考へて、思ひ止らうとした。でもソファルが口を利き、

「神自ら來つてヨブが罪に當るだけの所罰を受けて居ないことを示し給へかし」（一一ノ三以下）

と言ふや、

「私も君等と同じ心だ、私は君等の下に立つまい、誰か君等の言ふが如きことを知らないだらう」（一二ノ三）

と言つて一應は拒絶した。然しやがてソファルの挑戰に應じ、自分の無罪が神に認められんことを求め

「神が私を殺し給ふとも、私は彼に依賴むであらう……邪なるものは彼の前に到ること能はぬからである」（一三ノ一五以下）

と斷言した。ヨブは斯くまで自分の無罪を信じて居たものゝ、然しその自信と、不幸は罪の罰なりと云ふ考へとを結び合せることが出來ない。然らば神の正義を疑ふべきか、否、その正義は爭ふべからざる眞理である。斯う思ふと、不幸は罪の罰なりと言ふ思想が些と怪しくなつて來た。世には往々惡人が富み榮えて居る。一般に言ふと、善人よりも幸福である。却つて善人は貧困に陷り、悲みに泣いて居ることも少くはない。この不公平は是非とも匡正される所があらねばならぬ。

「視よ、今にても私の證となるもの天に在り、私の眞實を表すもの高き處に在り、我友は私を嘲るが、我目は神に向つて涙を注ぐ」（一六ノ一九ノ二〇）

たとへこの世で夫れが實行されないにせよ、なほ未來の希望がある。

「誰か私の言の書に記される樣にしてくれないだらうか。誰か鉄の筆もて、鉛の板の上に盤石に彫りつけられる樣にしてくれないだらうか。

私を贖ふ者の活き給ふことを私は知つて居る。終の日に彼必ず地の上に立ち給ふであらう。

その皮に覆はれしこの骨、この私の肉もて、私は神を見奉るであらう。

私自ら彼を見奉る。私の目が彼を見奉るであらう。他の人ではない、この希望は私の胸に置かれてある」（一九ノ二三以下）

今は非常な苦惱に沈んで居ても、然し善惡を審き、賞罰を降し給ふ神にすべての希望を投げかけ、後日一度は必ず復活し、この皮、この肉を着けて、その神を見奉るべきことを思つて、自ら慰めたのである。

教訓―未來に希望を繫いで居る人は、苦痛を堪へるのも餘程樂に感じられる。現世の苦痛は來世の幸福の種子で、種子を多く蒔いて置くだけ、幸福の實も多く得られる譯だ。苦しい目に遭つた時は、むしろ天の與と喜ばねばならぬ。

第二十一章　大　團　圓

(一)エリウの言論―三人の友は口を噤んだ、ヨブは來世に於て自分の無罪の認められるべきことを確信して疑はない。なほ神の降し給ふ禍も義者にまで及ぶ所を以て見ると、罪の罰以外に何か理由があるらしい。然しその理由は何であらう。何故義者までが苦しむのだ、苦しみの理由は果して何か、この問題は未だに解決されてない。その上、ヨブはその話の中に幾らも脫線して居る。神に就て、又は神に向つて横柄らしく物語り、神が依怙の沙汰に出で給ひ、敵意を挾み給ふかの如く言ひ立てたことさへある。しかも自分の缺點は少しも認めないのだから、いよ〳〵以て面白くない。是に於てエリウと言ふ青年が起つて、苦痛は何處から來るかと言ふ問に答へ、併せてヨブの傲慢めいた態度を非難した。

エリウはすべての不幸を罪の罰と見る三人の說に贊成し得ない。さらばとて、神が義者に禍を降し給ふ時は、不正なことをなし、敵意を挾み給ふかの如く思ひ込めるヨブの意見をも是認することが出來ない。神は愛すればこそ罰し給ふのである(三三ノ二九以下)、罪人に降し給ふこの世の禍は、彼を罰する爲ばかりでなく、また善に立歸らせる爲でもある(三六ノ八以下)、義者の爲に苦痛は有益な教場となり、餘り幸運が續いて罪の途に引ずられない樣、併せて罪を淸められ、魂は惡を豫防され、いよ〳〵美しく輝き渡る樣、敎へてくれる。その上、苦痛は堅忍もて己が敬虔を、神への服從の僞りなきを證する機會を義者に與へる。惡人の爲には神に向つて反噬を謀り、滅に沈むの機會ともなるものだ。

次にエリウはヨブが神の御稜威に對して禮を缺き、神を以て己と同等な人間の如く取扱つて居るのを咎めた……神は決して人を敵視し給はぬ、常に深い〳〵情をかけ給ふのである。神が善にして公平に在すことは、その世界を定め、保ち給ふお攝理の上からでも察せられる。ヨブは自分の不幸から推して神の全善や正義を非難するけれども、夫れは神が人を罰し給ふに當つて、何を目的とし給ふかを知らない結果である。(三四―三五一三六―三七)

終に臨み、エリウはヨブに向ひ、堅忍もて未來の報酬を俟つ樣、その幸福を求める爲の代價が貴ければとて、神に向つて吃かず、背を向けず、却つて思召の前に身を謙る樣に勸め、神の全能と威嚴と全智とを巧みに描いて、その話を結んだ。

(2)神の御言—ヨブはその友の不義な非難にたいして神の示現を求めた。己が無罪を公にし、その苦痛の秘密を明にし給ふべき神の示現を要求した。固より神も示現を賜ふべき思召であらせられた。然しこの示現には相當の準備を要する。苦痛に關する眞理をば人智の明にし得る限り明にした上で、神的是認の大鼓判を捺し、併せてヨブの敬虔を青天白日になし、その苦痛に十二分の酬を取らせると言ふが順序である。でもヨブはその苦痛を我慢しきれないで、不平を洩し、口を過し、この酬を辱うするに堪へないものとなつた。で先づ彼に誤りを匡させ、その罪を償はせねばならぬ。その任に當つたのがエリウで、ヨブは謙遜して彼の忠言を受け、一言の反駁も試みようとはしなかつた。

エリウが話して居る時、常ならぬ雷雨が起つた。彼は直ちに夫れを捉へて、神の偉大さを叫び、その示現の遠からざるべきを感じたと仄かした。雷の鳴りごよめくのは神の御聲である(三七ノ二一五)雲を吹き散し、黄金色の日光を地上に送る風は、神が魂の暗を、心の不安を霧散せしめようとし給ふ前兆である(三七ノ二一以下)と云ひ添へた。

果して神は大風の中に顯れ給うた。その御話は第三十八章から第四十一章に亘り、ヨブの謙遜な懺悔(三三ノ九—三五)に中斷されて二つに分れて居る。神は先づ宇宙の森羅萬象に讀まれる己が全能と全智の珍らしく感ずべき大觀を描き出させ給ひ、殊更ら皮肉たつぷりな反問を疊みかけて、ヨブにその不遜、僭越を承認せざるを得ざらしめ給うた。

「地の基を我が据ゑ置いた時、汝は何處に在つた—汝もし知る所あらば我に言へ、汝知れりや？誰か度量を定めた？—誰か準繩を地の上に張つた？その基は何の上に置かれた？—その隅石は誰が据ゑた？(彼の時には)曉の星が相共に歌ひ—神の子等は喜んで呼はつたものである、」

人の智力は狹少だ。物質界に起れる現象の下を覗き、之を生ぜしめる不思議な力を發見せんとする毎に、必ず秘密と暗黑とに打突かる。隨つて自然界を造り、且つ之を宰り給ふ神を是非し、その深奥なる攝理にたいして一々理由を問はんとするのは、夫れこそ狂氣の沙汰と言ふより外はない。既にエリウの話を聽いて改心して居たヨブは、いよ〳〵畏つて己が非を告白した。

「私は輕々しく語りました、何と答へ奉ることと出來ませう。たゞ手を私の口に當てるのみでありません。私はすでに一度言ひました。言はなかつたら可いのに再びしました。更に重ねる樣なことはありますまい」(三九ノ三二以下)

神はなほ續いて、河馬と鰐とを取出し、河馬がその力の强大なるに似もやらず、甚だ温和なるに反して鰐は如何にも凶暴な、恐ろしい動物である。之に觸れて、その怒を激せしめるものは居ないとすれば、況して神を攻擊し、その人に對して執り給ふべき行動を指定し得るものがあるだらうか、と宣うた。

神は一言も不幸の問題には觸れ給はなかつた。もうそれはエリウによつて滿足に解決されたので、更

に之を論ずる必要がなかつたのである。エリウの言ひ出した神の威嚴の描寫をそのまゝ續け給うたのを以ても、彼の與へし苦痛の意義を是認、採用し給うたことが知られるであらう。

成るほどヨブの爲には、何故、苦痛に見舞はれたかと言ふ問題がなほ殘つて居る。然し神の御攝理を探るのは人の爲すべき所でない。斯る不謹愼極まる探りを入れても、光明を得る代りに、より深い暗黑に陷るのみだ(三八ノ五)、神はその樣な好奇心を喜び給はぬ。人はヤウエの神にて在すことを忘れず、その全能全智の上よりお計ひになつた所は、たゞへ自分の小ほけな頭で、その理由を悟り得ないにせよ、恭しく之に服從すべきである。

ヨブは再び自分の過失を認め、「私は自ら恨み、塵と灰の中にて悔ゆ」と自白し、謹んで赦を請うた。

(3)**大詰**—ヨブが謝つた上で、神はエリファズ、及びその二人の友をお咎めになつた。

「われ汝と汝の二人の友を怒る。汝等が我に就て述べた所は、我僕ヨブの言の如く正當ではなかつた。さらば汝等は牡牛七頭、牝牛七頭を取つて、我僕ヨブの許に到り、汝等の爲に燔祭を献げよ。我僕ヨブ汝等の爲に祈るであらうから、われ彼の祈禱を嘉納れ、それによつて汝等の愚を罰することがあるまい。」

三人は仰のまゝに燔祭を献げた。斯くてヨブがその友の爲に祈つて居る時、神はヨブの病を去つて舊の健さに返し、彼の所有物を以前の二倍になし給うた。彼の兄弟姉妹、その他相識れる人々は皆來つて彼とその家に飲食し、主の降し給ひし一切の災禍について彼を慰め、各金一ケセタ(金の重量何に依せしか不明)と金の環一個づゝを贈つた。

斯くてヨブは羊一万四千頭、駱駝六千頭、牛一千耦、牝驢馬一千頭の持主となり、以前の如く七人の男子に三人の女子を與へられた。女子は三人とも非常な美貌の持主で、全國に是ほど美しい婦人は見付からぬと云ふ程であつた。

その後ヨブは百四十年も生き存へ、四代の孫を見た上で安かな眠に就いた。

教訓—エリウの言つた如く、ヨブの不幸は大なる幸福を以て報いられた。併し何故神がヨブを處罰し給うたかと言ふ事は、彼等には全く不明であつた。本當な理由は、サタンがあらゆる災禍を降して、ヨブを罪に引込まうとしたのに外ならぬ。神が之をお許しになつたのは、ヨブの德を鍛ひ、いよ〳〵その輝きを增さしめよう。金を坩堝に熔かして精練するが如く、ヨブの德行も災禍の坩堝の中に精練しようと云ふ思召からであつた。でもこの解決は基督教前の精神狀態に適應せるもので、我等の爲には猶不十分である。新約になると、神の御子はその無殘な御死去によつて苦痛を全く聖化し、その價値を、天國の福樂の種子ともなるべきその功德の偉大さを明にし給うた。隨つて新約の聖人等は、苦痛を以て何よりの寶となし、大にそれを珍重し、感謝を以て之を推戴くのである。

參考　ヨブの歴史的存在に就て

非カトリック界には、ヨブを以て歴史上の人物と見ないで、單に教訓小説の主人公として假想されたに過ぎないと主張する向がないではない。然しエゼキエル預言者はヨブをノエ、ダニエル等と同列に數へ（四一二〇）、聖ヤコボも「汝等曾てヨブの忍耐を聞き、又終に主の爲し給ひし事を見たり」（五一一）と言つて居る。假想的人物に過ぎずとせば、果して忍耐の鑑と仰ぐに足りるだらうか。

ヨブ記は全篇四十二章より成り、初の二章と終の第四十二章の七節以下は散文で物してあるが、其他は總て韻文を以て綴つてある。固よりヨブにせよ、三人の友にせよ、その論爭に詩形を用ゐた筈がない。話の中實はそのまゝでも、詩形は著者の筆に成つたものである事は爭はれない。然らばこの書は何時頃の作であらうか。その流麗雄渾な筆致、莊重、深酷な着想等から以て見ると、ヘブライ文學の黄金時代、サロモンからエレミアの頃迄に成つたものと思はねばならぬ。多分サロモン時代の作ではあるまいかと言ふことである。

然しヨブその人は遙に古く、一家の主人で族長と司祭とを兼ねて居た時代の人らしく、ヨブの長壽から推し、又モイゼの律法を仄かせる樣な話が一つもなく、却つて天地の創造、人類の墮落、巨人、大洪水、ソドマの滅亡等、ヘブライ人がエジプトを出る前に在つた事實を暗示した點が多く散見して居る所から推して、カトリックの學者等は、ヨブを以てヤコブからモイゼ迄の間に出た人と斷ずるのである。

第三期　モイゼの誕生からカナアンの征服まで

參考　エジプトに於けるイスラエル民族

（イ）―エジプトは北を地中海に境し、東を岩石アラビア（Arabia Petraea）と紅海に限られ、南はヌビア（Nubia）、西はリビア（Lybia）砂漠に接して居る。聖書にはミツライム（Mitsrayim）、或はメスライム（Mesraim）と稱してある。ミツライムは二個のマトソル（Matsor）卽ち上エジプトと下エジプトを意味する。アッシリア人はエジプトを指してムトウル（Mutsur）、又はムスルー（Musru）と呼んで居た。下エジプトのみをミツライムの國と稱することも往々あるが、その時は上エジプトをパトロス（Pathros）、又はファトウレス（Phathures）（エゼキエル二九ノ一四）と云ふ。それはエジプト語のペトレス（Pe-to-res―南の地）から出たものである。エジプトと云ふは國民の自ら呼んだ名ではない。もと都のメンフイス（Memphis）に有名なプタ（Ptah）神の殿堂があつたので、彼の界隈をハーカープタ（Ha-Ka-Ptah―プタ神の宮居）と呼び做したものだ。それをギリシャ人が讀み訛つて、「エジプトス」と云ふ樣になり、終にエジプトなる名稱を生ずるに至つたもので、今日支那人が自國を「中國」だの、「中夏」だの、「中華民國」だのと稱し、決して支那と呼ばないのと好一對である。

ギリシアの史家ヘロドトスが「エジプトはニール河の賜物である」と云つたのは千古不磨の名言で、實際エジプトの下方に三角洲が形成られ、世界無比の沃土をなして居るのは全くこの河の賜物である。エジプトの南境をなせるアスアン（Assouan）―昔の Syene）激湍よりニール河は國を南北に貫流

して、アラビア・エジプト(Egypte-Arabique)とリビア・エジプト(Egypte-Lybique)に兩分し、河の兩側には山脈が流に沿うて走り、自らニールの溪谷をなし、カイロ府の上手から河に遠ざかつてデルダの平原中に姿を沒して居る。

エジプトの地味の豐饒は全くニール河の恩惠に由る。毎年二月頃エチオピアの高原に積雪が溶ける上に多量の降雨があり、それが非常な勢を以て河に流れ込み、數ケ月の後エジプトへ降り、七月と八月の兩月に亘つてエジプトの谷を沒して全く一面の海となし、山地の朽腐した有機物を土砂と共に沈澱せしめ、そのまゝ天然の肥料となす。だからエジプトでは別に肥料なんか要しないで、豐な農作物が得られる。古代に於けるエジプトの驚くべき繁榮と、その感嘆すべき文化は、つまりニール汎濫の餘惠であつたのである。

だから國民は早くから幾多の運河網を作つて、この水を四方へ導くべく務めた。ニールの水が十九肘の高さに達すれば豐作は疑ひない。ヨゼフの時の豐作もニールが理想通りに汎濫して、別に何等の天災も起らなかつた結果と見ることが出來る。之に反して汎濫が不十分だと、必ず多少の饑饉に見舞はれる。歴史にその例が乏しくない。預言者等がニールとその運河の水が涸れるのを以て一個の天罰と呼んで居るのは一再に止らない(イザヤ一九ノ五、エゼキエル三〇ノ一)

(a)—エジプト人は最も古い文化民であつた。遠い遠い昔から頗る發達した文藝を有し、その文字には眞行草の三體があり、眞書は「神聖花文字—Hieroglyphique」と稱し、專ら墓碑、記念碑等に用るたものだ。行書は「司祭文字—Hieratique」と稱し、神聖花文字の形を稍崩して成れるものである。草書は「民間文字—Demotique」と云ひ、司祭文字よりも一層字劃を略してある。紀元前九世紀頃から紀元四世紀頃まで廣く民間に使用されたのはこの文字である。

是等の文字はその讀方から意義まで永く世に忘れられ、たゞ變挺な記號だ、奇怪な文字だと思はれるばかりで、誰一人之を讀破し得るものはなかつた。然るに十九世紀の初頭に當つて、佛國のシャンポリオン(Champollion-1790-1832)は驚くべき語學の天才に加へるに堅忍不拔の精神を以てし、前人の幾度か試みてその都度失敗せしエジプト文字讀破の大業に指を染め、終に之が鍵を發見して、見事に千古の謎を說く事ができた。斯て從來不明の裡に葬られしエジプトの歴史は急に明るくなり、エジプトの神官マネトン(Manethon)が紀元前二百七十年頃に書いた歴史も—不幸にして今は僅にその斷片を遺すに過ぎない—隨分正確にして、十分信憑するに足るべき事が證明されるに至つた。その斷片によつて見ると、始めエジプトは幾多の小邦に分れて居たが、紀元前四千年頃—或は三千五百年—メネス(Menes)なるものが起つて之を統一し、都をメンフイスに奠めてから、紀元前三百三十二年アレクサンドル大王に征服されるまで王系を數へること三十、分つて古王國(第一王系第十一王系)、中王國(第十二王系第十七王系)、新王國(第十八王系第三〇王系)となす。(因みにエジプト王は皆ファラオ—Pharaoと稱するのであつた)

ヨゼフを副王に任じ、その一家を引取つて之を厚遇したのは果して何系のファラオで、實名を何と言ふのであつたらうか。當時に於ける聖書の年代表は不確實で、エジプトの年代表にしつくり合はせることは頗る困難である。然しイスラエル人を迫害したファラオは十九王系のラムセス二世(一三一〇年—一二四四年)だと云ふ事に多の註釋家は一致して居るので若この王の死せし千二百四十四年にイスラエル人がエジプトに居住した四百三十年を加へると、ヨゼフがエジプトの副王になつたのは紀元前大凡千六百七十四年になり、當時少くも國の北部、下エジプトの地はヒクソス(Hyksas)王の治下に在たのである。

蓋し中王國の全盛時代は第十二王系の頃で、夫れから次第に降坂となり、第十三、第十四王系の頃には、上エジプトと下エジプトとは相獨立し、三角洲地方は幾多の小邦に分れて互に雌雄を爭ひ、その盧に乘じて、アジア方面からヒクソス―遊牧者―と稱するセム族が移住し來つて、漸次下エジプトに勢力を築き、終には諸小邦を併呑して王位に即き、都を東境のアヴリス(Avaris)に奠めた。アヴリスはニール河の一支流たるペルーズ(Peluse)の海に入る所(ポート、サイドの東三〇粁)に位し、ローマ時代にはペルーズと稱したものだ。然しヒクソスの都はもつと西に位せるタニス(Tanis)であつたと云ふ人も多い。

ヒクソスが勢力を振つたのは凡そ一世紀の間、紀元前一六八〇年から一五八〇年に及び、第十五王系と第十六王系とが實にヒクソス族であつたのである。ヨゼフが如何に英才高德の人であつたにせよ、囚徒の身から一躍してエジプトの副王に拔擢されるなんて眞らしくないと思はれぬでもないが、然し時のファラオがアジア出身のヒクソスだつたとすれば、疑惑の雲は自ら消え失せるであらう。

舊い傳說によると、ヨゼフに夢を判じさせたファラオはアパピ二世(Apapi II―Apophis とも云ふ)であつたらしく、この王はヒクソス王中でも特に有名で、タニスを裝飾して大にその美觀を加へたものであつた。

ヒクソスと云へば統一せる一民族だと長くの間思はれて居たが、近年の發見によつて見ると、實はアラビア、カナアン、シリア地方から流れ込んだセム族の聯合であつたことが明白となつた。エジプトの文獻に、彼等をシャスー(Shasou―掠奪者)と稱し、その頭目とも言はるべき種族をヒク・シャス(Hik-Shasou―シャスーの頭目)と呼做せる所から、ヒクソスと言ふ名稱が出たのである。

彼等はエジプトを占領するや、漸次エジプトの文化を採用したのみならず、また鋭意之が發展をも計つた。

(a)―イスラエル人の居住せしゼッセン(Gessen、ヘブライ語のゴセン―Gossen)の地は果して何の邊に位するのだつたらうか。從來多くの註釋家はゼッセンの地を以て下エジプトの中央部、今日のウアヂ・トウミラ(Ouadi-Toumilah)として居るが、獨逸のエジプト學者ブルヒシュ氏(Brugsch)は、ニール河の支流で、最東端を走れるペルーズ河と、その外側なる荒野との間に在つたものと斷定した。イエズス會の有名な聖書學者マロン師(Mallon)もこの說を採用して居る。それには左の如き理由がある。

(a)―ヨゼフは父兄をファラオに引合せる前、「もし王樣に職業を問はれたら、牧者であると答へなさい。さすればゼッセンの地に住むことが出來ませう。牧者は皆エジプト人の穢がしいとして厭がるのですから」(創世記四六の三四)と云つて居る。是から推しても、ゼッセンはエジプト人の住んで居る所から多少隔離した地點にあらねばならぬことが分かる。然るにトウミラはエジプトの內部に位して居るので、もし此處に居住さしたものとするならば、エジプト人の穢しとする牧者を彼等の眞直中に置いた譯になる。その上トウミラは砂原で牧草に乏しく、到底多數の牛羊を飼養するに適しない。

(b)―創世記にはゼッセンの地を稱して「ラムセスの地」と呼んである。後日イスラエル人が苦役に酷き使はれる樣になつた時も、「ピトムとラムセスの町を建てた」(出エジプト一ノ一一)とある。だからラムセスの所在地を突き留めたら、ゼッセンの地點も容易に決定され得る譯である。ラムセスと云ふ町はトミラに在つた。今日では、テル・アルタビ(Tell-Arrabi)と呼ばれて居る。然しその所謂ラムセスを築いた

のはイスラエル人を迫害したラムセス二世(一三一〇年)ではなく、百年許りも後に立つたラムセス三世(一二〇一年)であつたのである。

却つてペルーズ河の海に入る邊、ポート・サイド(Port-Said)の東三〇キロメートル(七里半)にテル・ファラマ(Tell-Farama)と稱する小さな丘がある。是れこそデルタの東側、アジアとエジプトとの境に位せる地で、ヒクソスの築きしアワリス城は正しくこの丘の上にあつたのだ。

アジア、アフリカから多數の商人が蝟集して盛に交易を營み、非常な殷盛を誇りし海港であつた上に、パレスチナ、シリア地方より侵入し來るセム族を喰ひ止めるのにも屈竟の要害だつたので、ヒクソスの退去後、ラムセス二世は之を修築してピーラメッセ(Pi-Ramessé—ラムセスの家)と稱し、ギリシヤ、ローマ時代にはペルーズ(Peluse)と呼んだものである。

ゼッセンの地はこの附近にあたるものと思はれてならぬ。ヤコブがカナアンからエジプトに移つた時、先づゼッセンの地に入り、其處からユダをヨゼフの許へ遣はして居る。なほゼッセンの地は「牧草の豊なエジプトの嘉き地」(創世記四七ノ六—一一)と稱されてある。實際ペルーズ附近はその當時、ニール河の定期汎濫があつて、牧草は盛に繁つて居り、その上、冬から春にかけて多少の降雨があると、附近の荒野にも青草が繁茂し、牧畜には誂向で、ファラオさへその地方に牛、羊を飼牧して居た位である(創世記四七ノ六)

斯の如くゼッセンはエジプトの東境に位して居たから、別にエジプト人と雜居する必要もない、對ヒクソス戰にも中立を守つて彼等と進退を共にしなかつたので、エジプト人に退去を逼られることもなく、そのまゝ平和裡に安住することが出來たのである。

(二)—エジプトの居住はイスラエル人に取つて重大な意義を有し、特に眞の信仰を維持するに頗る助となつた。カナアン人の間に長く止つたら、必ずや彼等と雜居して偶像崇拜に陷つたに相違ない。既にヤコブはカナアン語を使用して居た程で(創世記四一ノ四)、カナアン族との結婚も到底免れ能はぬのであつた(三八ノ二)。そしてカナアン族と云へば勢力から云つても、文化の程度から見ても遙にイスラエル人の上に在り、しかも偶像を崇拜すると共に、淫猥、放縱な性向の民であつたから、彼等の上に多大の魅惑を及ぼし、彼等を併呑し終るのは火を見るよりも明であつた。却てエジプトでは牧畜を業とせる所から「エジプト人に穢し」とされて居たのと、その居住區域が隔離れてゐた關係よりして、危險は比較的少い方であつた。その上、エジプトの地に住んで居る間に、彼等は淺からぬ社會教育を受けた。水草を追つて轉々する遊牧生活より定住生活に入り、土地を耕作し、學術技藝を學び、整然たる國家組織の何たるかも伺ひ知ることが出來た。

(ホ)—ヨゼフの死後局面が一變した。「ヨゼフを知らざる新しき王エジプトに起れり」(出エジプト一ノ四)と出エジプト記に錄してある。是こそ王系の變革を意味したもので、エジプト史を案ずるにヒクソスが全エジプトを統括したのは第十五と第十六の二王系で、それから次第に勢力を失ひ、ニール河畔を放逐された。テベーに割據せる第十七王系は一世紀半の長年月を費してデルタを回復し、第十八王系の始祖はアワリスを陷れて、ヒクソス族を悉くシリア方面に驅逐した。イスラエル人はヒクソスと同じくセム族である以上、新君主に猜疑の眼を注がれたのも無理はない。だが第十八王系の諸王は彼等を放任して依然、安居を得せしめたものゝ如く、壓迫を加へたのは第十九王系のセチ一世(Seti I)、及びその子ラムセス二世(Ramses II)であつたらうかと思はれる。ラムセス二世はギリシア人の所謂セソストリス(Sesostris)で、在位六十六年の久しきに及び、初め二十年間はアジアのヒッチ族(Hitti)

と戰つて、大に國威を發揚し、後の四十六年間は專ら內政に意を注ぎ、大に土木工事を起し、到る處に自己の名を冠せる建物を遺した。その工事に使用した苦力は、捕虜と、毎年エチオピアノ地方へ侵入して掠奪し來れる黑奴、及び從來の移住民であつたと云ふ。是等の苦力が監督者の鞭の下に泣き、疲勞困憊の餘りに斃死したのは幾千万なるか數ふべくもない。實際ラムセスの治下に成つた建物といふ建物は、皆數知れぬ奴隷、及び捕虜の死屍の上に築かれたものであつた。

イスラエル人はエジプトに移住後、急速の發展を遂げ、その人口は非常な勢を以て增殖したので、ヒクソス族の侵略と云ふ苦い經驗を持つて居たエジプト人は、窃に危懼の念を禁じ得なかつた。よつて男子が生れたら悉く河に流せと嚴命して見たが、餘り効果が見ねなかつたので、彼等を奴隷の如く酷き使つて、疲勞の餘りに斃死させようとした。この壓迫は隨分苦しいものではあつたが、また之によつて得る所もないではなかつた。餘り長く平和を樂しんで居るのは信仰を保持する上について危險であるが、今や思はぬ迫害を浴せられたので、自然エジプトの氣習に遠ざかり、神に信賴する樣になつた。苦役にこき使はれた結果、各種の建築術も自ら會得し、耕作、築城の方法なぞにも通ずるに至つた。然し壓迫も久しきに失すると、奴隷根性を生みつけ、獨立自尊の氣風を失はしめる恐がある。イスラエル人の間にも早やこの氣風が馴致されてあつた。モイゼが彼等を奴隷の境遇より救ひ出さうとした時、既に自由の觀念を失へる彼等はモイゼの言ふ所に耳を傾けないのみか、なまじい自分等を救ひ出さうとして、倒にふらい目を見せたと云つて不平を溢した位(出エジプト五ノ二一)、一旦エジプトを去つてからも、何かにつけて元の古巢を戀しがり、肉鍋の前に坐し、滿腹するまで肉でも野菜でも頗張つた昔の味を忘れ得ないのであつた。

第二十二章　モイゼの使命

(一)イスラエル民族の繁殖—神はアブラハムに「汝を大なる民の祖となすであらう」とお約束になつたが、その御約束に違はず、エジプトに移住したイスラエル人は、非常な勢を以て日に月に昌ゑ行き、何時しか强大な民族となつた。彼等は牧畜や農耕を營み、エジプトに在りながら、エジプト人と餘り深く交らず、ゼッセンの地に別天地を築き、民族特有の習慣をその法律として、族長の支配の下に殆ど自治國の體裁を保ち、彼是れ百年許りの間は有福に樂しい月日を送つたものである。

さうして居る中に、ヨゼフを信任せしヒクソス王系は滅び、新王系が起つてエジプトを統括し、ヒクソスと人種を同うせるイスラエル民族の上に猜疑の眼を注ぐ樣になつた。

特に彼等の居住せる處はアジアとエジプトの境に位して居る。彼等が一たびアジア民族と共謀になりエジプトにたいして敵對行爲に出る樣なことでもあると、國家の一大事だと窃に杞憂を抱くに至つた。殊にその當時ヒッチ族は小アジアとメソポタミヤを連結して一大帝國を築き、エジプトと雌雄を爭つて下らず、第十九王系のラムセス一世、及びその子セチ一世は相次いで師をアジアに出したが、思はしき勝利を博することも出來なかつた。

セチの子ラムセス二世に至つて、シリアのカデス附近はオロンテ河上で、敵軍を粉碎して和を請はしめた。然しヒッチ族は間もなく復兵を擧げ、交戰十五年の久しきに及んでも勝敗決せず、終に和親を約

ラムセスス二世の木乃伊

し、ヒッチ王の女をラムセスの後宮に容れて局を結んだ。

斯る次第で、ラムセス二世の如く國威の發揚、アジアの征服に心を碎いたファラオになると、イスラエル民族が日を追つて繁榮に赴くのを見ながら、目を瞑つて成行きに任せて居れないのも實に無理はなかつたのだ。

固より彼等を國外に追放しては、それこそ虎を野に放つ樣なもので、危險この上なしである上に、國家の財源を涸す譯になるし、出來れば彼等の繁殖を妨げ、その勢力を弱め、何時までも奴隷として酷き使つたが、萬全の策だと思つたものであらう。よつて彼等を夫役に取立て、エジプト人の監督の下に泥を捏ねさせ、瓦を燒かせ、ファラオの軍需品を貯へる爲、ピトム(Pithom)とラムセス(Ramses)の二城を築かせその他、田圃の耕作や灌漑等にも從事せしめた。

然しイスラエル人は、苦しい勞働に酷使はれるほど却つて繁殖する一方であつたから、王はエジプトの産婆に命を傳へて生れた子が男子ならば容赦なく之を殺し、女子だけを生かして置くことにさした。でも産婆が神を畏れ、可い加減の口實を設けて王命に從はず、男子をも生かして置いたので、王は終に最後の手段を取り、イスラエルの婦人が男子を生んだ時は、見當り次第に之を奪つて河に投げ入れよとエジプト人に命じた。

煉瓦工

ファラオの姫とモイゼ

(2)モイゼの誕生—ヤコブの第三子レウイの後裔にアムラム(Amram)と云ふ人があり、同じレウイ族からヨカベド(Jocabed)と云ふ女を迎へて妻となして居たが、ちやうどこの命の下つた頃、ヨカベドは男兒を生み落した。見れば如何にも美しく愛らしいので、何んとかして助けたいものと、三ケ月の間は苦心慘澹して密に之を隱して置いた。然しどうしても隱しおほせさうにもないので、已を得ずパピルス(Papyrus)製の方船に瀝青と松脂とを塗つて、其中に赤ん坊を入れ、河邊の葦の茂みの中に置き、姉のマリア(ヘブレア語のミリアム)に物蔭から見張をさせた。誰か親切な人が出て來て、その兒を拾ひ上げてくれまいかと思つて、さうしたのである。

恰もよしファラオの姫が水浴のため河へ下つて

來た。件の方船を見當り、侍女を遣して取寄せさせ、中を開けて見ると、福よかな、さも愛らしい赤ン坊が連りに啼いて居る。「ヘブライ人の兒だな、可哀想に！」と云つて居る所に、マリアが馳り出て來た。

「この兒を育てる爲にヘブライ婦人を呼んで參りませうか」

「あア、さうして下さい」

姫の一言を得たマリアは飛んで家へ歸り、母を呼んで來た。

「ぢやこの兒を連れ歸つて育てゝ貰ひたい、費用は十分仕送るから」

と言つて姫は赤ン坊を母に手渡した。仕送りも何も要つたものでない。生命さへないものと氣遣つて居たのに、思ひ掛けもない、王姫の養子として戴いたのだもの、母の喜びつたらない。早速お承けして大切に育て上げた。成長の後、姫はこの兒を宮中に引取りて「モイゼ—Moyse」と名づけた。「水から援出された者」と云ふ意味である。

(3)モイゼの人となり—モイゼは母の懷に抱かれて居る間に、ヤウエへの熱い信仰と、ヘブライ人に對する美しい同情心とを吹き込まれたに違ひない。後姫の宮に迎へ取られてからは、エジプトの學問を悉く授けられ、「言にも行にも力ある者となつた」(使徒行七ノ二三)

モイゼが文化の花の咲き溢れたエジプトに生れ、しかも王宮に成長して、あらゆる學問を修めることを出來たのは、それこそ神の妙なる攝理に出で、他日國民の指導者とも、立法家ともなるべき準備をした譯である。

然し我身はヘブライ人だ。幾ら富貴を擅にすることが出來ても、同胞の難儀を思へば、安閑として高所の見物はして居られない。

「罪によれる暫時の快樂よりも、むしろ神の民と惱むことを擇み、キリストの恥辱(月らキリストの前表と)を以てエジプトの寶に優れる富となした」(ヘブライ書一一ノ二五)

斯くて年四十歳、王宮の榮華を振り棄てゝイスラエル人と苦樂を共にし、以て彼等を救ひ出さうと謀つたモイゼの健げさ！亦感ずるに餘あるではないか。

(4)モイゼの逃走—或日エジプトの監督がイスラエル人を無理無體に撲り飛ばして居るのを見て、モイゼは憤慨の情に堪へず、人の居ないのを幸ひに、その監督を打殺して死體は砂の中に埋めて置いた。翌日二人のイスラエル人が相爭つて居るのを見て、

「何故そんなに隣人を打つのです」

と曲い方を咎めた。するとその男がモイゼに喰つてかゝり、

「誰がお前を立てゝ俺等の君とも判事ともなしたのだ。エジプト人を殺した如く、俺も殺さうとする腹なのか」

と言ふではないか。神が自分の手を以て一同をお救ひ下さるべきこと、それをイスラエル人が悟つてく

れるだらうとモイゼは信じて居たのに、是では全く期待が外れた(使徒行七—二五)、昨日のことも早や公になつたと見える。どうも安心がならぬと思つて居ると、果して王は其事を耳にして大に怒り、モイゼを捕へて殺さうとした。今は一刻も油斷がならぬ。モイゼは早速エジプトを逐電して、マヂアンの地へ走つた。

マヂアン人とはアブラハムとセトウラの間に出來たマヂアンの後裔で、水や草を追つて轉々する遊牧の民であつた。彼等はアカバ灣(Akaboh—昔はエラト—Elath 灣と稱す)を挾んで、その兩岸に住んで居たものであるが、モイゼの辿り着いた地は多分西側のシナイ半島であつたらうかと思はれる。モイゼは岩角の兀々した荒野を幾日か歩いて、疲れた體を唯ある井端に休めて居ると、マヂアンの司祭でエトロ(Jethro—ルゲRoguel 稱す)と言ふ人の女等が七人づれ羊を引張つて來た。水鉢にせつせと水を汲み、その羊に飲ませようとして居ると、後から來た牧者等が無法にも彼女等を追拂つて、自分等の羊に飲はうとする。弱いものを虐めるかと思ふと、モイゼは默つて居れない。むくと起ち上つて女等を援け、自ら羊に飲つてやつた。女等は家に歸つて今日の出來事を父に物語つたので、父は早速人を遣して、モイゼを自宅へ招待し、丁寧に遇つた。それが緣となつて、終にエトロの家に寄食者となり、娘のセフオラ(Sephora)を娶つて、マヂアンの荒野に羊を牧し、同胞の不幸と神の御約束とを默想しつゝ、四十年の星霜を夢の如く過した。然しその間にも家人に遠かり、たゞ一人異鄕の空に羈客となれる身の寂しさは一日として忘れ得なかつたと見え、長男が生れるや之に「ゲルサン—Gersan—ヘブライ語でゲルショム(Gershom—旅客」と名けた。でも神のお援に由らなくては到底同胞を救ひ出し得ないことは明なので、次男にはエリエゼル(Eliezer—神は救なり)と言ふ名をつけた。

(5)イスラエル民の叫び—さうして居る中にイスラエル人を苦しめて居たファラオ(ラメセス二世)は亡くなつて、嗣子メネフタ(Menephtah)の世となつたが、迫害は一向止みさうにない。さすがに呑氣なイスラエル人も終には堪り兼ねて、連りに神の御助を叫んだ。四百年この方、何不自由もなくエジプトに住み、なるべく土地の人とは懸け離れて居たとは云へ、なほ彼等の偶像崇拜を見聞しない譯にも行かぬので、中には眞の神に遠かり、祖先に約束されたカナアンの地のことすら忘れ勝ちになつたものも隨分あつたであらう。然るに今や思はぬ災難に惱され、無理非道に酷き使はれたお蔭で、眠りかけた目を醒まして神を思ひ出し、約束の地へ歸りたいと言ふ氣にもなり、一心に天を仰いでお助を祈つた。神はその叫を聞き、アブラハム、イザアク、ヤコブになしたる契約を無にせず、イスラエルの子孫を顧み給うた。

(6)燃ゆる藪—或日モイゼはエトロの群羊を率ゐて深く荒野へ分け入り、ホレブ山の麓に達すると、アカシアの藪が急に燃え出して、焰は赤々と立ち上りながら、藪は少しも燒けない。不思議なこともあればあるものだな！一つ見屆けてやらうと思ひ、近寄つて行くと、忽ち藪の中から、

燃ゆる藪

と自分の名を呼ぶ聲が聽こる。

「ハイ、此處に居りまする」

「近寄るな。汝の足の沓を脱け、汝の立てる地は聖地であるぞ」

モイゼは言はれるまゝに沓を脱いだ。

「我は汝の父の神、アブラハムの神、イザアクの神、ヤコブの神である」

モイゼは畏れて顏を隱した。神は續いて宣うた。

「我はエジプトに居る我民の苦患を視、その泣き號ぶ聲を聞いた。彼等をエジプト人の手より救ひ出して、廣い、美しい、乳と蜜の流れるカナアンの地へ導き入れようと思ふので、汝を是からファラオの許へ遣し、我民をエジプトより導き出させる考である」

モイゼはエジプトの王宮に養育され、學問と云ひ、手腕と云ひ、千万人に優れた大人物であつたが、今

度の使命の重大にして困難なるを思ふと、容易に引承ける氣になり得ない。

「私は何物でございますか。私がどうしてファラオの前へ行き、イスラエルの子孫をエジプトから導き出すこと出來ませう」

「我は必ず汝と共に居るであらう。そして我が汝を遣したと云ふ證據に、汝は我民をエジプトから連れ出して、この山で神に犧牲を献げるやうになる」

「私がイスラエル人の前へ行きまして、汝等の祖先の神樣が私をお遣しになつたと申しましたら、彼等はきつとその神樣の御名は？と尋ねるに相違ありませんが、その時は何と答へたものでせうか」

「我はヤウエ(Jahweh)―有つて在る者である。イスラエル人に告げて、有つて在る者が遣し給うた……汝等の祖先の神、アブラハムの神、イザアクの神、ヤコブの神なるヤウエが私を汝等に遣し給うたと言ふのだ。是は永遠に我名となり、世々に我が紀念となるであらう」

「迚も私の言ふ所なんか信じませんよ。ヤウエがお前にお顯れになるものかと言ふに極つて居ます」

斯く命ぜられても、モイゼはなほ危んで諾はうとしない。

「汝の手に持つて居るものは何か」

「杖でございます」

「その杖を地に投げよ」

モイゼは仰のまゝに杖を地に投げた。するゝ其杖が忽ち蛇ゝなり、のろ〳〵ゝ鎌首を擡げて動き出した。モイゼは怖れて後へ飛び退いた。

「手を伸べてその尾を捉へよ」

ゝ、神がお命じになつたから、さうしたら、もう蛇ではない、元の杖だ。神は又仰せになつた。

「汝の手を懐に入れよ」

ゝ。モイゼが仰せに從ひ手を懐に入れるゝ、その手は早速癩を生じて雪の如くなつた。次に復仰に從ひ、その手を懐に入れるゝ、以前の潔い手になつて居る。そこで神は宣うた。

「民が汝の言ふ所を信じなければ、第一の奇蹟を示せ。それでも信じなければ第二の奇蹟を行ふのだ。未だ信じないならば、河の水を汲んで地に注げ。さすれば其水が血になつて居るから」

斯う諭されても、モイゼはまだお承けしようゝしない。

「私はごうも口が重くて、自由に話が出來ません」

「人の口を造つたものは誰である？啞者、聾者、目明、瞽者等を造つたものは誰である？我はヤウエでないか。然らば行け、我れ汝の口に在りて、汝の言ふべきゝを敎へるであらうから」

「主よ、願はくはもつゝ適任な人をお遣し下さいませ」

ゝモイゼが飽まで辭退せんゝするものだから、神も終にお怒りになつた。

「アアロンは汝の兄弟でないか。彼は言を善くする。今汝に遇はうゝ出て來て居る所だ。汝彼に語つて言をその口に授けよ……彼汝に代つて民に話をするであらう」

ゝ嚴重に仰付けになつた。モイゼも今は已むを得ない。畏つてお使を承り、エトロに暇を告げて、歸途に上つた。

アアロンも神の御告によつて、モイゼを出迎へ、ホレブ山の邊で二人がはたゝ行遇つた。モイゼは之に神の自分に言含め置かれたゝゝ、その奇蹟ゝを物語つた。斯くて二人相携へてゼッセンの地へ歸りイスラエルの長老等を集めて、ヤウエの御言を告げ、彼等の面前で奇蹟を行つた。民はそれを信じ、ヤウエを伏し拜んだ。

敎訓—モイゼはキリストの象徴で、その生立からしてよく似て居る。國王の殘酷きはまる命令によつて、多くの生兒が殺される中に獨り不思議な生命を助かつた所なゞは、キリストそつくりである。猶神は赤〻ゝ燃に上りながら、少しも燒けない藪の中でモイゼにお顯れになつた。イスラエル人がいくら苦勞の火に燒かれても、神が共に居て下さるなら、燒き盡される憂はないものだ、ゝお諭し下さつたものである。我等も神ゝ突つ離れさへしなければ、たゝへ艱難苦勞の火の中に投げ込まれても、燒き盡されないのみか、かへつてその火に鍛ひ上げられて、いよ〳〵清く美しくなるばかりである。

參考　ヤウエの讀み方

（イ）―新教側の聖書には神の御名をエホバと呼んであるのに、自分が故にヤウエと讀んだのは、奇を衒つて然うしたのではないかと思ふ方もあるか知れない。實を云ふと、ヘブライ語には母字がなく子字のみを並べて書くので、讀み方の判然しない所が往々ないではない。よつて紀元六、七世紀からユデアの學者等はその子字に我國のヲコト點見た樣なものをつけて、讀方を明にした。之をマッソレト點（Points Massoretiques）と稱する。今神の御名は（Jhwh）の四字を並べたものであるが、之を何と讀むべきか、一向判然しなかつた。と云ふのは、レウイ記に「ヤウエの名を瀆すものは殺されん」（二四ノ六）とある。「瀆す」と云ふのはヘブライ語の（Naqab）を譯したのだが、それには瀆すの外に、明瞭に發音するの意味もある。バビロン囚擒後のユデア人は、この禁止を餘りに狹く解して、ヤウエの御名は絶對に發音すべからずとなし、彼の四字に出遭する毎に「アドナイ」（Adonai―主）とか、「エロイム」（Elohim―強き者）とか讀ませる樣になり、その爲にほんとうな讀み方が分らなくなつた。後でマッソレトは彼の四字にアドナイの母字を添へて「エホワ―Jehowah」と讀ませ、その讀方が十二世紀頃からだんだんと世に弘まり、殊にレオ十世教皇の聽罪師たりしペトルス・ガラチヌス（Petrus Galatinus）の運動によりて、廣く世に行はれる樣になつた。

然し夫れはマッソレト句點のつけ方が正しくなかつた所から生じた誤りで、語原から推しても、古い文獻に照して見ても、ヤウエ（Jahweh）と讀むべきものだと云ふことは、殆ど疑を容れない。實際ヤウエは「在る」と云ふ動詞の三人稱である。テオドレトウスの說によると、サマリア人は「ヤヴエ」と發音して居た。聖エピファヌスも「ヤウエはユデア人の神の名である」と言つて居る。

（ロ）**ヤウエの意義**―今ヤウエの名は最もよく神に當り、その神の神たる所以を特色づけ、他のすべての物とはつきり區別する名である。神は實に「絶對的有―ens simpliciter」である。その本性の力によつて、己自身より有る所のもの（ens a se）で、「有」のすべての充實さを、すべての完全さを、すべての力を無限に具備し、それこそ局限もなく、境界もなき絶對的有である。隨つてこの名は神の性質、その意志の絶對に變ることなく、動くことなきを示したもので、主がイスラエルと契約を結び、特に「イスラエルの神」となり、多大の恩惠を引切りなしに浴せようとし給ふ此際、彼等に取つては非常に深長な意義を有するのであつた。

成るほど神は太祖等にもお約束にならぬではなかつた。然し今やすべての民にその約束を新にし、してその恩惠の第一として、エジプトの奴隷より救ひ出すべき言質をお與へ下さつたのである。

この重大な場合にヤウエの御名と、「汝等の祖先の神」の夫れとは約束を履行すると云ふ堅い〳〵保證ともなるのであつた。神は「有つて在るもの」永遠より在りしそのまゝである。その能力にせよ銳智にせよ、少しも減退しない。その性質でも、その活動力でも變ずる所なく、その約束に忠なることも動く所がない。祖先に約したことは必ず果して下さる、ヤウエの名がその保證である。

隨つてこの名は、神の慈愛に滿腔の信賴を置け、と云ふ激勵となり、逆境に際して甘い慰めともなるのであつた。「我はヤウエにして、易らざるものなり。故にヤコブの子等よ、汝等は亡されず」（マラキア三―六）と主も曰うたことがある。斯樣な譯で、この名は「契約の神」としての主に最もよく嵌つて居るから、聖書には神とその民との關係を述べる際に殊更らこの名を用ゐてある（第二章四七ページ參照）

モイゼがエジプトに下りて種々の運動を試みても、すべて失敗に畢り、がつかりして居ると、神は

彼を激勵して

「我はヤウエなり、我全能の神として、アブラハム、イザアク、ヤコブに顯れたり。されど我名のヤウエたることは彼等に知らしめざりき」（出エジプト記六ノ二―三）

と曰うた。この明文によりて、ヤウエの名はホレブで示現される前には全く知られなかつたのだ、たとへ知られて居たにせよ、それはたゞ特選の人に限るのであつた、創世記に始終この名をくりかへしてあるのは、たゞ事前に用ゐたのだと主張する人がある。

然し創世記には叙事中に百十六回、對話中に四十九回も用ゐてあるのに、夫れが皆事前行爲だとはどうしても受取れない。前の明文も論者の言ふ樣な意味は有たない。神がモイゼに啓示し給うたのは「ヤウエ」と言ふ語ではなく、その持つて居る意義と之が範圍とであつた。その民に對して爲すべきことは嘗て太祖等の爲になしたのと異るべきことを、神は之を以て明にし給うたのである。卽ち「エル・シャッダイ―El-Shaddai―全能者」は選を受けし「家」の神であつたが、ヤウエは選を受けし「民」の神であらう、エル・シャッダイは太祖の一家を繁殖せしめたが、ヤウエはイスラエル民を奴隷の境遇より救ひ出し、詛はれしカナアン族を放逐して、其跡に彼等を居住せしめ、政治的獨立を與へるであらう、エル・シャッダイはカナアンの地を約束したが、契約の神たるヤウエはその契約を守りて、實際、彼地をその民に與へるであらう、と言ふ意味なのである。前の明文につゞいて「我れ汝等を取りて我民となし、汝等の神となるべし、汝等は我こそエジプト人の重擔の下より汝等を引出せし汝等の神ヤウエなることを知らん」（出埃及記六ノ七―八）とあるのを以ても明あでる。

第二十三章　十の災害

（一）**フラオの頑冥**―モイゼとアアロンはファラオの前に出て、神の思召を告げた。

「イスラエルの神樣ヤウエからの御託宣でございます。民を去らしめ荒野へ行つて祭祀をさして下さい」

「ヤウエが何者なれば、俺はその聲に從つて、イスラエル人を去らしめねばならぬか。俺はヤウエを識らない。イスラエル人を去らしめることも相成らぬ」

「神樣が私等にお顯れになつたのです。どうぞ三日間の暇を賜はり、荒野へ行つて、犧牲を獻げさして下さい」

と折返して嘆願したけれども、ファラオは傲然と肩を搖つて聽容れない。そればかりか、監督のエジプト人を呼んで、

「彼奴等は餘り暇があるものだから、荒野へ行つて、神樣を祀りたいの何のと餘計なことを申すのだ。今から瓦を作るのに苅を給與つてはならぬ。自身に集めさせい」

と命じた。爲にイスラエル人の苦勞は一倍と重くなつて來た。自分で國内をかけ廻つて藁を集め、苅を拵へねばならぬ。それに瓦は前と同じ數だけ作らされる。作り上げなければ、監督人がピシ〳〵と打んぶ撲る。夫は〳〵堪つたものではない。心の變り易いイスラエル人のことであるから、全く我慢がしきれな

いで、モイゼとアアロンを怨み、

「何故私等のことを王様に惡く言ひ立てたのです。でなければ斯んな目に遭ふはずがないじやありませんか」

と苦情を申立てた。そしてモイゼが、力付けの御言をヤウエに承つて、夫れを彼等に傳へても、耳さへ傾けない。

何んな片田舍でも「住まば都」で、容易に其所を立退きたくないのは人情である。況んやイスラエル人の如く、長い間奴隷の境遇に沈み、「苦しい苦しい」とは言ひながらも、段々と夫れに安ずる樣になつて來たものは、猶更さうである。後で神の全能の御腕に救ひ出され、毎日〳〵目を廻す程の奇蹟に驚ろきながら、動もすると、エジプトを戀しがり、モイゼやアアロンを手古摺らせた位だから、餘程のねらい目に遭つて、懲り〳〵しなければ、とてもエジプトを出去る氣にはなり得ないに極つて居る。よつて神はファラオの强情を幸ひに、いやと云ふほど彼等に難儀を見せられたのである。

(2)十の災害—そこで神はモイゼとアアロンに命じて、再びファラオに謁見を請はせ、自分等がイスラエルの神に遣されたものに相違ないと云ふ證據に、杖を投げて蛇となさしめ給うた。然しファラオは驚ろかない。エジプトの魔法師を呼んで、手にせる杖を投げさせると、夫れも同じく蛇になつた。でもモイゼの蛇は魔法師の蛇に跳りかゝつて、立ごころにそれを呑み込んで了つた。

モイゼ王の前にて杖を蛇になす

是を見てもファラオの心は頑として動かない。よつて神はモイゼとアアロンの手を以て續け樣に十の災害をエジプト人の上に降し、ファラオの强情を懲しめると共に、イスラエル人には一方ならぬ氣力をつけ、信仰を目醒させ、彼の乳滴り、蜜流れると云ふカナアンの地へ歸りたいと云ふ心になして下さつた。今その災害を略記せんに、

(1)或朝モイゼとアアロンはヤウエの仰に從ひ、ニール河の畔に行き、向ふからやつて來るファラオに出遇した。そして王の前でアアロンが杖を擧げて河の水を打つと、國内の水と云ふ水は、河のでも、運河のでも、沼のでも、水瓶に酌んで澄ましてあるのまでが、皆腐つて赤い血の如くなり、水中の魚は殘らず死んで了つた。エジプト人は平生河の水を飲んで居るのに、斯うなつては第一飲料水に困り果て、新に井を掘るやら、何うするやら大騒ぎをやり出した。

一週間もその通りであつたのだが、ファラオは魔法師にも同樣な奇事を行はせて平氣の平左で居る。

(2)今度はモイゼが神の仰に從ひ、アアロンに命じて手を水の上にさし伸べさせると、夥しい蛙が水から上つて來て、野と云はず、畑と云はず、群を成して這ひ廻り、エジプトは全く蛙の國となり、竈にも食卓にも寢床にまでも飛び込んで來て仕方がない。魔法師もその眞似をして蛙を呼び出しは呼出したが、然し退治することが出來ない。流石のファラオも終に冑を脱ぎ、モイゼとアアロンを呼び寄せて、「早く神様に祈つてこの蛙を退治してくれ、暇を出して祭祀をさせるから」と頼んだ。モイゼは王の請に應じてヤウエに祈つたら、さしもの蛙も家に町に田畑にコロ〳〵と死んで了つた。死骸を集めると大な山を成す程で、やがて夫れが腐つて堪へ難い臭氣を放つたものだが、然しファラオは蛙の無くなつたのに安堵して一向暇を出してくれない。

(3)三度目にモイゼはアアロンに命じて、杖を上げて地の埃を打たせた。すると其埃が數限りなき蚊となり、人にも獸にも取り付いて始末に負へぬ。魔法師も同じく蚊を出さうとしたけれども、今度は出來なかつたので、「これは神様の御手の業です。とても我々には及びません」とファラオに申上げた。ファラオも隨分と困りは困まつたが、然しそれ位では決して强情の角を折らない。

(4)その次にヤウエはエジプトの空も眞黑くなるほど澤山の蚋を生ぜしめ、ファラオを始め、エジプト人を散々に苦しめ給うた。然しゼッセンの地には蚋の影すら見ない。ファラオも流石に閉口し、モイゼとアアロンを呼びつけて許可を與へた。

「行つて汝等の神様に祭祀を獻げい、許すから。然し國から出ては可けないよ」

「いや夫れは出來ません。私等はエジプト人が神と尊んで居る牛やら羊やらを犧牲として献げるのですから、國内でそんなことでも致しましたら、きつとエジプト人から石殺にされます。三日位もかゝる荒野に行つてお祭をします。夫れがヤウエ様の仰なんでございます」

斯う云ひ張つて二人は一歩も讓らない。背に腹は換へられないので、ファラオも到頭我を折つて、

「ぢや荒野へ往つてヤウエを祭るのを許すから、兎に角この蚋を驅除けてくれ」

と願つた。然しモイゼがヤウエに祈つて蚋を一匹もない様に驅除けて了ふと、ファラオの心は忽ち翻つて、イスラエル人を放免さうとしない。

(5)そこでヤウエは野に放つてある牛、馬、驢馬、駱駝、羊に恐ろしい疫病を流行して、其等を殘らず仆して了はれた。

(6)夫れでもファラオがイスラエル人を放免してくれないものだから、モイゼは竈の灰を摑んで空中にパッと播き散らした。忽ちその灰が人にも獸にも附いて腫物を生じ、膿を持ち、痛くて痒くて堪らなかつたのだけれども、ファラオの心は些も挫けない。

(7)今度はモイゼが杖を天にさし伸ばすと、俄に大嵐が起つて、電光閃き、雷鳴轟き、その中に大粒の雹が降りに降つて、野の青草、山の樹木、畑の蔬菜を容赦なく叩き付け、打折つて了つた。ファラオも

今度ばかりは全く閉口して、

「俺が悪かつた。放免してやるから、ヤウエに祈つて雷と雹とを止めて下さい」

と頼んだ。けれども夫れが止むと、前の約束はケロリと忘れて、何うしても暇を出さない。

(8)モイゼは今一度杖をエジプトの上にさし伸した。すると熱い風が起つて一晝夜も吹き續き、朝になるや數限りもない蝗か、その風に送られて黑雲の如く飛んで來た。そして雹の打ち洩した草木の上に集り、青物と云ふ青物は樹でも草でも花でも實でも一堆りもなく喰ひ荒して了つた。ファラオは狼狽へてモイゼとアアロンを呼び寄せ、

「俺が悪かつた。何うぞ之を驅り除けて下さい」

と一心に賴むものだから、モイゼがヤウエにお祈りをすると、俄に激しい西風が吹き起つて、さしもの蝗を殘らず紅海の中に吹き送つた。ファラオは夫れに安堵して、相變らずモイゼの願を聽容れない。

(9)因つてモイゼが片手を天にさし擧げるや、エジプト全國は眞暗黑になつて了ひ、三日の間といふものは、物の辨明も付かねば、一足出歩くことすら出來なくなつた。ファラオも大分弱り込んで、モイゼとアアロンを招き、

「荒野に行つて祭祀をしても可い。たゞ牛や羊は殘して置け」

と命じた。モイゼは聽かない、

「彼地へ行つた上でなければ、何を獻げよと命じられるか分りませんから、皆連れて行きます。爪一つでも殘しません」

と答へたので、ファラオは見る〳〵青筋を立て、

「歸れ、重ねて俺の前へ來るな、來たら生命がないぞ」

と叱り飛ばした。モイゼはちやんとこの先き何うなると承知して居るから、決して狼狽へない。

「はい、仰せの通り致します。決して御前へ罷出ません。たゞ神樣の御言をお聽き置き下さい。上は王樣より下は賤しい奴隷の家に至るまで、夜中に長男と云ふ長男は殘らず死んで了つて、全國に未曾有の泣聲が起るでせうが、イスラエル人の家には犬の泣き聲すら聞にますまい。さうなると貴方等が皆私の方へいらして、地に平伏し、何うぞ急いで立退いて下さい、とお願ひになるでせうから、その時、出て行きますよ」

と言ひ棄てゝ歸つた。

(10)エジプト全國に大きな災害が九回までも引きりなしに遣つて來たのに、イスラエル人の住んで居るゴッセンの地には何の變つたこともない。水も腐らねば蛙も湧かない。蚊や虻や疫病や腫物にも惱されない。雹、蝗、暗黑、そんなものも知らず顏で、安かに樂しく過してゐる。爲にエジプト人は漸くヤウエの御力の偉大なるに驚きの目を睜り、イスラエル人も深くモイゼとアアロンに信服し、心からヤウエ

に縋る樣になつて來た。

さてモイゼとアアロンはファラオの前を退いてゼッセンに歸るや、早速民を集めて神の御命令を傳へた。

羊の血を鴨居に塗る

「この月の十日（陰曆三月）に家父たる者は、皆瑾のない當歳生れの牡の羔を取り、十四日まで守つて置き、その夕方に之を屠る。そして血は戸の鴨居と兩側の柱に塗り、肉は火に燒き、酵の入らないパンと苦菜を副へて食べる。生のまゝでも水に煮ても食べるのでない。火に燒いて頭も脛も臟腑も皆食べる。食べ餘した分は明朝まで殘して置かないで、皆燒き棄てゝ了ふ。食べる時は帶を締め、靴を穿き、手には杖を持ち、急いで食べるのだ。是こそヤウエの過越（Phase. v. Pascha）である……この夜、我れエジプト全國を巡り、人だらうと畜類だらうと、初子は殘らず殺し、エジプトの神々にも罰を蒙らせるであらう。我はヤウエである。血は汝等が住める家にあり て記號となり、その血を見る時、われ汝等を過越し、死滅の災害は汝等に降らないであらう」と。

イスラエル人は仰せの通りに致した。果して十四日の夜中になると、上はファラオの長子から下は牢獄に在る俘虜の總領、家畜の初仔に至るまで、悉く死んで了つた。死體の轉がらぬ家とてはない。エジプト全國は氣も狂はんばかりに泣き叫び、都も鄙も擧つて涙の雨に漂うた。ファラオは大に狼狽へ、夜中急使を飛はしてモイゼとアアロンを招き、

「起つて我民の中から出て行つてくれ。汝等もイスラエルの子供等も往つて汝等が言ふがまゝにヤウエを祀れ、牛も羔も率き去つて宜しい。たゞ去る時は俺を祝してくれ」

と願ふが如く言つた。エジプト人もまた急きに急いて、

「早く出て下さい、皆死んで了ふ」

と賴み、衣服でも、金銀の器でも、イスラエル人の請ふがまゝに惜氣なく與へた。是に於てイスラエル人はモイゼとアアロンに率ゐられ、ヨゼフの遺骸を携へて、四百三十年間も住み、隨分と苦勞を見たエジプトの地を立去つた。そしてエジプト人が早く早くと急き立てるので、捏粉のまだ酵も入れないのを執り、捏盤を衣服に包み、肩に負うて出で、途中で灰の下に埋燒きをした。人數は婦人、小兒、老人を別にし、丁年の男子（二十歳以上）ばかりでも六十万ばかり、總數は二百万を越したらうかと思はれる。

別に戰敗れて俘虜となり、エジプトに酷使はれて居た人々や、そのほか雜多の寄集者が數知れず行を共にした。

彼等はヤウエの驚ろくべき能力を見て、しみ〴〵と感心し、自分等もイスラエルに約束されし祝福に與りたいと思つたのであらう。然し彼等はイスラエル人の爲に隨分手足纏ひとなり、神やモイゼに向つて不平を鳴らさせる便ともなつたものである。

教訓—この世で主が罪人を罰し給ふのは、たゞ罰する爲に罰し給ふのではなく、むしろ懲めて悔い悛めさせる爲であるから、最初はなるべく輕い罰を下し、それでも猶悛めないと見るや、次第に之を重くし給ふのである。エジプトの十の災害を見ても判る。だから初め輕い罰に遭つた時、早く迷ひの夢を醒して悔い悛めるが餘程身の爲になる。

參考（1）十の災害に就て

この災害の目的は

(1)ファラオを始め、エジプト人を强要して、イスラエル民の出發を許可せしめる。

(2)ヤウエを知らないと言ひ放つたファラオに、眞の神たることを承認させる。

(3)エジプトの神々の無能、無力なるを眼前に突付けて見せる。

(4)イスラエル民に對するエジプト人の殘虐と、彼等がヤウエの命に從はず、偶像崇拜に溺れて居るのを罰するに在つた。

隨つてこの災害中には、エジプト人が神に祀つて居るニール河の水を血になし、同じく彼等の崇拜せる動物を蚊や蛇に惱ませ、疫病に斃れしめて、その無能無力を暴露させ給うた。なほ神は十の災害にエジプトの地方色を頗る濃厚ならしめて居られる。實際その災害たるや、エジプトに屢起る天災で、たゞ夫れだけならば、別段珍らしくもないのであつたが、然しその發生の事情と、發生方、その發生せし時期、その恐るべき强烈さ、發生するのも消滅するのも全くモイゼの意のまゝであり、しかも夫れがエジプト人の住んで居る地域に限り、イスラエル人の居住地には少しも見られなかつたこと等が奇蹟とすべきであつた。隨つてエジプト人は容易にヤウエの御手を其處に認めることも出來れば、或は偶然の出來事か、魔法に出るかと頑張ることも出來た。然しこゝの詰りはヤウエがエジプトの神々や魔法師よりも强い、その民の壓制者を罰し給ふのだと、流石のエジプト人も認めざるを得なかつたのである。

(2) 出エジプトの年代

(イ)イスラエル人がエジプトを發足せし年代に就ては兩說がある。第一說は迫害者を第十八王系のトウトメス三世（Thoutmes 一五〇一年—一四四九年）とし、出エジプトのファラオをアメノフイス三世（Amenophis 一四一三—一三七九）となす方で、第二說は迫害者を第十九王系のラムセス二世（一三一〇—一二四四）とし、次王メネフタ（Menephtat 一二四四年—一二三五年）の時にエジプトを出たと云ふのである。第一說に從ふと、出エジプトからサロモンの神殿建築までを四八〇年と計算せるサムエル書の記事（サムエル前六ノ一）としつくり合ふ。然しイスラエル人が

エジプトに住んで居たのは四三〇年間であつたから、そうすると彼等がエジプトに移つたのは一八三〇年頃となり、ヒクソスが下エジプトを征服し終つた一六八〇―一五八〇年よりも時代が遙に古くなつて來る。其上、イスラエル人が一四〇〇年前後にエジプトを去つたものとすれば、一三六〇年頃にはカナアンの地に安着して居なければならぬ。然るにアマルナ文獻には一四一〇年―一三六〇年に於ける彼地の政治狀態に關して、細々と書いてあるにも拘らず、ヘブライ人のことは一つも出て居ない。成るほどハビリ族の名が見ないではないが、あれはエジプトの束縛を脫してパレスチナ地方の獨立を計らうと國民運動を起せし部族で、猶この說を以て事實に近しとせば、ラムセス二世が兵をパレスチナに出せし時、イスラエル人は百年も前から彼地に國を樹てゝ居たはずなのに、右の遠征記中に彼等の話が少しも見ないのは、どうした理由であらうか。

一八九六年テベーの平原で、メネフタ王の功業を銘せる碑文が發掘された。その中には、

「リビアが荒されてより諸侯は平和を言はんがために平伏し―敵の中に一人も頭を擧げ得る者なし、ケタ(Kheta族)は平和裡にあり、カナアンは捕虜とされ――アスカロンは移され ゼゼルは服屬し――ヤヌアム(Janouam)は存在せざりしが如く、イスラエルは滅されて種子なきに至り、――パレスチナはエジプトの寡婦の如くなりき」

とある。「種子なき」とは餘蘖なきの謂である。メネフタの時、イスラエル人が他の諸民族と聯盟してエジプトに反抗したものとするならば、當時カナアンの地に可なり強い根據を有したものと思はなければならぬ。さすれば出エジプトは百五十年か二百年前、卽ち一四〇〇年前後、アメノフイス三世の頃となり、第一說を裏書する譯になる。

然しウエンサン師(P. Vincent)は、その著「カナアン」中に、是はエジプトを出て、荒野に深く進み入つたイスラエル人を以て、餘蘖なき迄に敗亡したと誇張した迄に過ぎない、必ずしもイスラエル人が以前から國を樹てゝ居た意味に解說する必要がない、と云つて居る。當らずと雖も遠からずではあるまいか。

(ロ)第二說に從へば、ヘブライ人がエジプトに居住せし年數としつくり合致する。卽ち

(1)―一二四〇年(出エジプトの年)に四三〇年を加へると一六七〇年となり、ヒクソスが全エジプトを統御したのは一六八〇年から一五八〇年に至る間であつたから、双方の繫ぎ合せに不自然な點が見ない。

(2)―第十八王系のファラオが遺した土木工事の跡は、國境によりも上エジプト、殊にテベーに多く存し、かへつて第十九王系になると、セチ一世でも、ラムセス二世でも、メネフタでも、三角洲の東部(Delta Oriental)に主としてその活動の跡を遺して居る。

(3)―ラムセス二世(一三一〇年―一二四四年)は在位六十六年の久しきに及び、常にデルタのピーラメセ(Pi-Ramesse)に都したものである。モイゼが四十年間宮廷に生活したこと、同胞が苦役に惱めるのを目擊し得たこと、マヂアンの地に四十年間も滯在して、靜に時期の到來を待つことにした理由なども、この王の時代とするならば諒解し易い。既にして猜疑心の深い、橫暴殘虐なラムセス二世に代つてメネフタが位に即いた。この王が比較的溫和な質で、何方かと云へば、むしろ優柔不斷であつたことは災害の話を以ても推斷されよう。モイゼはこの王と交涉を重ね、終にその反對に打勝ち、民を率ゐて發足することが

出來たのである。

然しこの說に從ふと、判士時代が隨分短縮されて來る、と云ふのは、サウルとダウイドの時代は紀元前一千百年乃至一千年までの間で、イスラエル人が荒野に漂泊ひし四十年を考慮に入れると、千二百年頃から千〇五〇年頃までの間に判士時代を嵌め込まねばならぬ。その上イスラエル人のエジプト滯留を四百三十年とし、彼等がエジプトを出てからサロモンの神殿建築までをサムエル書(紀前)によつて四百八十年とするならば、その間の年數を合せることが頗る困難である。

要するに創世記(一五ノ一三)、及び使徒行錄(七ノ六)は、イスラエル人のエジプトで送つた歲月を四百年として、出エジプト記には四百三十年としてある。最も聖パウロはガラチヤ書中に「神の固め給ひし契約をば、それより四百三十年の後に與へられし律法」と云つて居る。聖パウロは七十人譯に從ひ、アブラハムがカナアンの地に移住した年から數へて四百三十年としたのかも知れぬ。さなくとも神はアブラハムとのみ契約を結び給うたのでなく、イザアクやヤコブとも重ねて之を結び、ヤコブがエジプトに下る時、特にベルサベエに於て之をくりかへし給うたのだから、聖パウロは最後の反覆から數へたのであるかも判らない。

然しヤコブからモイゼまで四代(ヤコブ、レウイ、カアト、アムラム、モイゼ)の間に四百三十年を經過したことは信じ難いと云ふ人があらう。夫れは無理もない話だが、前にも一言した如く、聖書の系圖にはよく脫落があることを忘れてはならぬ。イスラエル人はエジプトに移住した後、非常な數に達して居る。ヤコブが始めてエジプトに入つた時は總數七十人に過ぎなかつたが、エジプトを出る時は、二十歲以上の男子が六十万人、レウイ族ばかりでも二万二千を數へたものである。之には相當長い年月を要せしことは一見して明であらう。

兎に角、アッシリア文獻やエジプト文獻を研究して、エラム王コドルラホモルのカナアン侵入、ヨゼフの副王時代、出エジプト時代が一定されない限り、正確な年代表は得られぬものと諦めるより外はないのである。

第二十四章　紅海を渉る

(一)—イスラエル人はアビブ月(今の三月より四月に亙る)十四日の夜、ラムセスの城下を發足した。ラムセスと言へば、自分等がエジプト人に苦役せられ汗と膏とを絞つて新築するか、少くも增設した都城だつたので、之を立去る彼等の胸中や實に感慨無量であつたじやあるまいか。してこのラムセスはゼッセンの中央に在つたのだから、各方面から集會して勢揃ひをするのに至極便利であつた。出發の當初から主はその民に特別の御保護を加へ給ひ、晝は雲の柱を彼等の前に立て、夜はそれを火の柱となして道案內をして下さつた。第一日に達したのはエジプトの國境に位せるソコト(Soccoth—ヘブライ語のSukkot)で、それから出發して荒野の端なるエタム(Etham)に天幕を張つた。エタムの位置は今に判然しないが、地中海の東岸に沿つてカナアンの地へ到る商隊の通路に當る所であつたことは言ふ迄もない。この道を北に進みさへすればカナアンの南境ガザ(Gaza)に出られるが、然しファラオの追擊を蒙る憂がある。其上ガザ地方の民は、剽悍、勇猛、武を好み、しかもエジプトと同盟を結んで居るのだから、到底無事にその境

上を通過させるはずがない。之に反してイスラエル人は農耕牧畜に從事せる平和な民であつたし、長らくエジプト人の奴隷となつて居た關係上、意氣地もなければ戰にも熟して居ないので、かゝる强敵に打ッ突つたものなら、忽ち臆病神に襲はれてエジプトへ逃げ歸り、再び慘めな奴隷生活に安じようとするに極つて居る。依つて神はモイゼの勝手知つたシナイ半島を迂廻させ、其間に彼等の身心を鍛ふと共に、嘗てモイゼに約束し給うた如く、シナイ山に於て律法を發布し、彼等と特別の契約を結ばんと思召しになつた。出エジプト記に曰つてある。

「ヤウエ、モイゼに告げて曰ひけるは、イスラエルの子等に命じ、路を轉じてマグダル(Magdal-Mogdol)と海(紅海)との間なるフイハヒロト(Phihahiroth)の前に當るベエルセフオン(Beelsephon)に天幕を張らしめよと」(出エジプト一四一二)

モイゼは仰のまゝにフイリスチンへの路を棄てゝ南に轉じ、紅海の濱へ出た。その間に幾日を費し、如何なる路筋に由つたものか、一向判然しない。ファラオはイスラエル人が國を空虛にして出て行つたのを見て、遺憾に堪へないで居る所に、彼等が荒野の中に路を失ひ、進退谷つて居る由を傳へ聞いたので急に選拔の戰車六百輛、その他エジプトの總ての戰車、騎兵等を繰り出して後を追はしめた。イスラエル人の驚き方と言つたらない。前には漫々たる紅海の水が横り、右には山岳(多分アタカ山?)が峙ち、背後からはエジプトの大軍が押し寄せたので、今こそ全く嚢中の鼠だ。皆大いに恐れて、色を失ひ、ヤウエに呼ばり、モイゼに向つて呟いた。

「エジプトには墓がなかつたから、我々を荒野に引出して死なせるのですか、何故我々をエジプトから導き出して、斯んな目に遭はせるのです。エジプトに居る時、我々を棄て置いてエジプト人に事へさして下さいと言つたぢやありませんか。荒野で死ぬよりも、奴隷としてエジプト人に仕へてゐた方が幾ら優しだつたでせう?」

未だ奴隷根性が拔けて居ないのだ。然しモイゼの度量は海の如く、そんなに口汚く罵られても聊か氣を惡くする所なきのみか、却つて懇に彼等を宥め賺し、

エジプトの戰車

「恐れる事はない。今日こそエジプト人の見納めで、復彼等を見ることはあるまい。ヤウエ樣が汝等の爲に戰つて下さるから、靜にして居るが可いよ」

(2)紅海の徒渉—夕暮になつて、エジプトの大軍はイスラエル人の天幕に近いた。すると今迄イスラエル人の前にあつた雲の柱が俄に飜へつてイスラエル人とエジプト軍との中間に立つたので、イスラエル側は忽ちあか〳〵と眞晝中の如く照り渡つたが、エジプト軍の方は眞暗黑となつて一歩も前進されない。

厚くモイゼを信ずる樣になつた。

其時モイゼが杖を海上にさし伸ばすと、海の水はさつと二つに分れ、中に廣い〳〵大道が出來、その上を強い風が渡つて忽ちから〳〵に乾した。海水は見ないヤウエの全能力に支へられて兩側に垣をなして居る。イスラエルは急いでその道を進み、難なく對岸に着いた。

曉方エジプト人は之を見て、逃すものかと後を追つて海の中に繰り込んだ。時分を見計つて、ヤウエは彼等の車を覆へし、その馬を打倒しなさつた。エジプト人は大に驚き、我勝にと逃げ出した。然しモイゼが再び杖を海上に伸すや兩側に垣をなせる海水はどつと勢激しく故へ復つたから堪らない。エジプトの大軍は一人も殘らず激浪に浚はれ、屍骸となつて濱邊に打上げられた。之を見たイスラエル人は愈々ヤウエを畏れ、

（3）讃美歌――是に於てモイゼは有名な讃美歌を作り、姉のマリアが鼓に合せて民と之を歌ひ、ヤウエの御惠を感謝した。その讃美歌は三節より成り、第一節は讃美の主旨を述べたものである。

「ヤウエを讃美して歌はん――高らかにその光榮を揚げ給へり。
馬とその乘者とを海に投うち給へり。
ヤウエは我力、我讃美なり――彼は我救ひとなり給へり。
彼は我神なり、我之を稱へん。――彼は我父の神なり、我之を崇めん。
ヤウエは武者にて、ヤウエはその名なり。――彼ファラオの戰車と、その軍勢とを海に投うち給へり。
精選の將軍等は紅海に沈み、大水彼等を蔽ひたり。――彼等は石の如く淵の底に下る。」

第二節は神の力が如何に強く迅速に顯れたかを歌ひ、次にエジプト軍の慘滅を劇的に描いて居る。

「ヤウエよ、汝の右の手は力を以て顯れ――ヤウエよ、汝の右の手は敵を碎けり。
汝の大なる光榮もて汝に逆ふ者を打倒し給へり――汝の怒を發して、彼等を藁の如く燒きつくせり。
汝の怒の氣息によりて、水積み重なり――流動し易き浪も壁の如く立ち、波海の中に硬くなれり。
敵は言へり。後を追ひて之を捕へ、分捕品を分たん――我心は飽き足るべし。
我劍を拔き――我手彼等を斬らんと。
汝氣息を吹き給へば、海彼等を覆ひ――彼等は鉛の如く激しき水の中に沈みたり。」

第三節は勝利者たるヤウエを讃美し、その民に加へ給ひし優しい御情を歌つて居る。

「ヤウエよ、神の中に誰か汝の如きものあらん――誰か汝の如く聖にして、讃美を受け給ふべく――威ありて奇事を行ふ者あらんや。

汝御手を伸べ給へば――地は彼等を呑めり。

汝憐を垂れて民を贖ひ――之を導き給へり。

汝の力もて彼等を――汝の聖なる住所に運び給ふ。

國々の民聞きて慄き――フイリスチンに住める者恐怖を抱けり。

エドムの君等は駭き――モアブの強き者も慄けり。

カナアンに住める者は喪心せり――恐怖と戰慄と彼等に及べり。

汝の腕の力もて――彼等は石の如く口を噤めよかし、

ヤウエよ、汝の民の通り過ぐるまで――汝の贖ひし民の通り過ぐるまで。

汝彼等を導きて――汝の嗣業の山に植ゑ給はん。

ヤウエよ、是れ汝の住所として備へ給ひし所なり――主よ、是れ汝の御手の建て給ひし聖所なり。

ヤウエは世々限りなく王たり給ふべし。」

歌訓――イスラエル人は紅海を渡つて、始めエジプト人の手を全く脱れ、約束の地を指して進むことが出來た。我等も洗禮の水を渡ると、以て惡魔の手を脱れて聖會の人となり、約束の地たる天國への途に就かれる身の上となるのである。

參考　紅海を渉る迄の道筋

（イ）――この道筋を確める爲には、スエズの地峽を詳にする必要がある。この地峽の幅は百十三キロメートルに及び、メンザレ湖（Menzaleh）の南端より南に下ると、幾個かの砂丘が欹ち、その最高頂をエルーカンタラ橋（El-Qantara）と稱する。エジプトと東北の荒野に渡る通路を爲して居る所から、そんな名を得たものである。砂丘を南に下るとバラ湖（Lac Balah）となり、其次にエル・ギスル（El-Gisr）と稱する嶺があり、海拔二十メートル、地峽中一番高い所で、地中海の水を以南の湖に通ずるには是非ともこの嶺を開鑿しなければならぬのであつた。更に南へ下るとチムサ湖（Lac Timsah）があり、湖の南方にはトウスム（Tussûm）とセラペウム（Serapeum）と云ふ二個の嶺が聳ゐて居る。夫から十キロメートル南下すれば、ビッテル湖（Bitter-lacs Amers）に達する。湖は北西から南東に伸びて長さ四十キロメートル、幅は最も廣い所で十乃至十二キロメートル、深さも十五メートルに及んだ所がある。地峽の開鑿前には水のない乾湖で、底は塩層を成して居たものである。本湖と紅海との間にはシヤルフ（Shalûf）と稱する高さ七メートル位の嶺があり、夫れから紅海の濱に到る二十キロメートルの間は高さ一メートル位の緩漫な降りの砂原で、東には小な丘又丘が連り、西にもゼネフエ（Geneffeh）山の支脈がうねうねと高低起伏し、砂原の南端に築かれた港が所謂スエズ港である。

出エジプト記によると、イスラエル人はラムセス府から出發して居る。然しそのラムセス府は果し

宿營されるはずがない、位置は固より不明だ。

エタムは荒野の名でもあれば、イスラエル人が一日目に宿營した所でもある。エル・ギスル附近の地ではあるまいかと云ふことだ。イスラエル人は神の仰に從ひ、エタムから踵を回らして紅海の方面、フィアフイロトの前に出た。フィアフイロトはミグドルと海との間、ベエルセフォンの前に位せるのであつた、と出エジプト記には讀まれる。ミグドルはエジプト語のマクトル(Maktl)で、城塞を意味し、アジア民族の侵入を防ぐ爲め、國境には幾多の城塞を築いてあつたはずだから、果して何の邊の城塞に當るか斷定し難い。ベエルセフォンは、ヘブライ語でバアル・セフォン(Ball Sefôn)と云ひ、「北のバアル堂」と云ふ意味である。バアルはよく高い丘の上に祀られ、エジプトのセト神(Set)と同一視された海の神であつたから、是は多分海に臨んだ山、ゼネフエ山(Djebel Geneffeh)か、或はアタカ山(Djebel d'Ataqa)かを指したものではあまるいか。(マロン師に言はせるとビッテル湖の東へ出てゆき)

(ロ)**紅海の通過點**—次にイスラエル人は紅海の何の邊から渡つたものであらうか。是にはビッテル湖説とスエズ灣説との二つがある。

(1)**ビッテル湖説**—スエズ運河の開鑿に從事せし技師の中には、彼の界隈の地理を研究して次の如き説を立てた。當時ビッテル湖は紅海に連接し、シャルフは嶺ではなく、渡渉場であつた。モイゼはエタンを發して湖の西岸を進み、シャルフを通過して荒野へ入る考であつた。然るにファラオの大軍が突如西南から迫つたので、固より南進することは出來ない。さらばとて東はビッテル湖に、西はゼネフエ山に遮られて居るので、全く進退谷つた。よつて神はビッテル湖中に路を開いて彼等を無事對岸にお渡し下さつたのであると。

(2)**スエズ灣説**—この説は特にウイグルス師の主張する所で、それに由ると、イスラエル人はエタンに達した時、北の方フイリスチンへ到るの路を避けて、方向を南に轉じ、紅海の濱に出た。その間に幾日を費したか、それは不明だが、地理の上から察すると、エタンからスエズに達する迄には、一日以上を要したらうかと思はれる。モイゼはフイハヒロトに一夜を明して對岸に渡り、今日アユン・ム

サ(Ayôun Mouça—モイゼのオアシス)と稱する所に辿りつき、全くエジプト人の手を遁れたいと思つて居たものであらう。隨つて彼等はアタカ山の麓(エルセフオシに相違ないと)に野營して居る所をエジプトの大軍に背後から追擊されたのである。アタカ山は近く海岸に迫つて西と南への通路を阨して居るし東と南には紅海が横つて居るし、北からはファラオの戰車が押寄せた爲め、イスラエル軍は全く囊中の鼠となつた譯で、漸く神の奇蹟によつて急場を免れることが出來たのである。

今イスラエル人の通過した海中の路はと云ふに、二百万からの大衆が一夜の中、卽ち六時間乃至八時間で通過し終つたのだから、さう大した距離でもなかつたであらう。思ふに彼等は灣の西北岸から斜に行進して南東の對岸に到達したものではあるまいか。翌朝エジプト軍はその後を追擊して海中に入り、殘らず溺死したのであるが、然しファラオが軍中にあつたか否か、聖書には明記してないから、何とも確言は出來ない。

この說は如何にも自然にして事實に近い樣に思はれるが、然しそれは紅海が殆ど今日と同じで、スエズ灣とビッテル湖とが相連つて居なかつたとした時にのみ成立するのである。もし紅海の水がビッテル湖まで連つて居たものとするならば、幾らモイゼでもわざ〳〵スエズ灣頭までイスラエル人を案內したはずがない。だから問題はスエズ灣とビッテル湖の連絡如何を確めることさへ出來れば、自ら解決する譯で、古いエジプト文獻の研究によつて光明を灑める曉を俟つより外はないのである。

第二十五章　紅海よりシナイ山まで

(1)旅行の困難—傳說に由ると、紅海を渡つたイスラエル人は先づアユン・ムサ(Ayôun Mouça—モイゼのオアシス)に足を駐めて一息つき、夫れよりモイゼとアアロンを先導に、シナイ山を指して發足した。是から先きはスルの荒野(Sur)と稱し、一帶に足を滑らす礫や、爪先を嚙む岩角の路で、水でも草でもあるにはあるが、二百万からの大衆には不足勝ちである。三日間も歩いてマラ(Marah—苦い泉)と云ふ所に着き、その泉に就て渴を止めようとすれば、苦いも苦い、とても飲まれたものではない。其所の水は今日でもシナイ半島中の最も惡い、しかも苦味を帶びた水だとか。「何を飲むのだ」と民はモイゼに向つて不平を溢した。モイゼがヤウエに叫んで御助を求めると、ヤウエは彼に一本の木をお示しになつたので、それを泉に入れたら、忽ち甘い水となり、一同渴を止めることが出來た。進んでエリム(Elim)に辿りついて見ると、十二の泉が湧き、七十本の棕櫚樹が茂つて、涼しい樹蔭を作つて居る。イスラエル人は泉の傍に天幕を張つて殆ど一ケ月許りも休息した。エリムは今日ガランデルの谷(Ouadi-Garandel)と稱し、マラより僅か二時間ばかりの道程に過ぎない。

(2)鶉とマンナ—エジプトを出た二ケ月目の十五日に、イスラエル人はエリムを起つて、シン(Sin)の荒野に入つた。シンの荒野とは今日のエル・マルカ(El Markha)らしく、こゝは海に沿うた平原で、冬の雨期には灌木や雜草なども生ゐるが年中の大部分は不毛の地だ、食物などあらうはずがない、たゞ原の北端に二個の泉が湧いて居る許り、エジプトから携へ來つた糧食もそろ〳〵盡き果てたので、民はモイゼに喰つてかゝつた。

「あゝエジプトで肉鍋の前に坐り、飽まで甘しいパンを頬張られた頃、主の手によつて死ねばよかつた！何故我々をこの荒野へ連れ出して、大衆を饑死させるのです」

斯う呟くのを聞いても憐深きヤウエは、さしてお咎めにもならず、物柔かにモイゼに曰うた。

「我はイスラエルの民の呟きを耳にした。彼等に言ふがよい、汝等夕に肉を食し、朝にパンに飽き、斯くて我こそ汝等の神なるヤウエたることを覺るであらう」と。

（古のトプジエ畫）

果してその日の夕方、夥しい鶉の群が下りて來て、イスラエル人の野營地を蔽ふと云ふ程であつた。鶉は渡鳥で、春先になると大群をなし、順風を俟つて、アフリカから紅海を渡つて北方に飛去る。風に由らなくては遠く飛べないので、中途の島に下りて憩ふか、そのまゝ海に落ちて死ぬかするより外はないものだとか。この時は西南風に乘つて、スエズ灣の上を渡り、渡り終るや疲れてイスラエル人の天幕の周圍に休憩したもので、幾らでも易々と手捕りにされたのである。

さう云つて了へば奇蹟でも何でもない樣に思はれるが、然し神の思召のまゝ、その御言の下に、しかも二百万の大衆を飽かしめるほど數限りなく飛んで來たのは、どうしても奇蹟としか思はれない。

翌朝になると、砂の上に露が一杯下りて居たが、その消え失せた後に、何だか霜の樣で、白く圓い小なものが落ちて居る。民はそれを見て、マン・フー(Mân hû)と云つて連りに不思議がつて居る。「マン・フー」とは「是は何だらう」と云ふ意味で、夫れからして、その白いものを「マンナ」と稱するやうになつた。モイゼは民に告げた。

マンナと岩清水

「是はヤウエがあなた等に下さつた食物です。皆出て今日の入用だけを拾ひなさい。明日まで貯へ置くには及びません」と。

モイゼの言に信用を置かず、慾ばつて明日の分まで貯へて置いたものもあつたが、翌朝になつて見ると、皆腐つて蟲が湧いて居た。然し野に取殘したマンナはそんなに腐らないで、旭日がさし昇るにつれ溶けて流れるのであつた。たゞ安息日だけはマンナが降らないから前日、二日分を拾つて置くのだが、それのみは腐りもせねば、蟲も湧かない。そしてこのマ

ンナは麥粉に蜂蜜を混ぜた樣な、それは〳〵甘しい味を有つて居たもので、イスラエル人はヨルダン河を渉つてカナアンの地に到るまで四十年の間と云ふものは、毎日〳〵之に由つてその生命を繋いだものである。無論この長い年月の間、彼等はたゞマンナばかりを食べて居たのではない。澤山の家畜を引連れて居たのだから、乳、バタ、乾酪、肉等も食用に供したらうし、荒野の住民に就て種々の食物を求めることも出來たらうし（申命記二ノ六、ヨスエ一一一二）、同一地方に長く足を駐める際には、麥も蒔き、野菜も栽培したらうかとも思はれる。民數紀第七章十三節に、彼等が無血祭の供物として麥粉を献げたのを以ても知られよう。

(3)岩清水—イスラエル人はシンの荒野から進んでダフカ(Daphca)、アルス(Alous)を經てラフイヂム(Raphidim)に辿りついた。海岸を遠かつて、内陸へ乘り込んだ譯である。ラフイヂムはセルバル山(Mont Serbal)の北、フエイラン(Ouadi Feirân)の谷がアレヤト(Ouadi Aleyat)の谷に繋がる處であると、古い傳說が殘つて居る。その谷は廣い肥沃なオアシスで、四方には異形な山が峙ち、シナイ山まで僅に一日程を隔てるに過ぎない。

紀元四百年頃には、多くの修道士や基督信者が來り住み、ファラン(Phan)の司教座さへ据ゑられてあつた。然るに回教主のオマル(Omar)がエジプト及びシリアを征服するや、このオアシスも彼等の有に歸し、修道士は逐放され、耕地は荒れ果てゝ住民は四散し、市街も何時しか廢墟に歸し終つたのである。

オアシスには今でも棕櫚樹がよく繁茂して居る。然し飲料水が餘り豐にないので、民衆とその家畜の爲には、それこそ大きな苦痛であつた。彼等は忽ち不平を鳴して、

「水を與へて飲まして下さい。何故エジプトから連れ出して、我々も子供も家畜も渴死させるのです？」

とモイゼに迫つた。モイゼは神に訴へた。

「私はこの民に何をしたら可いでせう。彼等は今にも石を投付けんばかりです」

「汝民の前に進み、彼等の中から長老等を伴ひ、例の杖を取つて岩を擊て、然せばそれから水が出る。民はそれを飲むが可い」

と神のお答があつた。モイゼは仰のまゝに杖を擧げて岩を擊つた。すると忽ち甘い清水がさら〳〵と流れ出て、民も家畜も渴いた咽を潤し、生返つた樣な心持になつた。

(4)アマレク人の襲擊—是までイスラエル人は敵の影にすら行遇はないで、無事荒野を旅行することが出來たが、ラフイヂムに於て突然アマレク人の襲擊を蒙り、その平和を脅かされた。アマレク人とはシナイ半島に放浪せる頗る慓悍な遊牧民で、常には半島の北部に住んで居るのだけれ共、牧草の繁茂する頃になると、よくそれを搜ねて南下するのであつた。彼等はイスラエルの大衆がエジプトから北上し來たのを見て、自分等の國を奪はれてはと氣遣ひ、擊つて之を追拂はうとしたものらしい。

モイゼはエフライム族のヨズエ(Josue)に命じ、壯丁を精選いて防ぎ戰はしめ、自分はアアロンと姉聖のフル(Hur)を從へて山上に登り、兩手を擧げてヤウエの援助を祈つた。モイゼが手を擧げて居る間はイスラエル人が勝目になり、疲れて手を下すと、アマレク人が盛り返して來る。よつてアアロンとフルは、日の暮れるまでモイゼの手を双方から支へて祈り續けさせたので、アマレク方は終に敗れて引返した。

彼等は主の民を追つ拂はうとした爲に、ヤウエの詛を蒙り、殘滅の宣告を受けた。後年サウル王がヤウエの仰を畏まり、彼等を滅し盡したのはその宣告を實行した譯であつたのである。

(5)エトロの訪問—主がイスラエルの爲に行ひ給うた奇蹟の噂は何時しかシナイ半島の到る處に、分けてもマデイアン人の間に響き渡つた。モイゼの舅エトロはそれを聞いて大に喜び、モイゼの妻のセフォラとその二子を携へて、ラフイデイムにモイゼを訪れた。

モイゼは喜んでエトロを迎へ、共に天幕に入つてヤウエがフアラオとエジプト人になし給うたこと、途中の諸〻の困難と、その困難より自分等をお救ひ下さつたこと等を物語ると、エトロは心から祝賀を述べ、ヤウエにも燔祭を献げて深い〳〵尊敬を表した。

エトロはその翌日モイゼが坐して民の訴へを聽き、朝から夕に及べるのを見て、是では終に性も根も盡き果てると思ひ、モイゼに注意する所があつた。よつてモイゼはその言に從ひ、民の中から賢くて神を畏れ、眞實を重ずる長老七十人を選び、小な訴は之に托せ、自分はたゞ大きな事件だけを判くことにした。エトロはやがてモイゼの許を辭して歸途に就いた。

教訓—マンナは聖體の象である。我等もイスラエル人の如く約束の地たる天國へ歸るべくこの世の荒野を渡つて居るのだが、日々の糧としてはマンナよりも限りなく優れた主の聖體を與へられて居る。この聖體の拜領を怠りさへしなければ、途中で饑ゑ疲れて斃れる樣な氣遣はあるまい。

參考　シナイ半島

(イ)—スエズ灣とアカバ灣との間に挾まれて半島の形をなして居るのを、ペトラ(Petra—岩石)と云ふ町に因みて「岩石アラビア」とも云へば、その南端にそゝり立てる山岳の名によつて、シナイ半島とも稱する。この山岳より二の山脈が岐れ出で、一つはスエズ灣に並んで北西に走り、一つはアカバ灣に沿つて東北に連つて居る。兩山脈の間には廣い臺地が横り、西をスルの荒野(Desert de Sur)と云ひ、東をフアランの荒野(Desert de Pharan)、今はテイの荒野(Desert de Tih)と稱する。

半島の地質は之を三つに分けることが出來る。北の方テイは石灰質の臺地で、雨が少く、偶に驟雨がないでもないが、雨水は多く裂罅を傳うて深く地中に沒入するが故に、草木を見ること稀である。東から西にかけては砂岩質で丘陵は多く高低起伏し、裂罅も比較的少く、水量は割合に多く、各所に清泉を湧かして居るので、旅行も困難でなく、草木が盛に繁茂せる谷間さへあつて、遊牧民の放浪

シナイ山の實景

生活も不可能でない。猶この地方には多く礦物を產し、エジプト人は古くからその探掘に從事したものである。

南部は花崗岩の山岳地で、定住に必要な條件を具備して居る。冬期、高山の頂に積んだ雪は徐々に溶け、山麓地方を潤してオアシスを作り、盛に熱帶植物を繁茂さして居る。フェイラン(Feiran)の溪谷の如きはその最大なものである。

要するにティの臺地の如く、水も植物もない地方は、商隊が急いで踏破すべき通路にしかならない。砂岩及び礦山地方は、外國の勞働者、及び遊牧の民が一時停留するに過ぎない、定住民を見るのは、たゞ花崗岩の山岳地のみである。

(ロ)氣候と住民—荒野の特色ども云ふべきは降雨の不規則なことで、その雨は極て短時間に、狹い範圍内に限つて、しかも多量に降るが常である。一般に云ふと十二月から三月まで、年中に二十日許りしか降雨はない。鳴る、光る、降ると云ふ樣に、それは〳〵凄じい音を立てゝ雨脚が馳ると、瀧なす水は山の傾斜面を流れ降り、一瀉千里の勢で以て奔注する。然し嵐が過ぎ去ると、流は急に細まり、翌朝はもう僅に絲の如き一筋の流を見るばかりで、夫れすら間もなく砂の中に吸ひ込まれて了ふ。

然しこの降雨のお蔭で谷底や平原や時としては山腹にも青い物を見ることが出來る樣になる。でも三月以後になつて、太陽がかん〳〵と照り付け、殊にカムシン(Khamsin)と稱する熱風が吹いて來ると、水分は忽ち蒸發し、草木は枯死して了ふが、それでも家畜の飼料には使用される。空には殆ど雲を見ない、空氣は乾燥清朗で、光線は眩しい。温度は夜と晝とによつて三十度からの差を生ずることがある。高い所では晝と雖も暑は耐え易いが、平原や谷間では夫れこそ酷烈である。夜間は露が多い。

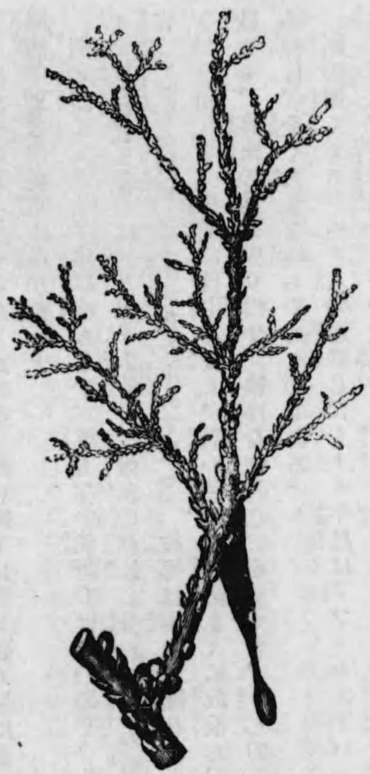
斯の如くシナイ半島は水もない、草もない荒野ではないので、今日ここに放浪せる遊牧の民ベドウイン族(Bédouin)は大凡五千人許り、幾多の種族に分れ、水草を追つて各地に轉々し、牧畜の外にも旅客に駱駝を賃貸して生活費を求めて居る。彼等は固より簡朴にして、粗衣粗食に甘じ、奢侈の何たるかを知らず、極度に自由を愛し、廣い荒野を心のまゝに放浪して居る。定住生活の拘束を受くるを欲せず、將來の爲を慮り得ず、秩序を守ることを知らず、少しのことにも直ぐ喧嘩をおつ始めると云ふ樣に、全く大きな坊ちやんなのである。

斯の如くイスラエル人の通過したシナイ半島はアフリカのサハラ見た樣に青い物一つない砂漠ではない。たゞ耕作地がなかつた迄で、芻も十分にあれば、飲料水も可なりあつた。然し何分二百万からの大衆ではあるし、家畜も夥しい數に上つて居たのだから、時としては水や草の缺乏を來し、困窮に陷ることもあり、その都度彼等は神とモイゼに向つて呟き、色々と不平の百万遍を並べるのであつた。だがシナイ山に辿りつく迄は神もならぬ堪忍をして、一々彼等の要求に應じ給ひ、以て彼等と親密な關係を結び、彼等に厚い信頼と深い從順とを抱かせようと務め給ふのであつた。

(ハ)マンナ—シナイ半島には今でもマンナと云ふものを產する。それは一種の蜜の味を持つたゴムの

類で、檉柳科(Tamaris)のタルファ(Tarfa)と云ふ灌木から滲み出るのである。このゴムは極く古い時代から人に知られ、半島の住民は之を商品としてエジプトに輸出したものである。反對者はこのタマリスのゴムを以てマンナと同一視して、奇蹟を否定せんと務めるのであるが、聖書の記事より歴史的性質を全然抹殺し去らない限り、到底そんな解説は承認されないのである。

(1)—二百万人からのイスラエル人は、四十年の間もマンナを常食としたものであるが、タマリスのマンナはたゞ六月と七月に、それも雨の多い年に限つて產する。全半島のを悉く一つに集めても、年額僅に七百斤位に過ぎない。



タマリスよりの滴るる

(2)—タマリスのマンナは日中に當つて地に流れ落ち、何ケ月でも、否何ケ年でも保存が出來る。聖書のマンナは夜中露と共に降り、日が昇ると融けて了ふ。翌日まで保存しようとしても、腐つて蟲が湧く。たゞ金曜日のだけが翌安息日まで保存されるのであつた。

(3)—聖書のマンナは臼に入れて搗き碎くほど硬いもので、食物となるだけの養分を充分に含んで居たのだが、タマリスのマンナは糖蜜の樣なもので、甘くはあるが、窒素を含んで居ないから、養分にならぬ、下劑にしか使はれない。アラビア人は蜜の樣に之をパンに塗つて食して居る。

第二十六章　律法と契約

(1)律法の發布に先ちて—イスラエル人はエジプトを出てから三ヶ月目にシナイ山の麓に達した。ラフイディムの谷からシナイ山までは僅か一日程に過ぎない、多分北側のシエイク谷(Ouadi esch-Scheikh)から進んで、シナイ山麓で最も廣いラハ谷(Ouadi er-Rahab)に天幕を張つたらうかと思はれる。

さて神はモイゼを呼んで山に登らせ、民に斯う曰はしめ給うた。

「我がエジプトで爲したことを汝等は知つて居るだらう。もし汝等が我聲を聽き、我約束を守らば、我も汝等を世界のすべての民に超ゑて特に我寶となし、我が爲には司祭の國、聖なる民ともいたすであらうが、汝等の意中は何うだ」

司祭の國とは、神がイスラエルの人を己が選民となし、特に寵愛を加へると云ふことを形容したものであつた。エジプトでは國王に次いで最も高い地位に立ち、最も厚く人民に尊敬されて居るのは司祭—神官—で、夫れを目擊して居たイスラエル人の耳には、「司祭にしてやる」と言はれたばかりでも、非常に有難い恩惠と響くのであつた。モイゼは山を下つて、神の聖旨を民に傳へた。民は異口同音に、

「仰の如く致します」

と答へた。よつてモイゼは今一度山に登つて民の答を神に傳達ぎ、その仰によつて再び山を下り、麓に柵を設けた。

「是から内へは一歩も踏み入つてはならぬ、山に觸れたものは人でも畜類でも命がないぞ。みな其身を潔め、衣服を洗ひ、三日の間準備をなし、喇叭の音が聞こた時、はじめて山に登るのだ」

と言ひ渡した。是は神の尊い律法を授かるのであるから、心を清くせよ、己が罪を認めよ、無上の立法者から見ると、我身は限りなき隔があることを知れ、と諭すが爲の注意であつた。

(2)十誡の發布—三日目になると、俄に雷が轟き、電光が閃き、叢雲は深く山を立てこめ、喇叭の音さへ烈しく鳴りどよめいた。モイゼは恐れて天幕の中に小くなつて居る民を引出して山の麓に近いた。今こそヤウエが山にお降りになつたので、山は盛に煙を吐き、焔を擧げ、喇叭の音はいよ〳〵高く遠く山に響き谷を流れ、その凄じさと云つたらない。その時、ヤウエは山の上から嚴な聲を放つて、十の誡をお授けになつた。

「我は汝の主なるヤウエにて、汝をエジプトの地、奴隷の家より救ひ出し〻者なり。

1—汝、我が面前に於て我の外何物をも神とすべからず。汝己が爲に像を刻むこと勿れ。又すべて上は天に在るもの、下は地に在るもの、ならびに地の下、水の中に在るもの〻形を作り、之を拜み、之に事ふることなかれ。我は汝の神なるヤウエにて、妬む神なれば、我を憎む者に對しては、父の罪を子に報いて三四代に及ぼし、我を愛し、我誡を守る者には、慈悲を施して千代に至るなり。

2—汝の神ヤウエの名を妄りに呼ぶなかれ。ヤウエは己が名を妄りに呼ぶ者を罰せでは置かざるべし。

3—汝、安息日を記憶して之を聖とすべし、六日の間働きて汝の一切の業をなすべし、七日目は汝の神なるヤウエの安息日なれば、汝、及び汝の子女、汝の僕婢、汝の家畜、並に汝の門内に居る外國人も何の業をも爲すべからず。そはヤウエ六日の間に天と地と海と其等の中に在る一切のものを作り、七日目に安息し給ひたればなり。是によつて、ヤウエ安息日を祝して之を聖となし給ふ。

4—汝の父母を敬へ、こは汝の神なるヤウエの汝に賜ふべき地に於て、汝の生命の長からん爲なり。

5—汝殺す勿れ。

6—汝姦淫する勿れ。

7—汝盜む勿れ。

8—汝隣人にたいして僞證する勿れ。

9—と10—汝隣人の家を貪る勿れ。又汝の隣人の妻、及びその僕婢、牛、驢馬、ならびに總て汝の隣人の所有を貪る勿れ。」

是が出エジプト記に出て居る十誡の本文であるが、モイゼの晩年の作たる申命記には、第九と第十を、

「汝隣人の妻を貪る勿れ、又隣人の家、田野、僕婢、牛、驢馬、並にすべて隣人の所有を貪る勿れ」としてある。

カトリック教會では、聖アウグスチヌスの分類に從ひ、「隣人の妻を貪る勿れ」を第九誡とし、「隣人の所有を貪る勿れ」を第十誡として居るが、正教會や、プロテスタント諸教會では、ユデア人フィロンの分類に從ひ、「眞の神を禮拜すべし」を第一誡、「偶像を刻むべからず」を第二誡とし、第九と第十を合せて第十誡として居る。何れにしても内容は全く同一である。

この十誡こそ、人が神に對し、己に對し、人に對して盡すべき義務、履行ふべき德行をば悉く簡單な辭句の中に網羅したもので、如何なる賢人、學者、立法家と雖も、思ひ及ばざる完全無缺な大法典である。その第一誡には唯一無二のヤウエを神と認むべしと命じてある。偶像崇拜を堅く禁じ、イスラエル民族をして他に比類なき一神教の民となし、あらゆる民族の上に高く超越せしめるに至つたのは、實にこの第一誡あるがためで、他の誡は皆是から導出されたものに過ぎない。即ち第二誡は、神の御名を妄りに呼んで之を汚さない樣、第三誡は一週に一日を安息日と定め、世事を抛つて專ら神に奉仕する樣にと命じてある。神に次で敬事すべきは父母で、第四誡には、「汝父母を敬ふべし」となつて居る。第五誡から第八誡までは、人の生命、貞操、財產、名譽を尊重し、之に危害を加へることを禁じ、第九誡と第十誡はあらゆる罪惡の根源たる情慾、その情慾の中で最も强烈な物慾と色慾とを取締つたものである。この最後の二誡は直に人の肺肝に臨み、その潛みに潛める內心の衝動にまで監視を付し、惡に流れんとする我等の面前に神聖なる鐵條網を張つた樣なものではあるまいか。

(3)契約の締結—イスラエル民は今まで耳にしたことなきヤウエの御聲を聞き、山上の煙、喇叭の音、雷鳴、電光の凄じさに怖れ戰いて、モイゼに向ひ、

「貴方がお話して下さい。謹んで承りますから。神樣はお話して下さらない樣、恐らく私等は死んで了ひます」

と願つた。モイゼは彼等の心を引立て、

「恐れるには及ばぬ、神樣の臨み給うたのは汝等を試み、その畏を汝等の前に置いて、罪を犯させない爲だから」

と云つた。是に於て民は遠方に立ち、モイゼは神の在す叢雲の中へ進み入り、十誡の註釋とも云ふべき律法を細々と承つて夫れを民に傳へると、民は口を揃へて、

「ヤウエの宣ひし言は皆之を行ひます」

と答へた。然し彼等の心を十分堅め置く必要があるので、モイゼはヤウエの言を悉く書きしるし、朝早く起きて山の麓に祭壇を築き、イスラエルの十二族に從つて十二の石を標に立て、民の中から青年を選んで、ヤウエに燔祭を献げしめ、又謝恩の爲の犧牲として、犢を供へしめた。犧牲の血は半を鉢に入

れて置き、半は祭壇に濺いだ。次に契約の書を取りて民に讀み聽かせるこ、民は再び口を揃へて、

「ヤウエの宣ひし言は皆之を行ひます」

こ答へた。よつてその契約を固めるしるしとして、モイゼは鉢に遺して置いた血を民に濺ぎかけて、

「是れヤウエがその諸くの言につき、汝等こ結び給へる契約の血であるぞ」

こ云つた。夫れからモイゼはアアロン、その二子ナダブ(Nadab)こアビウ(Abiu)、及び七十人の長老を伴ひ、山に登つて神を見た。

神を見た者は死ぬ、こ昔から云ひ傳へたものであるが、彼等は神を見ても死なゝいで、平和の犧牲の餘りを飲食した。燔祭は犧牲の肉を寸斷し、殘らず燒いて獻ける祭で、神に絶對忠節を表し、神に獻けた餘りの肉を會食する平和の犧牲は、共に結べる親愛の永久渝らざるべき象徴であつた。祭壇に血を濺いだのは、民の罪を清める爲、民の上に之を振りかけたのは、神こ結んだ契約を固める爲で、「契約の血」こ呼ばれるのであつた。

(4)金の犢—モイゼは再びヤウエの仰を蒙り、アアロンこフルに留守を賴み、ヨズエを伴つて山に登つた。ヤウエの光榮シナイ山の上に留り、叢雲山を蔽ふこと六日、七日目にヤウエが雲の中よりモイゼを召し給うたので、モイゼは御召に應じて雲の中に入り、山に登つて四十日四十夜其處に止り、聖幕屋、契約の櫃、諸種の祭式、祝祭日等に關する細々な指導を承り、終には十誡を刻んだ二枚の石板をも授

モイゼ十誡を授かる

かつた。民はモイゼが日を經ても一向降つて來ないのを見て、

「モイゼは如何なつたか分らぬ。私等を案内してくれる神樣をお造り下さい」

こアアロンに强請んだ。アアロンはモイゼの代理者だ、民の不心得を諭して、今し方神こ結んだ契約を思ひ出させねばならぬのであるのに、氣の弱い彼はそれだけの勇氣がない。或は民の請求が猛烈で、拒絶したら謀叛でも起さんばかりの氣勢を見せたのかも知れない。よつて妻や子供の耳環を外して持つて來る樣に命じた。婦女子の大切にして居る裝飾品であるから、それを惜んで思ひ止つてはくれまいかこ、賴にもならぬこを賴にしたものであらう。然し案に相違して、民は我も我も

と耳環を外して持ち寄つた。今はもう致方がない。アアロンはその耳環を熔して鑄型に流し込み、金の犢を作つて民の前に立てた。急いで粗末な像を作つたら、或は民も望を失ひ、之を禮拜しようと云ふ氣も失せ果てはしまいかと思つたのかも知らぬが、その期待も全然裏切られた。彼等はその犢を見るや、

「イスラエルよ、是こそ我々をエジプトから導き出した神様じや」

（牛神）スピア

と叫んだ。無論彼等はヤウエを棄て、他の神を禮拜しようとしたのではない。たゞエジプトに住んで居る間に偶像を見慣れて居たし、殊にエジプトでは、オシリス（Osiris）神のシンボル（象徴）たるアピス（Apis）、即ち神牛の像を見慣れて居たのだから、無形の神では何だか物足りない心持ちがして、ヤウエを肉眼に觸れ易い形象に作つて禮拜しようとしたのである。アアロンも今や爲すべき所を知らず、金の犢の前に祭壇を築き、「明日はヤウエのお祭じや」と觸れ知らした。

斯くてアアロンは民をヤウエの信仰に繫ぎ留め、純然たる偶像崇拜に陷らせまいとしたのである。

民は早朝から大勢集つて來て、犧牲を献げ、それから飲んだり、食つたり、踊つたり、ちやうどエジプト人が偶像の前でする樣な空騷ぎを遣り出した。それをヤウエは御覽になつて、モイゼに曰うた。

「急いで降れ、汝がエジプトから導き出した民は罪を犯した。早くも汝の示せし道に遠かり、牛を鑄て拜み、之に犧牲を献げて、イスラエルよ、是こそ汝をエジプトの地より導出し給うた神樣じや、と言つて居る。この民は頑な頭の持主と見ゐる。我に許せ、彼等に向つて怒を發し之を滅さしめよ、そして汝を大なる民となすであらう」と、

モイゼは嘆願した。

「主よ、折角大なる力と强き手とを以てエジプトから導き出し給うた民に向つて、お怒を發し給ふのですか。それでは、山の中で殺し、地の面より滅し盡すが爲め、欺いて連れ出したのだ、とエジプト人が言ふでありませう。何とぞ御怒を鎭め、民の罪をお赦し下さい。主の僕アブラハム、イザアク、ヤコブを思ひ出し、彼等に約束して、天の星の如く汝等の子孫を增し、この土地を悉く汝等の子孫に與へ、永く之を保たしめると、お誓ひになつた事を思出して下さいませ」と。

神は終にモイゼの祈禱を聽き、直ぐ禍を下すことだけは思ひ直し給うた。是に於てモイゼは律法を裏表に書きつけた二枚の石の板を携へて山を下つた。從者のヨズエは民の呼はる聲を聞いてモイゼに向ひ

「戰の聲がします」

と言つた。

「是は勝鬪の聲でない、敗北の叫び聲でもない、私には歌の聲と聞ゐる」

とモイゼは答へた。野營地に近づくと、果して犢を祭り、ワイ〳〵と囃し立て、踊りつ舞ひつして居る

極めて溫和なモイゼも之を見て忽ち嚇こなり、十誡の石板は岩に叩きつけて木端微塵に打碎き、ヤウエと結んだ契約もこの罪の爲に破られ終つたことを見せた。それから金の犢を引たくつて火の中に投げ込み、叩いて粉末となし、山から流下る小川の水に打撒いて民に飲ました。人に飲まれる樣なものだ、神と崇めるに足るかと云ふ實物教示をしたのである。

次に嚴しくアアロンの罪を責め、天幕の入口に立つて「ヤウエに屬したいと思ふ者は我に來れ」と大聲に叫ぶや、レウイ族が聲に應じて、モイゼの傍に集つて來た。

「劍を拔き、天幕の間を巡り、偶像を禮拜んで居る者が見當つたら、兄弟であらうと、朋友であらうと、容赦なく斬り棄てよ」

と、モイゼは彼等に命じた。この日レウイ族の爲に殺されたものは三千人に及んだ。翌日モイゼは民の罪を責めた上で、「何とかして赦を請ひ受けることが出來まいか、ヤウエの前へ行つて嘆願して見よう」と彼等に約束した。やがて主の御前へ立戻つて、

「この民は大きな罪を犯し、金の神を作りました。然し何うぞ彼等の罪をお赦し下さい、さもなくば、お書きになつた書の中より私の名をお抹し下さい」

と嘆願した。弘い海の如き大度を見せ、己を忘れて民の救命を懇願したのである。然し今度の罪は餘りに甚しかつたので、神もさう易々とお赦しにならない。

「罪あるものだけを我書より抹し去るであらう……汝は往つて、汝もエジプトから導き出した汝の民も、我がアブラハム、イザアク、ヤコブに誓ひ、之を汝の子孫に與ふべし、と言つた地へ此處から上つて行くが可い。天使を遣して汝の先驅たらしめ、カナアン族、アモレ族、ヘテ族、フエレゼ族、ヘウイ族、エブス族を逐拂ひ、乳と蜜の流れる地へ彼等を入らしめるであらう。然し我は汝と共に上るまい。汝は項の頑な民であるから、途中で復重ねて罪を犯すのを見たら、恐らく怒つて打滅す樣になるかも知れないから」

民はこの面白からぬ告を聞いて大に悲み、一人も身飾をするものがない、この時からイスラエル人は痛悔の印に飾を着けなかつた。もうヤエウとイスラエルとは關係の綱が斷れて了つた、彼等の汚れた野營地に在つて、ヤウエと親しく物語る譯には行かないので、モイゼは己が天幕を遙にイスラエルの營外に移した。すると雲の柱が降つて天幕の入口に立ち、人がその友と物語る如く、神はモイゼと面を合せて親しくお話しになつた。よつてモイゼはヤウエに申上げた。

「主はこの民を導き上れと私に宣うたけれども、誰を私と共に遣し給ふかをお知らせして下さいません……もし私が御目の前に惠を得ましたらば、願はくは主の御面を（ヘブライ文には主の道とあり）私に示して、主を知らしめ、主の御目の前に惠を得せしめ、又主の民たるこの群衆を顧み給へ」

「我れ自ら汝の先導となり、汝をして安泰ならしめるであらう」

「主自ら先導して下さらずば、我等を此處から上らしめないで下さい。もし主が我等と共に往き給ひ、地上の諸〻の民と異るものにならなくては、何を以て私と主の民とが、御目の前に惠を得ることが出來ませう」

「汝の言つたこの事を爲すであらう、汝は我目の前に惠を得たものであるし、我も汝の名を以て、汝を知つて居るしするのだから」

「然らばどうぞ御光榮を私にお示し下さい」—（御本體を直接に拜せしめ給への意）

「すべての善を汝に示し、ヤウエの名を汝の前に宣べ、惠みたい者を惠み、憐みたい者を憐むであらう……然し我顏を見ることは出來まい、我を見て生きる人はないのだから……我傍に一の處がある、汝は岩の上に立つて居るのだ。我光榮が其處を通る時、我汝を岩の穴に入れ、通り過ぐるまで汝を蔽うて置く、我手を除く時、汝我が背後を見るであらう、我面は見ることが出來まい」

(5)モイゼ再び山に登る—夫からモイゼはヤウエの仰を畏つて二枚の石板を造り、夜中に起きて、シナイ山に登つた。ヤウエは雲に包まれてお降りになり、モイゼは岩の穴に立つた。ヤウエは彼の前を通りながら、

「ヤウエ、ヤウエ、哀憐あり、情あり、忍耐にして、惠の大なる、そして眞實なる神、惠を千代にまで施し、不義と科と罪とを除く者、その前には誰とて罪なきものなく、父の罪を子に孫に酬い、三代にも四代にも及ぶものなり」

と曰うた。モイゼは地に平伏して禮拜した。もう民の罪はたしかに赦されたと分つたけれども、なほ今一度くりかへして嘆願した。

「主よ、もし御目の前に惠を得たらば、願はくは我等と共にお進み下さいまして、我等の惡と罪とを赦し、我等を主の所有となし給へ」

ヤウエはモイゼの請を許し、重ねて律法を口述して、之を一々書き取らせ、その命のまゝに、モイゼは山に居ること四十日四十夜、飲まず喰はずに神と物語り、二枚の石板には再び十誡を刻んで戴いて山を降つた。所で長く神に近いて居た爲に顏は異樣な光を放ち、眩きまでに輝いて居るものだから、民はその顏を仰視ることが出來ない。よつてモイゼは布を以て顏を覆うた上で、ヤウエの御命令を傳へた。それからも神の仰を承る時は面帕を外し、民にそれを傳へる時は再び顏を覆ふと云ふ樣にした。

敎訓—我等の靈魂も丁度この石板の如きもので、洗禮を授かつた時、成聖の聖寵と共に主の俤を之に刻み付けて戴いたのである。罪を犯してその石板を打碎いても、誠意から痛悔してその罪をありのまゝに告白しさへしたら、打碎いた石板は修繕を加へられる樣な譯で、きつと神は赦を與へ、再びその俤を刻みつけて下さる。然しモイゼが初回には石板までも神に拵へて戴いたのに、二回目には自分でそれを造らなければならなかつた如く、我等も一應聖寵を失ひ、靈魂を壞してからは、それを元々通りにし

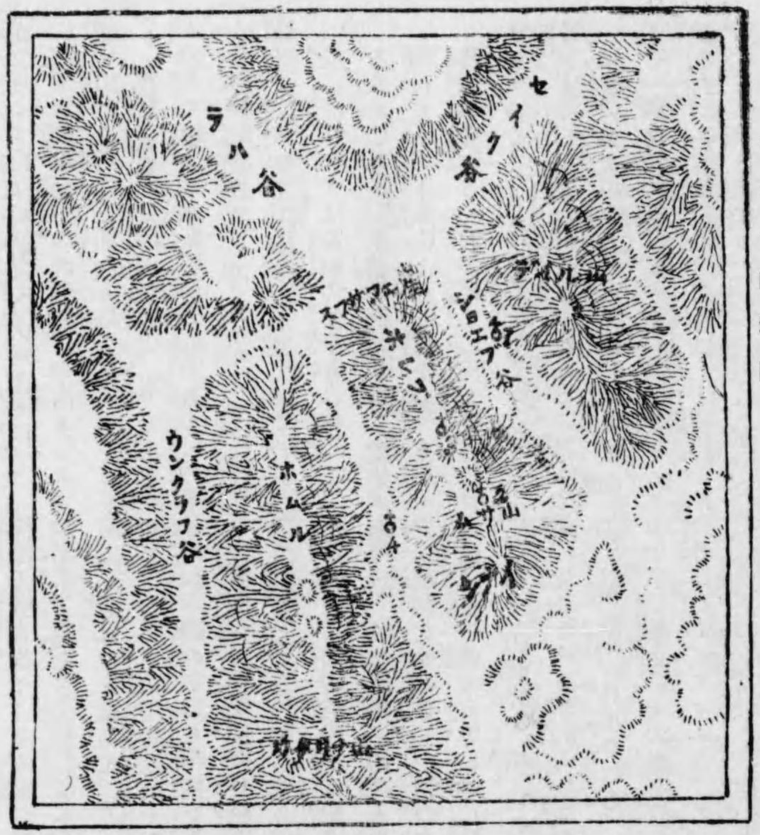
て戴くには、自ら骨を折つて働かねばならぬことを忘れてはならぬ。

參考　シナイ山に就て

(一)シナイ山—はレドシャ谷(Ouadi el Ledscha)ソショエブ谷(Ouadi esch-Schoeb、或は ed—Deir)ミに隔てられた三の平行せる山岳より成り、東北の山をディル山(Djeber ed Deir)ソ云ひ、その麓に聖カタリナ修道院がある。南の山をホムル山(Djebel el Homr)、或はカタリナ山(Djeber Katherin)ソ云ひ、中央のをホレブ山、又はシナイ山ミ呼び、今日ではモイゼ山(Djeber Mouça)ソ稱して居る。長さ二千メートルに幅一千メートル許りの細長い山岳で、高さは海拔六千五百尺、附近の谷を拔くこと一千五百尺、頂上には多くの峻峰や黑花崗石の圓頂がそゝり立ち、しかも南北の兩端に聳ゑて居るのが最も高い。南端は一峰で高さ七千三百六十三尺、全山ミ同じくモイゼ山(Djeler Mouça ミ呼ばれて居る。北西端のは三四個の懸崖より成り、その中の一番高い海拔六千九百三十七尺からあるスフサフエ(Sufsafeh)の名を以て呼ばれて居る。イスラエル人が天幕を張つて野營したのは、多分この山の北に開いて居る谷々、主としてラハ谷(Ouadier Rahah)であつたらうかミ思はれる。この谷は三百ヘクタール(三万メートル平方)の面積を有し、二百万の大衆を收容しても綽々として餘裕があつたであらう。

律法を發布されたのは南端のモイゼ山だミ云ふ傳說もあるが、然し地形上から察するミ、寧ろ北のスフサフエ峰ではなかつたらうか。民衆の野營地たるラハ谷からモイゼ山は全く見ゑない。却つてスフサフエ峰だミ、平野の端に突如ミして六百メートルも高く聳ゑて居るので、何處からでもよく見ゑる。左右の各峰から全く孤立せる上に、その岩壁は殆んど削り立た樣になつて居るので、麓に柵を繞すことも容易に出來た。水や牧草はモイゼ山の附近に乏しからぬので、民も安心して長く此處に滯在し得たのである。モイゼが金の犢を粉末にして投入れたミ云ふ川はシエイク谷を流れて居る小川であつたに違ひない。

然らば南端のモイゼ山は全く意味をなさぬ空名であるかミ云ふに、必ずしも然うでない。神が燃ゑる藪の中よりモイゼに顯れて、イスラエル民の救濟を命し給



1 聖カタリナ修院. 2 エリア小聖堂. 3 聖母小聖堂. 4 四十殉教者修院.

うたホレブ山は、多分このモイゼ山で、律法の發布後モイゼが登つて神と會見し、聖幕屋の製造等に關する仰を承つたのもこの山らしく、この山の舊名をモネイジャ（Moneidjah—la conférence—商議の山）と稱する所から以て見ても、さうらしく思はれてならぬ。

（2）契約の意義—舊約が新約の象であるが如く、シナイ山で結ばれた契約も、後でイエズス・キリストの立て給ふべき新契約の影であつた。兩者何れを固めるにも犧牲が献げられた。舊約には獸が献げられ、新約にはイエズス・キリストが躬自ら十字架壇上に献げられ給うた。してこの兩犧牲の間には前表と本物との關係が立派に成立して居る。聖パウロは曰つた。

「故にキリストは新約の仲介者に在して、死を凌ぎて前の約の下に犯されたる過を贖ひ、召された る人々に永遠の世嗣の約束を得させ給ふなり……されば第一の約も血なくして立てられしには非ず、蓋しモイゼ律法によれる掟を悉く民一同に讀聞かせし後……犢の血と牡山羊の血と水とを取り、律法の卷物と一般の民とに沃ぎて言ひけるは、是ぞ神の汝等に命じ給へる約の血なると」（ヘブライ九一五以下）

イエズス・キリストも新契約を立て給ふに當つて、この關係を明にし、モイゼの言を殆どそのまゝ引用して、「是れ罪を赦されんとて衆人の爲に流さるべき新約の我血なり」（マテオ二六—二八）と宣うた。

犧牲の血を用ゐると云ふ點に就ても同じ樣な類似點が見出される。モイゼはその一部を祭壇に沃ぎ、一部を民の上に振りまいた。イエズスも十字架壇上にその血を流し、併せてそれを全人類に濺ぎ給うた。「汝等の近きたるは……新約の仲介者に在すイエズスと、アベルの血に優りて能く言ふ血の沃がるゝ事と是なり」（ヘブライ一二—二四）と聖パウロが言つたのを以ても明である。

（3）—律法の發布が雷鳴や電光や火焔や黑雲や等、凄じい現象の中に行はれたのは、神の光榮とその威嚴とを示すが爲、十誡を發布する聲は正しく神の御聲である、モイゼの傳へた律法は疑もなく神の律法に外ならぬことを證據する爲であつた。なほ神はイスラエルの民に十分恐怖を抱かせ、嚴に律法を守ると云ふ氣にならしめんと欲し、その爲に違背者の上に加へらるべき嚴罰の象徴として火焔を顯し給うた。「汝等の神ヤウエは燒き盡す火、妬む神なり」（申命記四—二四）とモイゼも言つて居る。是こそ舊約と新約と、恐怖の法と聖寵の法と、懼れと愛との差違を最も著しく見せたものではないだらうか。

第二十七章　モイゼの律法

（1）—モイゼの律法の根本思想は神が自ら最高立法者となり、特に自ら聖ならしむべく選み給ひしイスラエル民族の審判者とも、君主ともなつて之を統治すると云ふ「神政々治—Theocratia」であつた。隨つてすべての法律規則は直接に神の聖意より發するので、イスラエルでは普通の祭政一致以上に政治と宗教とが全く混一し、教會の誡命はまた政府の規定であり、政府の規定はまた教會の誡命であつた。要するにすべての律法は神の律法で、之をモイゼの律法と稱するのは、モイゼが神の手足となり、その律法を民に傳へ、之を遵奉せしむべく働いたからである。

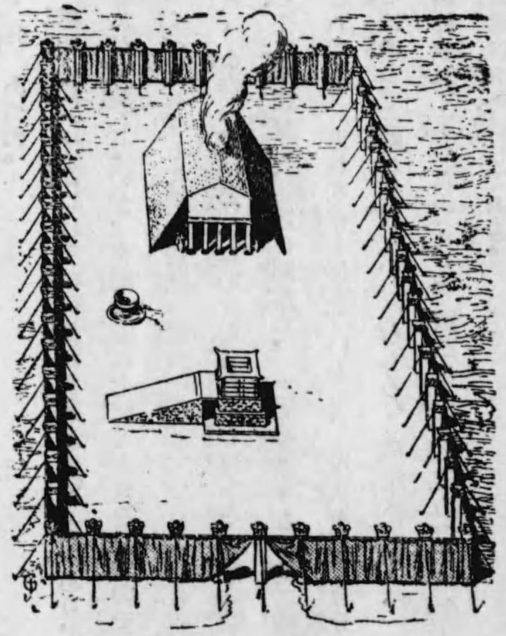
さて律法の根底をなすものは十誡で、それこそ人間のあらゆる宗教的、道德的義務の大體を短く箇條書きにした、極めて重要なる誡であるから、神は自ら之を二枚の石板に刻みつけ、後ではその石板を契約の櫃の中に藏めしめ給うた。他の律法は十誡の發布後、荒野を旅行する間に、機に應じ、折に觸れて制定されたもので、モイゼの五書には、制定の年月順に記入してある。決して系統的に集めてあるのではない。是等の律法は、十誡の解說、衍義とも謂つた樣なもの、之を道德律、儀禮、民法の三つに區別することが出來る。

道德律は十誡と密接な關係があり、神と他人と自己とにたいする義務を明確にしたもので、つまり自然法に屬する規定なのである。儀禮は神の禮拜、殊に公式の禮拜、聖所、敎役者、聖務、祝祭日に關して些細な點までも一々規定したもので、民法にはイスラエル人相互の權利、義務を限定してある。

（一）聖所

（1）―モイゼは民と契約を固めてから、獨りシナイ山に登り、四十日の間、神と物語り、聖所に關する詳密な規定を授かり、幻影の中にその雛型をも見せて戴いた。材料は民に獻上させることになつたのだが、皆喜んで獻上し、中止を命ぜねばならぬほど先を爭つて獻上した。腕に多少の覺えあるものは總出で之が製作に手傳つた。棟梁と選まれたベセレエル（Beceleel）とオオリアブ（Ooliab）の兩人は特別の智慧と器用さとを神に授けられた。

當時イスラエル人は流浪生活を送つて居たので、聖所も容易に持運びの出來る天幕であつた。聖アウグスチヌスは之を「遊動神殿―Templum Ambulatorium」と呼び、聖幕屋とその庭より成つて居たのである。



（2）―聖幕屋は長さ三十肘、高さ十肘、幅十肘で、金を着せた四十八枚の合歡木の板を互に繼ぎ合せて、之を銀の足臺の上に建て、それに四枚の幕を上から覆うてある。一番下の幕は聖幕屋の天井裏を覆ふので、赤、白、青、紫の四色に染め分けケルビン天使を織出せる最も高價な布を用る、それを天井から四方に垂らしてある。その上の三枚は山羊、羊、海馬の皮を彩色したもので、充分雨風を防げる樣に出來て居た。

聖幕屋の入口は東に向ひ、其處の帳は五本の柱の頂點に鉤を以て取付けてある。中は天井裏のと同じ帳を垂れて之を二間に仕切り、手前の間を聖所と呼び、長さ二十肘あり、奥の間は至聖所と稱し、十肘あつた。

聖所の向つて左には七枝に分れた黄金の燭臺があり、枝毎に純粹の橄欖油を注ぎ、晝間はごうして居たか判然しないが、夜間は確に七枝とも火を點すのであつた（ヨセフスに由ると書は三枝燭し）、火を點すのは「近づくべからざる光の中に住み給ふ」（チモテオ前六ノ一七）と云ふ神の幕屋を眞暗にして置くのは不似合だからであるが、また一つは神にたいする各自の心持ちを表す爲であつた。即ち人は夜も晝も神の尊前に平伏して之を禮拜し、之に感謝し、之を愛慕するの情に燃ゑきれんばかりであらねばならぬのだけれども、夫れが迚も出來ないから、燈火を以て自分を代表せしめ、よしや體は御前を離れても、心は決して離れて居ない、むしろこの燈火の如く、神の御光榮の爲に燃ゑて燃ゑて、生命も何も燃ゑきれて了ひたいと云ふ誠意を示す爲であつた。今日聖體の尊前に、夜でも晝でも燈明を點すのと道理は全く同じである。

向つて右側には合歡木の板に黄金を着せた几案があつて、その上に「供へのパン」と稱して、眞白い上等な麥粉で燒いたパンを六個づゝ二列に載せてある。是はイスラエル十二族が神恩を感謝する爲に献げる供物を意味し、安息日毎に新しいのと取換へたものだが、その取換へた舊いパンでも、たゞ司祭だけが、しかも聖所に於てのみ之を食することを許されるのであつた。

契約の櫃と至聖所

帳に近く、燭臺と几案との中央に黄金の香壇があつて、司祭は朝夕二回づゝそれに芳しき香料を焚いて神に献げることになつて居た。

奥の間は至聖所と稱し、それには契約の櫃をたゞ一個据ゑてある。契約の櫃とは合歡木の板を以て造り、内側も外側も純金で張りつめ、長さが二肘半に幅と高さが各一肘半の箱で、その中にはモイゼが神に授かつた十誡の石板二枚と、イスラエル人が毎日〳〵食して居たマンナと、芽を吹き花を咲したアアロンの杖とを藏めてある。箱の蓋は純金で造り、その兩端には二位のケルビンが向ひ合つて中央を見詰め翼を擴げてその箱を掩へる像を飾りつけてある。この蓋こそが所謂「贖罪所」と呼ばれたもので、神

は常にこゝから御旨を民に傳へたり、民の願を聽いたり、罪を赦したりし給ふのであつた。

(3)—聖幕屋の周圍は縱百肘、横五十肘の廣い庭で、屋根はないが、外側は六十本の柱をしかゝ地に突き立て、その鈎と桁とを銀にし、之に美しい色布の幕を張り廻はしてある。東側の中央に二十肘の門があつて、それを這入ると庭の中央から西に聖幕屋があるので、イスラエルの民が聖幕屋の庭に集つて祈る時は西に面する樣になつて居た。異邦人はすべて太陽を神に祀り、東に向つて之を拜む習慣があつたので、その習慣に反對するがため西に向ふことにしたものである。

(4)—庭に入つて、聖幕屋の門前に近くと、犧牲を燒いて神に獻ける爲、長さ五肘、幅も同じく五肘、高さ三肘の「燔祭壇」と云ふのがある。合歡木を骨にして青銅を着せ、四隅にはヤウエの權能と祝福とを象れる角を取付けてある。庭で獻げるお祭はすべてこの祭壇に於てせねばならぬ。よつて司祭は朝々薪を焚き添へて、夜も晝も火を絶やさぬ樣にし、香を薫らすにも必ずこの祭壇の火を用ゐるので、特に之を「燼ゐすの火」と呼ぶのであつた。(アアロンの二子ナダブとアビウは他の火を用ゐた爲に命を失つて即死したことがある)

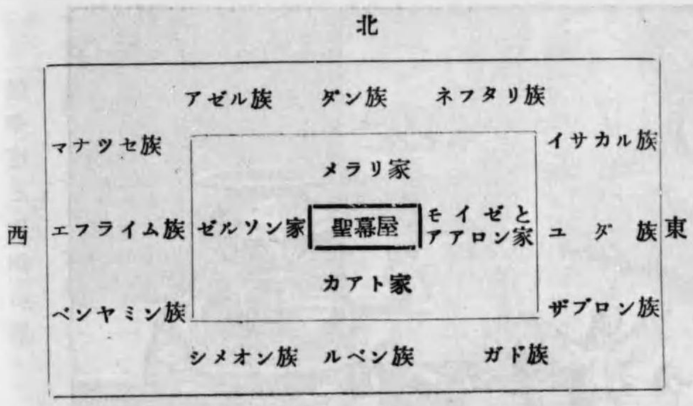
祭壇の左側のずつと離れた所に「青銅の海」と呼ばれし大きな水盤があつて、司祭は祭壇に近くか、聖幕屋に入るかする時、先づこれから水を汲み取つて手足を洗つたものである。

(5)—何から何まで完成した上で、モイゼはヤウエの御指圖に從ひ、聖幕屋を始め、一切の器具に橄欖油を塗つて之を祝聖した。すると是までイスラエル人の道案内をして居た雲の柱が聖幕屋を立てこめ、

燔祭壇と青銅の海

神の御光榮は眩きまでに輝き渡り、モイゼさへも中へは這入れない位であつた。是からは雲が聖幕屋の上に掛つて居る間はイスラエル人も動くことが出來ないで、何時までも同じ處に停り、聖幕屋を離れると、それを合圖に發足し、雲が立止れば、自分等も天幕を張つて其處に止るのであつた。出發の際にはレウイ人が聖幕屋をそれぞれに分解し、包んで牛車に乘せ、自ら監督して之を運搬する。然し契約の櫃、黄金の燭臺、供へのパンの几案香壇、其他、聖幕屋内に備へ付けてある器具だと、司祭の外には見ることも手を觸れることも出來ないので、先づ司祭が取纏めて之を叮嚀に包み、牛車にも積まないで、レウイ人に擔がせ、自分で監視して行く。停る時は第一に聖幕屋を建て、モイゼを始め、レウイ人たるメラリ、

ゼルソン、カアトの三家がその周圍に天幕を張り、更にその外側に十二族がそれ〴〵幕屋を設けて之を護衛するこゝ云ふ樣にしたものである。



前進する時は、ユダ、イサカル、ザブロンの三族が先導し、ルベン、シメオン、ガドの三族が之に從ひ、その次に聖幕屋、司祭、レウイ人が進み、エフライム、マナツセ、ベンヤミンの三族がその背を包み、後衛はダン、アゼル、ネフタリ族が引受けたものである。

教訓—聖幕屋は我等の聖堂を象り、契約の櫃は主の聖體の籠り給ふ聖櫃に該當する。して舊約時代だこ、司祭にあらざれば聖幕屋へ這入れない、契約の櫃を安置せる至聖所になるこ、大司祭に限つて、たゞ年に一回はいるこゝを許されるのであつた。然るに今は何人でも自由に聖堂へ這入り、聖櫃の前に跪かれる。固より今日こ雖も聖體拜領臺から內は「聖所」こ稱し、聖職者や聖祭に奉仕する者の外は勝手に這入れないこゝにしてあるが、何れにせよ、神の御稜威には昔も今も異る所はない。相變らず御威光限りなく在すのだから、聖堂にあつては務めて身を恭しく持ち、露ばかりも尊敬を缺く樣な事をしてはならぬ。なほ信者たるものは、住居を定めるにつけて、イスラエル人の先例に倣ひ、成るべく聖堂を中心こし、餘りそれに遠からぬ樣にして欲しいものである。

（二）教役者

（一）教役の制定—モイゼ以前には、神を祀るのに一定の場所もなければ、特に指定された教役者の階級もなかつた。家毎に戶主、或は族長たるものが司祭の職を兼ねて、犧牲を献げ、神を祀つたものである。然しそれでは神にたいする莊嚴の感も湧かず、敬神の念も燃え難い憾を免れないので、モイゼは神の仰を畏まり、專ら禮拜に當るべき特殊の階級を設け、レウイの一族に之を托した。先づ司祭職にはアアロンこその男系の子孫を充て、他のレウイ族には司祭の手傳をさせるこゝ定めた。

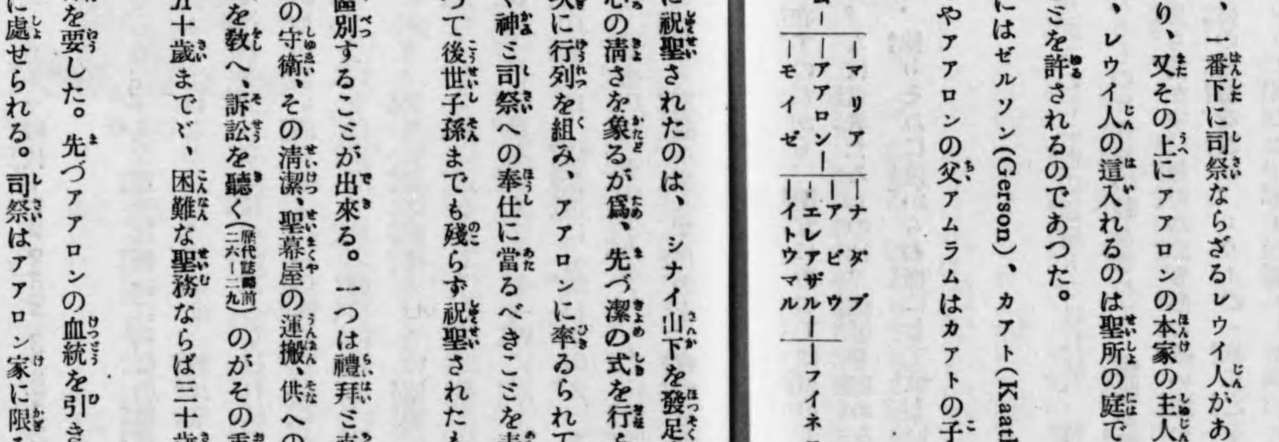
抑もイスラエルの長男は皆神の有こして、生れて四十日目に之を神に奉献せねばならぬのであつたこゝは前にも一言した通りである。然し是等が殘らず神に仕へ奉るこ云ふ譯には行かないので、神はその代りにレウイの一族をお選みになつた。して彼等も世の俗務に逐はれたり、生計のこゝを慮つたりして居る樣では、勢ひ神聖なお務を等閑にする憂があるから、後日イスラエル人が約束の地に落ち着くこゝになつても、神はこの一族に限つて土地を分配せず、たゞ彼等の住所こして四十八の都邑を各族の

間に飛び〳〵にお與へになつた。「我こそ汝等の分前だ、土地を持つ必要がない」と仰しやつて然うなさつたのである。

ヤコブの子は十二人で、その第十一子ヨゼフは家督を二人分讓られたのだから、實は十三族になつたのだけれども、常に「イスラエル十二族」と稱するのは、このレウイ族が土地の分配に與らなかつた爲めである。然し彼等とても活きて行かねばならぬので、他の十二族から毎年、收穫の十分一だけを彼等に與へることにしてあつた。

要するにレウイ族は三の階級に分れ、一番下に司祭ならざるレウイ人があつて禮拜用の手傳ひをし、その上にアアロンの子孫たる司祭があり、又その上にアアロンの本家の主人たる大司祭があつた。この三階級は正しく聖所の三ヶ所に相當し、レウイ人の這入れるのは聖所の庭で、司祭の這入れるのは聖所、至聖所には獨り大司祭のみが這入ることを許されるのであつた。

(2)レウイ人—ヤコブの第三子レウイにはゼルソン(Gerson)、カアト(Kaath)、メラリ(Merari)の三子があり、自ら三家に分れた。モイゼやアアロンの父アムラムはカアトの子で、その系圖を掲げると左の如くなる。



レウイ人がヤウエに奉仕するが爲に祝聖されたのは、シナイ山下を發足する少し前の事であつた。祝聖式の前には聖務を果すに要する心の清さを象るが爲、先づ潔の式を行ふこと三回に及んだ。祝聖式には、民の代表者が按手禮を行ひ、次に行列を組み、アアロンに率ゐられて先づ聖幕屋の門に至り、それから燔祭壇の前に行き、以後は全く神と司祭への奉仕に當るべきことを表し、最後に贖罪の祭と燔祭を行つて式を閉ぢた。この式によつて後世子孫までも殘らず祝聖されたものとして、後では一回も之をくりかへさなかつた。

レウイ人の擔當せる聖務は二種に區別することが出來る。一つは禮拜と直接關係あるもので、司祭が種々の聖務を果すのに手傳ひし、聖所の守衛、その清潔、聖幕屋の運搬、供へのパンの用意等に當るのであつた。一つは禮拜外の務で、民に律法を敎へ、訴訟を聽く(歷代誌略前二六—二九)のがその重なものであつたのである。レウイ人の執務年齡は二十五歲から五十歲までで、困難な聖務ならば三十歲からこれに當ることになつて居た(民數記、四ノ二四)

(3)司祭—司祭となるには種々の條件を要した。先づアアロンの血統を引き、之を證明し得なければならぬ、司祭職を橫領したものは死罪に處せられる。司祭はアアロン家に限ると云ふことはコレ、ダタン、アビロンの三人に加へられた嚴罰と、アアロンの杖が芽んで花を咲した奇蹟とによつて公にされた(出後)

モイゼの律法では、司祭が必ずアアロン家に出るのを必要とした。隨つてユダ族に出でしキリス

トが、司祭職に就き給ひ、その必要を無くし給ふと共に、律法そのものも廢絶に歸した。「司祭職移りたらんには、律法もまた當に移るべきなり」(ヘブライ七ー十二)と聖パウロは曰つた。イザヤも司祭やレウイ人が異邦人の間から採用されるのを「メッシヤ時代—Les temps messianiques」の一の特徴に數へて居る(イザヤ六六ー二一)

司祭は身體に一の缺點もあつてはならぬ、不具な體では絶對に司祭の聖務を果すことが出來ない。然しその爲に司祭としての收入までも失ふのではなかつた。司祭は一般民衆よりも勝れて完全な生活をなし、令聞を保ち、別ても死體に觸れて汚れを受けない樣、注意しなければならぬ。その聖務執行中は節慾の生活をなし、葡萄酒にせよ、その他の濃い酒にせよ、一切飲んでならぬのであつた。

司祭は神と人との間に於ける仲介者で、民を代表して神の御前に近き、民の爲に祈り、その罪の赦を請ふと共に、又神を代表して民の前に到り、彼等に神の祝福と、その聖寵とを分配するのであつた。

司祭は神とかう云ふ密接な關係を保ち、且つ神に選まれて、その役者となつた所から、聖書には「神の所屬」とも、「聖者」とも呼び、典禮上の聖務を果すことを「神に近く」(民數紀一六ー五)と云つてある。

司祭の務の重なのを擧げると、聖所の庭では、燔祭壇に「燼にずの火」を保持し、種々の祭を献げ、聖所内では朝夕、香壇に乳香を薫らし、黄金の燭臺の手入をし、之に燈明を點し、毎週一回、供のパンを几案の上に陳べる。盛大な祭禮の終に一同聲を揃へて民の上に祝福を祈る。民に律法を敎へ、之が講義をなし、重大な訴訟事件を裁決すると云ふ樣なものであつた。

司祭はその聖務を執るに當つて一定の制服を着けなければならぬ。それには腰より膝に至る麻の袴、上品な白色の下衣、麻を綾織にした長い帶、頭巾等があつた。

レウイ人はその受けた十分の一の又十分の一を司祭に收めることになつて居た。その他、長男を購ひ戻す爲の身代金、神に献げる犧牲の右肩と胸、お初穗、或種の償金等が司祭の所得に歸するのであつた。

(4)**大司祭**—レウイ人と司祭の上に大司祭があり、之が祝聖式は主として橄欖油を頭上に注ぐに在つた。大司祭が聖職を執る時は司祭服の上に深青色の長衣を着流す、裾には青、紫、赤の絲もて造つた石榴、及び金の鈴を取着けてある。なほその上に金青、紫、紅の絲と麻の撚絲を以て織つたエフォド(Ephod)と云ふものを着ける。エフォドは胸と背とに垂れ、二の肩帶を以て之を止めてある。

大司祭

胸にはエフォドの上に「判きの胸牌—Rationale judiecii」と云ふものを掛ける。それは黄金の槽に十二の寶石を嵌め、之れにイスラエル十二族の名を彫り込んだもので、大司祭たるものは民の必要を胸中に收めて、主の御前に立顯れると云ふことを示したものである。

判きの胸牌には別にウリム(Ourim)とトウムミム(Toummim)を入れてある。このウリムとトウムミムは、神が民に啓示し給ふ所は万に一つも誤りないのだと云ふことを表徴したもので、神はまた之を以て大司祭にその御託宣を傳へ給ふのであつた。然しそれが如何なる形のものであつたか、大司祭は之を如何に使用して主に伺ひを立てるのであつたか、聖書に明記してない。なほ大司祭の頭巾には「ヤウエに聖」と彫り込んだ純金の前立をつけてある。

平司祭の爲す所は大司祭も隨意に之を務めることと出來るのであつた。然し贖罪の日の祭典、この日、至聖所へ入つて行ふ潔の式、大問題の起つた際、ウリム、トムミムを以て神の御託宣を伺つたり、その他一般禮拜式や、聖所附屬の寶物を管理したり、各聖務の監督をしたり、宗教問題の終審を行つたりする權利だけは、たゞ大司祭のみに屬するのであつた。

アアロンとその四子が司祭に祝聖されたのは聖幕屋の建設前で、儀式は七日間續いて行はれた。モイゼは彼等に沐浴して汚を洗ひ落させ、司祭の聖服をつけさせ、聖油を注ぎ、それから罪の爲の祭、燔祭、平和の犧牲を献げ、その犧牲の血を取つてアアロンとその子供等の右の耳の端、右手、及び右足の拇指につけて、全身神に献げられたものと云ふ印となした。

なほ犧牲の一部をアアロンとその子供の手に授け、之を上下に搖り動かし、然る後燔祭臺に燒いて之をヤウエに献げた。司祭とその聖服には犧牲の血を橄欖油に混ぜて之を搖り注ぎ、終に聖餐を供して式を閉ぢた。

教訓—レウイ人、司祭、大司祭の身體や服裝に細密な規定を設けられ、その祝聖式も極めて莊重に執行されたのは、民衆に神の至聖至高にましますことを思はせ、謹み愼みてその禮拜に與らしめる爲であつた。牛や羊を犧牲とせる舊約の祭祀にさへ神は是ほどの神聖さを要求し給うたとするならば、況んや神の羔、神それ自らを犧牲として献げる新約の司祭は如何に神聖にして、信者たるものも如何なる愼みを以てその祭に與らねばならないだらうか。

(三)　聖　祭

(一)**聖祭**—祭は神の御威稜を認め、之を尊ぶが爲に献げるもので、犧牲その物を人の身代りに立て、之を燒いて煙になすか、破毀して用をなさない樣にするかに在るのである。

舊約の祭は色々あつた、その献げる物品から云ふと血祭と無血祭とに大別することが出來る。血祭とは動物を屠つて犧牲に供する祭で、その特別の目的より、燔祭、罪の爲の祭、平和の犧牲の三つに小別する。無血祭の供物は小麥、大麥、葡萄酒、橄欖油、乳香、食塩等であつた。血祭に用ふべき動物は羊、山羊、牛、山鳩に家鴿の五種に限り、しかも少しの傷すらない、完全なものであらねばならぬ。それは神に献げるのは最善のものたるべきは當然だからでもあるが、また一つは、我等の罪の爲に犧牲となり

給ふべき「罪も汚もない神の羔」を前表するのであつたからである。

是を以て觀ると祭の材料はイスラエル人の生活資料の中から採り、彼等が耕作、又は飼養せしものであり、それを失つて罪を贖ふと云ふ意義をよく示して居るのであつた。

(2) 血祭—すべての血祭に共通の儀式から云ふと、祭を献げて戴く人が犧牲を聖所の庭は「ヤウエの前に」奉呈すると、司祭は一應檢めた上で之を受取る。祭を献げて戴く人は犧牲を奉呈する時、その頭上に手を置き、自分の罪を殘らずこの犧牲に負はせ、自分に代つて贖罪をなさしめると云ふ意を表す。

次に犧牲は屠られる、既に人の罪を負はされて居るので、罪の爲に命を失ふべきその人に代りて殺されるのである。是は我等の罪を自ら背負ひ、その爲に屠られ給うたキリストを立派に象つたものではないか。

犧牲を屠る時、司祭はその血を大きな鉢に受け、祭の種類に從つて之を色々に使用するのであつたが、如何なる祭にも、その一部分は必ず燔祭壇に濺ぐことになつて居た。「血は罪を潔める爲に用ゐられ」(ヘブライ九—二二) イエズス・キリストの贖罪の血を前表したものである。聖パウロは曰つて居る。

「牡山羊、犢の血を用ゐず、己が血を以て一度聖所に入り、不朽の贖を得させ給ひしなり。蓋し牡山羊、牡牛の血、及び若き牝牛の燒灰を注ぐことは、穢れたる人々を肉身上に於て潔めて聖とするものなれば、況んや聖靈を以て己が穢なき身を神に献げ給ひしキリストの御血は……死せる業(罪)より我等の良心を潔むべきをや」(同九—一三上) と。

終に犧牲の肉は火に燒いて煙となす。我身を神に献げる、神もまたその献をお承け下さつたと云ふことを示す爲にさうするので、祭の種類によつて、犧牲を殘らず煙となすこともあれば、單に脂肪分と内臓の一部を燒くだけに止めることもあつた。

(3) 血祭の種類—犧牲を細かに刻み、之を殘らず燒いて献げ、血は祭壇の下に注ぐのを燔祭(Holocausta)と稱する。

燔祭は神を禮拜する爲に献げる祭で、たゞ神のみが何時までも生きて光榮を享ける權利を有し給ひ、人の如きは神の御前に出ては、あつても無い樣なもの、神の爲ならば、身でも命でも潔く献げなければならぬはずだ。然しそれは到底實行不可能であるから、その代りにこの犧牲を殘らず燒いて献げると云ふ意を表す爲のものであつた。隨つてこの燔祭はすべての祭の中に第一位を占め、之には雄の畜類しか用ゐない。この祭は何時になつても中止してはならぬのであつたから、「斷ねざる祭」と稱し、毎日朝夕と二回雄の羔を屠り、その肉は燔祭壇に終日終夜燒いて居たものである。燔祭には一切を煙となして了ふので、何一つ殘る所がない、たゞ司祭の有に歸するのは皮だけであつた。

(ロ) 贖罪の祭—には犧牲の血を殘らず祭壇に注ぐのではなく、種々と之を使ひ分けるのであつた。個人の罪の爲に献げる祭ならば、司祭はその血を指に染めて祭壇の四隅に觸れる。己れ自身の爲、或は一般

人民の爲に獻げる時は、その血を携へて聖幕屋に入り、七たび至聖所の帳りに注ぎ、又香壇の四隅にも之を着けたものである。「贖罪の日」(出)には、大司祭が血を携へて至聖所に入り、契約の櫃の前に七たび、贖罪所に一たび之を濺ぐのであつた。聖所か至聖所かにその血を携へ行かれた犧牲は、脂肪分を燔祭壇上に燒いた上で、皮までも殘らず營外(後では市街の外)に持ち出して燒き棄てたものである。

他の犧牲の肉は司祭の有になるのだが、然し極めて神聖なものと見做され、聖所の庭に於て、たゞ司祭のみが之を食することゝ出來るのであつた(レウイ記四、六—一二五—三〇)

この祭は「罪の爲の祭」と稱し、贖罪をその目的としたものである。之を獻げるのは、

(1)何か律法上から汚を受けた時、(例へば死體に觸れた時の如く)

(2)ほんとうな道德上の罪を犯したが、然し全く不注意に出て、惡意は少しもなかつた時、等であつた。若夫れ傲然律法を無視して罪を犯し、頑として悔める所がないならば、死罪に處せられるので、犧牲なぞ獻げてその罪を贖ふ餘地はなかつた。この祭を特色づけるのは贖罪と云ふ觀念に在りその爲には主として血を用ゐる。そして罪人の數が多いか、或はその人の地位が高い爲に、贖ふべき罪が大きいほゞ、その血は聖幕屋、或は神殿の奥には神へ近く携へ行かねばならぬのであつた。

(八)**過失の爲の祭**—(Sacrificium pro delicto)と云ふのが今一つあつた。その儀式は至極簡單で、血を祭壇の周圍に流し、脂肪分を燒き、殘んの肉は司祭に付すと云ふに過ぎなかつた。この祭に用ゐる犧牲は牡羊(時としては羔)に限り、銀二シケルの價格を有するものであらねばならぬ、過つて神に獻げられたものを自分の有にして居るとか、無意識に神の禁じ給へることを爲すとか、或は人の所有權を犯し、不義を加へるとか云ふ樣な過失の爲に獻げるのがこの祭であつた。隨つてそんな過失を犯した者は祭を獻げていたゞく外、その價額に相當するものを賠償するか、或はせめてその五分の一の償金を出すかしなければならぬのであつた。

(九)**平和の犧牲**—恩を感謝する爲、願成就の爲、或は何かの惠を求める爲に獻げるのがこの祭で、之を特色づけるのは、式後に開かれる饗宴であつた。犧牲の脂肪分を燒き、胸部は「搖り式」によつて神に獻げ、右肩は司祭に付し、殘餘の肉は祭を獻げて戴いた者が食する。固よりそれは宗教上の聖なる饗宴であつて、家族も僕婢も之に與る、貧しいレウイ人をも招待することになつてゐた。この祭の意義は「平和の犧牲」と云ふその名がよく之を顯して居る。之を獻げる時は神の親友として、主と結べる平和、親愛の關係をいよ〳〵密ならしめたいと欲して之を爲すのである。この觀念は特に式後の饗宴にはつきり見ゐて居る。この饗宴に於て、主人格は神で、祭を獻げる人は招待客、饗宴は相互間の親愛を語る象徴、又は保證であつた。

なほこの饗宴はメッシア國に特有なものとして、聖書のあちらこちらに記してある饗宴—天の御父が救靈の惠、眞理、聖寵、永遠の光榮等をその愛兒に振舞ひ給ふ饗宴を象つたものである。分けても聖體

を立派に象つて居る、實に平和の犧牲とキリストの御死去と、式後の饗宴と聖體拜領とは非常によく類似し、たゞ異る所は、聖體拜領に於て信者が戴くのは犧牲の肉の一部でなく、その全部であると云ふ點にあるのである。

(4)無血祭—は常に供物「ミンカー Minchâh」と稱し、麥穗、小麥粉、酵の入らぬ菓子、葡萄酒等を献げるにあつた。して是等の供物は必ず橄欖油を上から注ぎかけて食鹽と乳香とを添へて献げることになつて居た。常には供物の一小部分に乳香を殘らず加へて祭壇上に燒くだけに止めたもので、この一小部分を記念(Azkârâh)と呼ぶのであつた。献げた人の記念をヤウエに呼び起させる爲のものであつたからである。殘餘は司祭の有に歸する、葡萄酒は祭壇の傍に灌ぐ、司祭が自分の爲に献げる供物、殊に大司祭が毎日供へるミンカは殘らず燒いて献げるのであつた。

無血祭は燔祭、又は平和の犧牲と共に献げることもあつた。後者の中には聖所の香壇に毎日二回薰らして居た乳香、供へのパン、黃金の燭臺、燈火等があり、前者は聖所の庭の燔祭壇で献げたもので、その中でも大司祭が己と司祭團の爲に献げるミンカ、貧民が罪の爲の犧牲に代へて献げる供物等を數へることが出來る。

教訓—血祭は神を生命の本源と認める爲のものではあるが、また一つはその犧牲を罪人の身代に立たせる爲でもある。實に人が罪を犯した時は、生と死との大權を握れる神に背いたのであるから、實を云へば身を殺し、血を流して罪を謝さねばならぬ。然しさうする譯には行かぬので、せめては自分の代りにこの犧牲の血と命とをお受け下さる樣にと嘆願するのである。固より犧牲そのものだけを見れば、單に牛だの羊だの鳩だので神の御怒を宥め、犯した罪を赦して戴くだけの力があらうはずはない。だが是等の祭は他日キリストが献げ給ふべき贖罪の祭を象つたもので、之によつて自ら約束の救主に信賴し、犯した罪を痛悔する氣にもなり、以てその赦を蒙ることが出來たのである。

なほ罪の赦を求める爲の祭には、犧牲を二分して一分は神に献げ、一分は司祭に付すことにしてあつたのは、神に謝罪をするには司祭の仲介を經ねばならぬ、と敎へたものである。平和の犧牲だと、之を三分して、一分は神に献げ、一分は司祭に付し、殘は献げる人が受けることになつて居たのは、恵は神より與へられる、然し之を得るのは司祭の手續を經なければならぬ、自分でも相當の努力を拂ふ必要があると敎へられる爲であつた。

(四)　律法上の汚れと食物に關する規定

舊約の律法でも、汚れと潔さ、潔き食物と潔からざる食物に關する規定ほど、イスラエル人の全生活内に深く廣く浸み入つたものはなかつた。この細密な規定によつて、律法はイスラエル民族の衣食住の如き日常生活の末にまで及んで行つたものである。

(1)潔の式—律法に「汚れ」と定められたものは隨分多かつたが、それは道德上何等の罪をも構成せず、

たゞ或種の疾病とか、自然的出來事とか、或は通常人間の身體に見られる或種の作用とかを稱した迄に過ぎない。してこの種の汚れに觸れると、不淨な人と見做され、至聖、至潔なる神に近く權利を失つて了ふことになつて居た。この汚れを除くが爲には、種々の潔の式が設けられた。律法上の汚れには大小の別があつて、宗教上の權利の喪失も、その原因の如何によつて一樣でなく、潔の式は汚れの程度と相比例するのであつた。餘り重大でない汚れならば夕方まで聖幕屋に入る權利を失ふだけに止り、之を潔めるには、たゞ身體と衣服とを洗ひさへすれば夫れで澤山であつた。然しその權利喪失が七日、十四日、なほその上に及ぶこともある。この場合、潔めの式には必ず犧牲を必要としたものだ。律法には特に三種類の汚れを區別してある。

第一は人や獸の死體に觸れた汚れである。人の死體は、その之を覆へる衣服、その家、その家に住んで居る人、その家具（蓋をした器を除く）をも汚れたものとする。この汚れは七日間に及び、之を潔めるには單に水で洗つたのみでは足りない、赤牝牛の灰を混じた「潔めの水」を濺がなければならぬ。獸の死體に觸れるか、それを食するかした爲に染つた汚れは、其日の夕方に終るのであつた。

第二は汚れの中で最も重い癩病の汚れであつた。誰にしても癩病に侵されたものは、營中（或は都市）を出て、身には喪服を着け、全く人中に交ることを許されない。人が自分に近くと見るや「タメ—Tame—汚れた者」と呼んで、注意を促さねばならぬ。この嚴重な取締は病の身にある間、繼續するのであつて幸ひ平癒する樣なことがある時は、司祭の許へ行つてその檢閲を受け、頗るこみ入つた潔の式を行ひ、一定の犧牲を獻げることになつて居た。別に住宅や衣服の癩と云ふのもあつたが、それは果して何を指して言つたものか判然しない（レヴィ記一四、三五—三七）

第三は產兒の際の汚れで、その兒が男ならば母は七日間汚れたものとされ、それから三十三日を經た上で、自ら司祭の前に出て燔祭の爲、當歲の羊を獻げ、別に罪の爲の祭にとて、鴿の雛か鳩かを獻げる。もし家貧しくして羔を獻げるだけの資力がないならば、鴿の雛か鳩かを二羽ほど獻げる。女子が生れた時は日數を二倍にし、七日は十四日とし、三十三日は六十六日とするのであつた。

是等の規定は心を潔く保て、と教へる爲に設けられ、併せて個人衛生、又は公衆保健を謀るのを目的としたものである。

（2）潔き食物と潔からざる食物—律法には食物に關する規定もあつた。先づ動物を潔き獸と潔からざる獸とに區別し、潔からざる獸の肉は食すべからずと禁じてある。潔き動物とは反芻をなし、蹄の分れた四足類と、鰭と鱗とを有する魚類を云ひ、その他の四足類、魚類、或種の鳥類、蝗以外の昆虫類はすべて潔からざる動物で、その中でも特に嚴しく禁じてあるのは豚の肉であつた。なるほどモイゼはこの禁止を特記しては居ない、たゞ潔からざる動物の中に列擧した迄に過ぎないが、然し後世に至つて、國民が次第にその禁止を重く視る樣になり、之を破るのはモイゼの律法にたいする背信行爲だ、ユデア教を棄

てるのも同然だと見做す樣になつて來た（イザヤ六五―四　マカベー後書六―一八）、是はまた如何なる理由に基くのであつたかと云ふに、多分豚の肉が他の禁斷の肉よりも遙に美味で、しかも異敎徒が神を祭るにも祭禮後の饗宴にもよく之を使用して居たからであらうと云ふことである。潔き動物でも、もし病に罹るか、怪我をするかして死んだ時は食すべからず、同じく偶像に獻げた肉も食してはならぬ、之を食するのは偶像崇拜に加担する所以だとされた。動物の血や、主に獻げられた犧牲の脂肪分やを食することも同じく嚴禁され、犯すものは死罪に處せられるのであつた。

敎訓―潔き動物と潔からざる動物と區別を立てたのは、象徵的理由に基いたもので、異邦人に遠かれ、彼等と行動を共にするな、と絕ゑずイスラエル民族を警告する爲であつた。主は宣うて居る、「我は汝等の神ヤウエにして、汝等を他の民より區別てり、……汝等は我が汚れたるものとして區別たる獸、又は鳥、又は地に匍ふ諸の物をもて汝等の身を汚すべからず。汝等は我が聖なるものとなるべし、そは我ヤウエ聖にして、汝等を我所有となさんとて、他の民より區別したればなり」（レウイ記二〇―二四以下）と。されば イスラエル民族は潔き民で、異邦人はすべて汚れた民と視做され、甚しきに至つては、「犬」とさへ呼ばれたものである（マタ五―二六）だから後日異邦人が基督敎に召されたことを、食物に關する律法の廢絕だと聖ペトロは見て居る位である（使徒一〇―一一行）

（五）祝祭日

（1）**祝祭日一般**―毎日聖所に香を薰らし、庭では燔祭を獻げる外に、また一定の祝祭日が定められ、盛大な禮拜式を行ふことになつて居た。祝祭日は（1）安息日、（2）過越祭、ペンテコステ祭、幕屋祭の三大節、（3）贖罪の日とであつた。ヘブライの曆の上で非常に重大な役割を演ずるのは七と云ふ數字で、一週の第七日は安息日、一年の第七月は安息月、第七年は安息年、七年を七倍した翌年は大赦の年、幕屋祭と贖罪の日は七月に當り、ペンテコステは過越祭から七週目の翌日で、過越祭と幕屋祭とは七日間つゞいて行ふのであつた。

（2）**安息日**―一週の第七日は主に獻げられた日で、之を聖とすべきことは十誡の中に規定されてある。安息日と稱するのは一切の勞働を休まなければならないからで、背いたものは石殺に處せられる。マンナを拾ひ、薪を採り、火を焚きつけ、食物を調理することさへ許されない。其等の仕事はすべて前日に濟して置かねばならぬ所から、金曜日を稱して「用意の日」と呼ぶ樣になつた。奴隷の外人だらうと、情なき駄馬だらうと、この安息に均霑する。贖罪の日を除くと、他の祝祭日には、さほどまで嚴重に勞働を禁じてなかつた。

バビロン囚擒後、安息日の規定はますゝ嚴重となり、窮屈にして、しかも全く律法の精神に遠かつた、笑ふべき形式主義に流れて了ひ、キリストから幾回となく非難された位である。

安息日に特有な禮拜式は、正午に二頭の羔を燔祭に獻げるのと、供のパンを取換へるのと、この二

つであつた。一般民衆の爲には勞働を休む外に何とて命ぜられた務はなかつたが、然し彼等とても、たゞごろ〳〵と寢て遊んでこの聖日を過したのではない、殊に後で到る處に會堂が設けられる樣になつてからは其處に集つて祈禱をしたり、聖書の講義を聽いたりしたものである。安息日は金曜日の夕方に始まつて其日の夕方に終るのであつた。

安息日は神が天地を創造した上で御安息になつた紀念の爲に設けられたものである。イスラエル人が神の勞働と安息とに倣つて、勞働もし、安息もしたのは、我身はもう神の所有に屬するのだと云ふことを認める譯になる、安息日は又この世の勞働の後、人に與へらるべき樂しい〳〵天の安息の象であり、その安息を前以て味つて見る樣なものであつた。

(3)—月毎に新月の見ね出したその翌日には、平日の朝夕兩回の祭の外、特別の燔祭を行ひ、以て神を禮拜し、その御惠を感謝するのであつた。是は新月その物を禮拜む風習が異邦人の間に行はれて居たので、民がそれに引かれない樣に定めたものである。新月の中でも七月一日、(今の九—十月は)殊更ら盛大に祝つたものである。

(4)**安息年と大赦の年**—七日に一日を聖とするが如く、七年に一年を聖として、之を「安息年」と稱し、土地に安息を與へ、全一年間は耕昨も播種もせず、葡萄園や橄欖樹にも手入れをしない。獨手に生じたのは穀類にせよ、葡萄、橄欖にせよ、何人に限らず、殊に外人及び貧困者は隨意に取つて食べることが出來る。主人と雖も之を摘んで食べるだけは可いが、例年の如く收穫れて貯へることは許されない、聖書には此年を「土地の安息年」(レウイ記二五—四)と呼んである。債權者もこの年に限つて支拂を請求することが出來ない、この年の幕屋祭に國民は聖幕屋の庭に集つて、律法を讀み聞かされるのであつた。

安息年を七たび重ねた四十九年目の翌年は「大赦の年—Yobê—ljubilaire」と稱する。前年(四十九年目)の贖罪の日に司祭は喇叭を吹き鳴して、全國民に之を通知して置く、やはり安息年も同樣に種を播いたり、葡萄や橄欖の手入をしたりしない。イスラエル人で奴隷となつて居るものは、免されて自由の身となる、借財は悉く帳消しにされる、賣渡した田林家屋も、無償で故の主に返還されるのであつた。然し安息年と大赦の年と二年も重ねて土地を息ましては、何を食べて生命が繋げるのだらう、當然こんな難問が起らざるを得ない。神は豫めこの難問に答へ、

「我命じて第六年に恩澤を汝等に施し、三年分の果を結ばしむべし」(レウイ記二五—二一)

と御約束になつた。この制度を定められたのは、富者が貧民の所有を卷き上げて、いよ〳〵大きくなり、貧民は削られてます〳〵小くならない樣、又一は最初に分配された境界を永くそのまゝ維持し、國土の所有權は神の掌中に在つて人の隨意になるものでないと云ふことを明にするが爲であつた。

イスラエル人の奴隷を解放するのは、イスラエル人その者が既に神の奴隷であるからで、「是れイスラエルの子孫は我僕なるに因る、彼等は我僕にして我がエジプトの地より導き出せし者なり」(レウイ記二五—四二)

と、神も宣うて居る。終に大赦の年は、世の終に於ける「萬物の回復の時代」(使徒行三二一)を偲ばせるのであつた。

(5)**祝祭日**—年中の祝祭日の中にも、過越祭とペンテコステと幕屋祭はイスラエルの三大節で、男子たるものは、別に已むを得ざる事故のない限り、皆聖幕屋(後ではエルザレムの神殿)の庭に集つて、その祭典に與らねばならぬ、婦人と十二歳以下の子供は隨意に托せてあつた。この巡禮は宗教上、政治上の一致を大々的に表明すると共に、その觀念を長養するのに與つて大に力あるものであつた。

(イ)**過越祭**—はエジプトの奴隷を遁して戴いた紀念祭で、アビブ月(後ではニサン月と云ふ)の十四日の夕方から二十一日の夕方まで都合一週間つゞいて行つたものである。その間は全く酵を入れないで燒いたパンだけを食するのであつたから、「酵なしパンの祝祭日」とも稱した。

十四日の午後には、聖所の庭に於て羔を屠り、その血は司祭が受けて之を祭壇に灑ぎ、脂肪は燒いて神に献げる。肉は携へて自宅なり、宿所なりに歸り、二本の棒を十文字に渡して之を丸燒きにし、その骨を折らない樣にして、酵なしパン、苦い野菜を添へて之を食する。最初は帶を締め、靴を穿き、杖を手にし、旅立の裝束をして食べるのであつたが、後になると、この習慣は廢れて行はれなくなつた。過越祭の七日間は常例の犧牲の外に、毎日二頭の若い牛、一頭の牡羊、七頭の羔、及びその他の供物を献げることになつて居た。この一週間は酵の入つたパンを用ゐることが出來ない、背く者は死に處せられるのであつたから、十三日からパン酵は一切片付けて了はねばならぬ、勞働を休むのは十五日と二十一日の二日だけで、十六日には穀物の初穂一束と當歳の牡羊一頭を燔祭として神に献げるのであつた。

(ロ)**ペンテコステ**—過越祭から安息日を七つ數へたその翌日がペンテコステの祝祭日である。ペンテコステとは五十日の義で、過越祭から五十日に當るから然う呼んだものである。この祝祭はたゞ一日だけで固より勞働を休み、聖所に集會して、神を祭り物を献げなければならぬ。この日は又收穫の祝祭で、麥の收穫の終つたにつけ主の御惠を感謝するが爲、新麥で製したパンを二個ほゞ献げたものである。猶この日はシナイ山に於て律法を授かつた紀念日でもある、ユデア人間には言ひ傳へられてあつた。

(ハ)**幕屋祭**—幕屋祭はイスラエル人が四十年間荒野に彷徨つて、天幕住居をしたことを紀念する爲の祝祭で、秋の果實、葡萄等の收穫を終つた第七月(チスリ—Tisri月と云ふ、今の九—十月)の十五日から全八日間之を行ふ。この間イスラエル人は、圓屋根の上や路傍等に柴の假小屋を作つて之に住み、澤山の犧牲を献げ、盛に之を祝つたものである。第一日と第八日とは勞働を休まなければならぬ、安息年だつたら第一日には律法の朗讀をするのであつた。

バビロン囚擒後は更に三日間祝祭を長くし、水の灌奠と婦人の庭のイルミネションと二個の儀式を新に加へた。水の灌奠は多分イザヤ預言書に「汝等喜もて救主の泉より水を汲むべし」(イザヤ一二一三)と言つてあるのに因んだものであらうか、司祭は毎朝、燔祭の時間に、黄金の釣桶でシロエの池(エルサレムに在り)より水を

汲み取つて、之を燔祭臺に灌ぐ、すると群衆は感謝の詩を歌ひ、樹枝を打振りて躍り悅び、荒野に於て岩から淸水を流し、民の渴を醫し給うた御惠を讃美するのであつた。キリストはこの儀式より話の緒を取つて「渴ける人あらば、我許に來りて飲め、我を信ずる人は、活ける水の川その腹より流れ出づべし」(ヨハネ七―三七)と宣うたことがある。

又聖所の庭の一部には婦人の集會に充てられたのがあつて、其處に高さ五十肘の燭臺を二本たて、幕屋祭中は每夜之に火を點すのであつた。キリストは是からも話の種を取つて「我は世の光なり、我に從ふ人は暗黑を歩まず」(ヨハ八)と宣うたことがある。

(6)贖罪の日―チスリ月の十日、幕屋祭の五日前を贖罪の日(Yôm Kippour)と呼び、特にすべての業を休み、嚴い斷食をなし、九日の夕方から十日の夕方まで一切の食物を口にしないのであつた。この日こそイスラエル民が一年中犯した罪を贖ひ、その赦免を願ふのであつて、大司祭は制服を着けて朝の燔祭を献げた後、贖罪の聖式を執行し、罪の爲の犧牲を二回ほど献げる。一回のは司祭の罪の爲で、それには若い牛を犧牲とし、二回目のは民の罪の爲で、よく揃つた二頭の牡山羊を献げる、兩回ともその祭が濟んでから、更に羊を燔祭に供したものである。

今その聖式をかい摘んで記すと、大司祭は身を洗ひ淸めた上で、純白な司祭服を着け、牛の頭上に兩手を置いて、自分と全司祭團の罪を告白する。次に籤を抽いて、二頭の牡山羊を「ヤウエの山羊」と「逐ひ立ての山羊」とに分ける。「ヤウエの山羊」は民の罪の代りに犧牲として献げる爲のもの、「逐ひ立ての山羊」は民の罪を負はされ、荒野に逐ひ立てる爲のものであつた。

それから大司祭は自分と一般司祭團の爲に小牛を屠つて置き、至聖所に入つて黃金の香爐に乳香を二摘ほど入れ、贖罪所をその芳しい煙に薰らせる。次に一應出て來て小牛の血を取り、再び至聖所へ入つて贖罪所に一たび、契約の櫃の前の庭に七たび指を以てその血を振りまく、それを終つてから再び至聖所を出て、「ヤウエの爲の山羊」を屠り、その血を携へて三たび至聖所へ入り、前回と同樣にその血を濺ぎ、民の罪の爲に汚れて居るのを潔め、夫れから聖所に出て、小牛の血と山羊の血とを混ぜたものを香壇とその前の庭に濺ぎ、終に聖所の庭なる燔祭壇をも同じ樣に潔める。

斯く一切を潔め終つてから、「逐ひ立ての山羊」を引出して來て、兩手をその頭に置き、イスラエルの民の罪、不足、過誤を悉く告白して之に言ひ被せ、然る後、人に曳かせて荒野に逐ひ立てさせる。それが終ると、大司祭は制服を着けて二頭の牡羊を、一頭は自分の爲、一頭は民の爲に犧牲に献げ、小牛と罪の爲に献げた山羊の脂肪分は燔祭壇に燒き、その他は肉も皮も殘らず營外に持ち出して燒き棄てるのであつた。

聖書には是等の典禮の意義を說明してある。この日には全イスラエルの罪を潔めるのであつて、その爲に「罪の爲の祭」を献げ、且つ犧牲の血を濺ぐ、そして潔むべき罪が重くて多いから、如何なる祭禮

に於てよりも、その血を神に近く携へ入る、贖罪所と祭壇の四角に血を塗るのは、人の罪を潔める爲、庭に濺ぐのは祭禮場を潔める爲である。罪を悉く赦されたと云ふことを手に取る如く見せるのは、「逐ひ立て」の山羊の聖式であつた。民のすべての罪を負はした上で之を荒野へ逐立てるのは、神の民たるものは罪を何よりも厭ひ嫌ふと云ふことを示したものである。隨つてその山羊が再び舞ひ戻つて來ない樣、之を遠く逐ひ立て、何處までも逐ひ立てゝ惱ましたものである。後ではエルザレム附近の高い岩の上から突き落すのであつたと云ふ。

教訓—ヘブライ書には「贖罪の日」の儀式に含まれた象徴的意義を說明してある。この日こそイエズス・キリストが全人類の罪を贖ひ終りし曉を象つたものだ、然し影と實物との相違は非常なものである。舊約の大司祭は獸の血を携へて地上の至聖所へ入るのであつたが、イエズス・キリストは己が血を携へて眞の至聖所たる天國へ入り給うた。舊約の儀式は年内に犯した罪を肉體上に於て潔めるに過ぎなかつたが、イエズス・キリストはその贖罪的御血を以てすべての人の罪を永久に潔め給うた。この潔めの結果、天國の門は我等の爲に開かれた。「新にして活ける道より聖所に入るべきことを確信し得るに至つた」(ヘブライ一〇—二〇)、之に反して舊約の大司祭は獸の血を献げるのみであるが、人に罪の赦を得させることが出來ない。是れ天國の象たる至聖所が民の爲に閉され、之に入ることを許されなかつた所以である。爲に贖罪の式は毎年之を繰返さねばならなかつた。却つてキリストは「たゞ一度己が人性を犧牲に供し、己が血を以て至聖所に入り、不朽の贖を得させ給うたのである」(ヘブライ九—一二)

今一つ立派な象がある、即ち獸の血は大司祭によりて聖所の内へ携へられるけれども、軀は營外に燒かれる。イエズス・キリストがその血を以て民を聖ならしめん爲め、エルザレムの都門外に苦を受け、御死去あそばさるべきことを極めて鮮に見せたものではあるまいか。

參考（1）律法の目的とその重要さ

（イ）—聖トマスの說によると、律法がイスラエル人に與へられたのは一にメッシア（キリスト）の爲で、彼等はメッシアがその中より生れ給ふべく選まれた民であるから、特に聖なる民となり、神と親密に一致し、その聖意によつて規定された生活をなすこそ至當であつた。されば律法はイスラエルの民を敎養訓育して、キリストの齎し給ふべき眞理と聖寵とを蒙るに堪へるだけの準備をなさしむべく與へられた、「律法は我等をキリストに導く指導者となれり」(カラチア三—二四)と聖パウロも曰つて居る。

（ロ）—この目的を貫くが爲、律法はその敎義、その道德的規定を以てイスラエルの民を保護し、信仰上の誤謬に陷らしめず、道德上の腐敗をも免れしめた。儀禮を以て神に相應はしき禮拜を献げしめ、信仰、道德を維持する爲に堅實な支柱を與へ、僅な違犯をも嚴重に處罰してその目的の實現を確實ならしめた。斯くて聖パウロも曰つた如く、「彼等は律法の下に閉籠められて」眞の神の知識を得、その知識に相應しき生活をなし、以てより完全なる生活、キリストが啓示し給ふべき夫れに合致せる生活をなすべく準備されたのである。然しながらこの點に於て律法の重要さを餘り誇大視してはならぬ。

イスラエル人は律法を授けられて居ながらも、多くは信仰によつて活きると云ふまでに達し得なかつた。律法はこの目的を貫かしめるだけの力がなかつた。實際律法には煩はしいほど詳細な規定があり、しかも嚴重な制裁さへ添へてあつたが、之を全うする爲の道德力を與へないので、たゞ律法によつて罪の意識が得られるのみであつた。然し律法のこの不完全さが救主を俟ち設ける爲の準備となつた、人々は己が底知れぬ罪の淵を覗いて、救主にたいする憧憬を盛んならしめた。律法が力の弱い割にかへつて嚴烈なるを思つては、いよ〳〵その救主を俟ち望むに至つたのである。（ローマ書）

（八）―律法はメッシアを證明すると共に、信仰と希望とを燃させ、以て之を俟ち受けるの準備をなさしめた。

蓋し律法はその象徴的特色を以て、キリストを證明して居る。實にその諸制度はキリスト及びその贖罪を預言したもので、就中その儀禮はキリストの象徴たるべく定められたものであつたから、聖パウロは之を「將來の惠の影」（〇一一）とか、「眞實のもの、象」（九一二四）とか呼んで居る。この點に於て律法の諸制度は預言者がキリストに關する預言をなす時と同じ目的を逐つて居る。たゞ預言者は言葉を以てし、律法は事實を以てして居ると云ふ別があるのみである。無論律法の告げる所は、預言者の言葉ほど明瞭でないが、然し國民の宗教生活により深く浸み入つて居る。不明瞭だとは云つても、預言者のメッシア的預言によつて補足され、明瞭にされ、解説された。その預言はキリストの時が近まるに隨つていよ〳〵鮮明となり、終に洗者ヨハネがそのメッシアを指示して「看よ、神の羔を、看よ、世の罪を除き給ふ者を」（一一二九）と云つたその言葉に於て完成されたのである。

（二）―舊約の律法が新約の夫れを象るものとするならば、双方の間に類似點が存することは言ふまでもないが、然し影と實物と、完全と不完全の相違をも認めなければならぬ。舊約の不完全さはその無力にして自ら聖寵を施し能はぬ、たゞその聖寵を準備するに過ぎなかつた點にある。しかもその行はれし範圍は、イスラエル一國に限られ、時間の上から云ふと、キリストの御死去と共に終を告げなければならぬのであつた。

なほ舊約の制裁は現世的で、その忠實な遵奉者に約束する報酬は、約束の地を平穩裡に所有するだけに止るのであつた。却つて新約は、約束の地を以て象られる天國を約束して居る。聖トマスは曰つた「完全なる人は現世を輕じて靈生上のことに愛着するのだが……不完全な人は現世的幸福をば、神を目的として願望するものである……だから舊約は不完全なる人々の願望せる現世的幸福によつて、人を神の御許へ案内すると云ふのが適當して居たのである」と。

（ホ）―律法の遵奉が神の御眼に如何なる價値を有せしかと云ふことを判斷するには、律法の命ぜる外部の業と、その業によつて表現される內心の感情とを區別しなければならぬ。主とすべきは內心の感情で、夫れさへあれば神の聖意を喜ばせ奉るのに十分であつた。故に詩篇作者は「汝燔祭をも悅び給はず、神の求め給ふ祭は碎けたる靈なり、神よ、汝は碎けて謙れる心を輕しめ給ふまじ」（詩篇五〇一八）と歌つて居る。されば たゞ表面上律法を守るだけに神は滿足し給はぬ、否、預言者の言ふ所によると、純然たる外的禮拜は欺瞞であり僞善である。神は之を厭ひ嫌ひ、むしろ嘔吐を催し給ひ、イザヤの口を藉りて「この民は口をもて我を敬へど、その心は我に遠かれり」（イザヤ二九一三）とか、「ヤウエ曰ひけるは、汝等が獻ぐる多くの犧牲は我に何の益かあらん、我は羊の燔祭と牡牛の脂肪とに飽けり……新月及び安息日、又會衆を呼び集ることも我が厭ふ所なり」（イザヤ一〇一一五）と宣うて居る。

之に反して心から律法を遵奉するならば、否、遵奉その物が内心の表明であると云ふならば、それこそ神の御眼に喜ばれ、「芳しき香の燔祭」(一一七)ともなるのである。その意味から云ふと律法の遵奉は單なる心の感情に優さること幾等なるかを知らない。

(ト)―義とせられるにつけて律法は如何なる効果を有せしかと云ふに、聖パウロは「人が律法によつて神の御前に義とせられざることは、義人は信仰によりて活く、とあるを以て明なり」(ガラチア三―一一)とも「牡牛と牡山羊の血を以てしては罪を除くこと能はざるなり」(ヘブライ一〇―四)とも明に斷言して居る。

この斷言は舊約の教へる所と全然相反して居る樣に思はれる、誰かの爲に祭を献げると、神はその人の罪を赦し給ふ、とレウイ記(四―二〇、二六―三〇)には明記してある。贖罪の日の條には「この日に汝の贖、すべての罪の潔めが行はれ、汝等は主の御前に潔められしものとなるべし」(レウイ記一六―三〇)とある。

然しこの潔めは舊約の祭の直接の結果として觀る時は、單に律法上の潔めで、罪の爲に神と外觀上の關係が斷れて居たのを再び繋ぎ合せると云ふ迄に過ぎないのであつた。

でも律法は人の義とせられるのを助け、間接にその義を得せしめることが出來た。即ちその祭はキリストの献け給ふべき十字架の祭の象徴であり、相當の志を以て之を献ける時は、將來のメッシアにたいする信徳行爲となり、それによつて始めて罪を赦され、義とせられるのであつたのである。

(2) モイゼの律法とハムラ法典との比較

(イ)―モイゼの法典は四境民族の風習と何等の交渉も無いものだつたらうか。シナイ山に於ける律法の發布以前にイスラエル人が實行せる風俗習慣を修正補足して、之を其律法中に保存したのも少くは無かつたぢやあるまいか。教父中にもオリゼネス、エウゼビウス、聖エロニムス、聖ヨハネ金等ロはモイゼの律法中に他民族の風習が採用せられあることを認めて居る。殊に一九〇一年、ハンムラビ法典の發見以來、兩者の比較研究が盛に行はれ、モイゼの律法はハンムラビ法典に負ふ所があるらしいと言ふ疑さへ起つて、頗る興味深い議論の花を學者間に咲かして居るのである。

ハムラビ法典が堅固な石柱に刻まれたもので、その石柱が一九〇一年に發掘されたことは既に一言した所であるが、その石柱の上部には日の神が玉座に就き、卷物の如きものを差出し、ハムラビ王がその下に恭しく起立禮拜して之を授つて居る狀況を描き、以て神授的法律の威信を示さんとせるものゝ樣である。殊にその末文には日の神の託宣により、正義の王として立法する旨を附記してある。

(ロ)―石柱の發掘後、シエール師(Scheil)は直にその文を飜譯して之を公にした。間もなくこの法典とモイゼの律法との比較研究が起り、スタンレー・エ・クク氏(M. Stanley A. Cook)、ミュレル氏(D. Muller)、グリム氏(H.Grimme)等、各々その研究の結果を發表して居る。

我等は詳細に亘つて兩者を比較して見るの餘裕を有しない。たゞ一口に云へば、抽象的原理によらず、寧ろ具體的に、個々の問題を規定せる點は双方ともよく類似して居る。然しハンムラビ法典は民法と刑法とをつき雜ぜた樣なもので、實利主義の立場から立案し、所有權の確保をその主眼としたものである。小作法、灌漑、及び耕作、人や牛馬の貸借、勞働者の賃金、醫師の謝禮、奴隷の賣買、商品の取引、結納、贈與、遺産相續等につき極めて精密な、隨分と進んだ法制を定めてある所から以て見ると、當時のバビロンが如何に高度の文化に達して居たかは察するに難からぬのである。

然しハンムラビ法典は、倫理的見地に立ち、人を愛すると云ふのを基調として編纂したものでは

ない。人の物を貪ることか、良らぬ望を燃すことかするのを禁じないのみか、神前賣淫の如き不道德行爲すらも是認して居る。不義不正を禁絶するのに、一も宗教的理由を持ち出して居ない。モイゼの律法に殆ど毎條、「我は汝等の神ヤウエなり」(一九章)と云ふ語を添へてあるのから以て見ると、雲泥萬里ごころの話ではない。……「否、是は民法だ、司祭の爲には別に宗教的法典があつたらうから、たゞ此點だけを捉へて優劣を論じてはならぬ。」と或は反對する人かあるかも知れぬ。然しモイゼの律法だつて、民衆の爲に發布したもので之が偉大なる所以は、その理想とせる所、その之を遵守すべき動機にあつて存する。年代から見てもハンムラビ法典に最も近い契約篇(出埃及二〇ノ二―二三ノ三二)の如きすらも、宗教的、且つ道德的色彩を十二分に溢らして居る。例へば出埃及記第二二章ノ二五節に、利息を取つて金錢を貸すことを禁じあるのは、貧民を憐むの餘りに出たもので、少しでもバビロンやエジプトの影響を蒙つた跡が見ゐない。殊にモイゼが晩年の作たる申命記には、神を愛し、人を愛し、弱き者、寄るべなき者、奴隷、捕虜、外人、寡婦、孤兒等を憐み、禽獸をも愛護する樣」(申命記二二ノ六七二五ノ四)に命じ、異教者の祭禮を汚せる不道德行爲の如きは嚴しく之を禁じてあるのを以て見ても、蓋し思ひ半に過ぎるであらう。

ハンムラビ法典には奴隷に關する規定も少からず見受けられる、然しその奴隷の賣買、解放から、損害を加へた時の辨濟、賠償等に至るまで、すべて主人の利益を計るのを旨としたものである。主人の虐待に對して奴隷を擁護する爲の條項としては一つもない。奴隷が反抗すると、主人はその耳を削ぎ棄てる權利を有したものだ。モイゼの律法は之とは大に趣を異にして居る。若し主人が奴隷を撲つて眼玉を飛出させるか、齒を一本でも折るかしたならば、その代償として之を自由解放しなければならぬのであつた。(出埃及記二一)、申命記には「その主人を避けて汝の許へ逃來たる奴隷を主人に交すべからず」(ノ申命記二三ノ六)と注意してある。奴隷を以て主人の虐待を逃れんと欲する然憫な人間と見做して居るのだが、ハンムラビ法典は、逃亡せる奴隷を庇うた人に對して死を宣告して居る。奴隷の人格を認めず、之を物品扱ひにし、隱匿罪に問うたものではあるまいか。尤も負債の爲に身を賣つて奴隷となつた者は、滿三年の後は自由の身となるべく定めてある。是なごは「七年目毎にイスラエルの奴隷を自由にすべし」と規定せるモイゼの律法に比して、寧ろ一日の長があると謂はなければならぬ。

要するにモイゼの律法は、神の思召を尊重すると云ふのを立法の根本精神とし、正義と博愛とを旨としたものである。この點から云ふと、ハンムラビ法典は到底足下にすら寄附き得ないのである。

(八)―モイゼの律法はハンムラビ法典に負ふ所あるかと云ふに、アッシリア學者間にも異論紛々たして、今なほ決定して居ない。ジョーンストン氏(M. C. Johnston)の如く直接の從屬關係を主張せる學者もあるが、ケンブリッチ大學のジョーン博士(C. W. M. Johns)は、單に間接關係の存在を認めるに過ぎない。間接關係とは斯うだ。

幾世紀前からハンムラビ法典は小アジア、バレスチナ、シナイ半島にも淺からぬ影響を及ぼしたもので、其中の幾條項かは彼地方住民の法典中に取入れられる樣になつたのだ。ハンムラビ法典と云つても、悉くハンムラビ王の發案創意になつたものではなく、古くからバビロンや小アジア地方に行はれし舊慣を採錄編纂したのも少くは無い筈であるから、兩者の間に少くも間接の從屬關係があつたことだけは認められぬことは無いと云ふのである。

然し是とても一個の臆說たるに過ぎない。畢竟するに眞理は中庸に在つて存する。著しく類似し

た點があるからこて、直に從屬關係を叫んでは固より早計に失する。ク氏(M. S. A. Cook) の如く精細に研究を重ねた學者は、双方の類似點をば、兩民族が祖先を同うせるのに歸して居る。

抑もヘブライ民族はモイゼの時に突如として世に顯れ出た新民ではない、彼等は過去の世界に深い根底を有し、バビロン民族こ其祖先を同うせるのであつた。彼等は幾世紀の間エジプトに居住して居たこは云へ、ゼッセンの地に別世界を造り、務めてエジプト人この雜居を避け、彼等こは殆ど沒交渉であつたから、その影響を蒙ることも案外少かつた。恐らく自分等の間に統率者を置き、判事を立て、一定の法律を設け、立派に自治制を行つて居たではあるまいか。安息日の制、潔い獸と潔からざる獸との區別、割禮、婚姻に關する習慣、殺人犯や姦淫罪に就いての罰則等は、早きは洪水前から、遲きはアブラハム、イザアク、ヤコブ時代から彼等の間に行はれ來つたものである。

殊に彼等の太祖アブラハムはカルデアのウルに生れた人で、當時彼地方に行はれ、ハンムラビ法典にも採錄された幾多の慣習は、カナアンに移住してからも決して之を放擲せず、家法こしてそのまゝ之を子孫に傳へたに相違ない。でモイゼも是等の舊慣古法を廢棄した筈がなく、たゞ宗教上の必要こ他日カナアンの地に土着した場合こを顧慮して、多少の修正を之に施し、以てその律法中に編入したものこ思はなければならぬ。是等の慣習法は既に多くの年代を閲せる上に、民族の生活狀態こ其性格こにシックリ嵌り、中には著しく常識に富み、公正の觀念に秀でたのも少くはなかつた。兎に角モイゼの律法にはカルデアの舊慣を少からず採用してある。婚姻法や反坐の刑の如きは兩者の類似が餘りに顯著で、單にモイゼの律法がハンムラビ法典の影響を蒙つたこ云ふだけでは到底說明が出來ない。何うしても其所により舊い、より一般的原因が伏在せねばならぬ。ドミコ會のルイ師(P. R. Louis. O.P)も言へる如く、「兩法典は同一源泉から路を異にして流れ出たもの」こ言ふより外はないのである。

(二)—然し兩法典の同一條項に就いて之を詳に點檢するこ、双方の間に往々著しき相違點が發見される。ハンムラビ法典は餘程進んだ社會の爲に編纂されたもので、行政上、中央集權が頗る强大であつたここが伺はれる。之に反してモイゼの律法はなほ原始的習慣を保持し、水草を追つて移轉せる質朴簡素な、未だに遊牧民の境を脫却し去らない民衆の爲に制定された跡が歷然こ見ゐ透いて居る。二三の條項に就いて言へば、ハンムラビ法典がモイゼの律法に優ること萬々である。モイゼの律法以上に堅く一夫一婦制を保持し、妻にも離婚を要求する權利を認め、子女に對して寡婦の獨立自主を確保し、身を賣つて奴隸に沈めた者の爲に、モイゼはその使役を六年こ定めたのに、ハンムラビは三年に限つて居る。然し負債を償却するが爲に夫が其妻を賣るの權利を認めて居るが如きは、モイゼの夢想だもなし得ざる所である。

之を要するに、民法上に就いて言へば、モイゼの律法はハンムラビ法典に可なり遲れを取つて居る。たゞ宗教上から見てハンムラビ法典の公認せる或程の不道德行爲、迷信的探湯、魔法等を禁絕せる點は遙に優る所があるこ謂はなければならぬ。

第二十八章　シナイ山からカデスまで

(一)民勢調査—イスラエル人はシナイ山の麓に天幕を張り、一ヶ年餘りも滯在した。この邊は半島中でも、水こ云ひ、牧草こ云ひ、最も豐富な處である上に、南西には高い山が天然の屏風をなして欹ち、北西